
三重の異界の使い魔たち

ドッカノダレカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三重の異界の使い魔たち

【Nコード】

N5217U

【作者名】

ドツカノダレカ

【あらすじ】

数奇な運命と、雪風の二つ名を持つ少女、タバサ。彼女が春の使い魔召喚の儀でしたのは、3つの異世界との交わりだった。ハイラル、タルミナ、そして地球、三重みえの異界からやってきた、一風変わった使い魔たち。彼らとの出会いは、果たしてタバサをどこへ導いてくのだろうか。ボタンの掛け違いから始まった、本来ありえない歴史の物語。どうぞお楽しみください。*クロスオーバーが認められない方、タバサ×才人を受け付けられない方、ご都合主義が嫌いな方、ゼルダの伝説シリーズのネタばれが嫌だという方は、ご注意

ください。(2ちゃんねるの「あの作品のキャラがルイズに召喚されました」にも投稿しております。)

くプロローグ

半島状の大陸からなり、大きく5つの王国が存在する土地、ハルケギニア。その西部に位置する、旧き時代からの伝統を重んじる王国、トリステイン。

この国の貴族の中でも筆頭とされるヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、今人生の転機とも いうべき儀式の最中にあつた。

ここはトリステイン魔法学院。その名の通り、魔法を使えるメイジ、即ち選ばれた力を持つ存在たる貴族たちに、魔法の術を学ばせる場所。

そして今日という日は、そのメイジのパートナーである、使い魔召喚の儀式の日だった。

「ミスタ・グラモン、前へ！」

「はい！」

引率の教師コルベルに、クラスメイトの名が次々と呼ばれていく。それとともにルイズの鼓動も早まっっていく。

大丈夫、きつとうまくいく…やってみせるんだから…

手にした杖を握りなおしながら、必死に自分に言い聞かせてみる。

今日のために必死に勉強したんだもの、できないわけ、ないじゃない…

しかし、

それでも、もしかた失敗したら…？

しかし、その思いは実に弱々しく、自信に欠けるものだった。

それは、彼女が劣等生だったからだ。

国内でも3本の指に入る大貴族の娘、その華々しい肩書と裏腹に、彼女は魔法が全くの不得手だった。火、水、土、風からなる四系統の魔法はおろか、基礎であるコモンマジックさえ使いこなせない。

呪文を唱えて起きる結果は、ただ一つ。

爆発。

どんなに正しく呪文を唱えても、どんな風に魔力を込めても、起す結果は 爆発、爆発、爆発の繰り返し。

両親からは、そのことを何度嘆かれたことか。2人の優秀な姉たちと自分を 比べ、何度劣等感を感じたことか。同級生たちに莫迦にされ、何度虚勢を 張ったことか。

そしてついた二つ名は、『ゼロ』。魔法成功確率ゼロパーセントの、『ゼロのルイズ』

これまでの結果が、そしてその二つ名が、ルイズから自信を奪っていた。そして、今回も失敗しないという保証はどこにもなく、ルイズの心は 不安の鎖に締め付けられていく。

でも、今日ばかりは失敗なんてできない

それでも、やるしかないということも判っていた。使い魔の召喚はメイジにとって神聖なものであると同時に、進級のための試験でもある。

今日失敗すれば、自分は落第、悪くすれば、退学させられて実家に連れ戻されることになってしまうのだ。

我知れず、ルイズは既に召喚を終えた同級生たちを見やる。皆様々な生き物を 召喚し、早速の交流に努めていた。

果たして自分はあるの中に加わることができるのだろうか。それ pensando、胸が 大きくもないくせに 鉛と化したように重く感

じられた。

こんなこと、考えてちゃダメ！

ルイズは小さくかぶりを振り、悲観的な考えを払おうとする。こんな気持ちでは上手くいくものもいきはしない。そう、技術がなくても、気持ちで負けては、そこでおしまいなのだ。

「ミス・ヴァリエール、前へ！」

そして、とうとう自分の名が呼ばれた。

「は、はい！」

心臓が鐘楼のようにけたたましく鳴り響く。できることなら、逃げ出したいほどの恐怖が、全身を苛んでいる。

けれど、ルイズは真っ直ぐに前を見つめ、一步を踏み出した。

彼女は貴族、決して目の前のことから逃れるつもりはない。魔法が使えるように使えまいと、その心得だけならば、彼女は間違いなく貴族だった。

「お、ヴァリエールの番だぜ」

「さて、今日はどのくらいの威力かな？」

「ルイズー、ほどほどにねー、私の使い魔が驚くから」

クラスメイトが投げってくる野次が、その思いに拍車を掛ける。もし彼らの言う通りになったらという考えが頭をよぎるが、あんな言葉に負けたくないという気持ちの方が強い。

見てなさい、私だって、私だってメイジなんだから！

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

位置につき、呪文の詠唱を始める。

「5つの力を司るペンタゴン……」

もはや後には引けない。希望と恐怖が胸の内ですめぎ合う中ルイズは呪文を完成させた。

「私の運命に従いし、“使い魔”を召喚せよ！」
その言葉が放たれた瞬間

彼女の眼前が爆ぜた。

眩い閃光が宙を貫き、耳をつんざく轟音が虚空を揺らし、濛々たる黒煙が周囲を覆う。

その現実には、ルイズの心は折れた。

「……こんな」

足から力が抜け、地にへたり込む。

「こんなのって……」

頬を、冷たいものが伝った。もはやその心には絶望感さえなく、ただただ虚しさが意識を支配していく。

そのいたたまれない姿に、心ない生徒たちはいつものように野次を飛ばそうとした。

しかし

「きゅーー!!」

刹那、周囲の動きが全て止まる。突如上がった、イルカに似た高く澄んだ声。それが、ルイズの起こした爆煙の中から聞こえてきたために。

まさか……

俯いていたルイズも顔を上げ、身を起こす。空虚だった心に、希望が差し始めるのが判った。鼓動が、先程までとは違った意味で勢いづくのを感じた。

徐々に晴れていく煙の中から、まず露わとなったのは、青い翼。

コウモリに似た、けれど青い鱗に覆われた一対の翼に、同じ色の胴

から生えた四肢。

全長は6メートルほどで、尾と同じく長い首の先には角の生えた、そして耳のない爬虫類特有の頭部が付いている。

「おい、うそだろ?」

「あの、ゼロのルイズが……」

「これ、夢じゃないわよね?」

同級生たちがざわめく。しかし、それが気にもならないほどに、ルイズは茫然としていた。周囲もこの現実が信じられないようだが、それは彼女も同様だ。

嘘。信じられない。ありえない。その混乱とさえいえる心境のまま、彼女は目の前の存在の、一般的な呼称を呟く。

「風……竜……」

その言葉に反応し、周囲を見回していた竜は、彼女に目を留めた。

「きゅい?」

「……!」

その声にルイズは我に返ると、思わずその竜に駆け寄り、そして抱きつく。

「きゅ、きゅいいいい!?!」

召喚した風竜が戸惑ったようにいなくなが、ルイズは手を緩めない。

「……よかった……」

瞳から、滴が零れた。先程の冷たいものとは違う、温かな滴が。

「よかった……ちゃんと、来てくれた……成功、できた……」

「……きゅい」

鼻をすすりながら言葉を続ける彼女に、風竜は、彼女の使い魔は、

ただされるがままでいてくれる。それが嬉しくて、また抱きしめる力を強める。

「（なんだか、あまえんぼな子に召喚されちゃったのね、きゅいきゅい）」

そして、今抱きついている者から小さな眩きが漏れたことに、最強の幻獣種を召喚した感動のさなかのルイズは、気付くこともなかった。

草地に腰をおろして本を広げながら、雪風のタバサは、ピーチブロンドの級友が風竜を呼び出したことを、多少の驚きと、幾らかの納得を以って眺めていた。

「驚いたわね」

その彼女の横では、親友であるキュルケが髪を掻き上げながら呟く。彼女自慢の赤毛が舞い上がり、見るも華やかといった印象だ。

「まさか、あのルイズが風竜を召喚するなんてね」

そうして話している間にも、件のクラスメイトはコントラクト・サーヴァント、使い魔との契約をしていた。

「きゅ、きゅいいいい……！？」

「だ、大丈夫、我慢して、使い魔のルーンが刻まれてるから、もう少し頑張って！」

ルーンの刻まれる痛み之苦悶する竜を、ルイズが自身も泣きそうな顔で宥めている。やがて契約を済ませ終わると、コルベールが珍しいルーンだとスケッチを始めた。

そこまで見届け、本に視線を移すと、キュルケが問い掛けてくる。

「貴方はあまり驚いていないのね？」

不思議そうに尋ねるキュルケに、タバサは本を読みながら答えた。

「彼女の普段の姿なら、ある意味納得できる」

必要最低限の答えだが、それは彼女の本心だった。普段の姿といつても、教室で呪文を失敗している時の話ではない。その失敗を成功に変えようと、ゼロの二つ名を返上しようと、陰で努力していることだ。

あの必死な姿を一目でも見れば、それがこういう形で実ってもおかしくはないと思って然るべきだろう。

「そうねえ」

キュルケもそれを理解しているのか、1つ溜息をつくと傍らのサランダー、彼女が先程召喚した使い魔のフレイムを撫でた。

「今回は、この子を召喚したあたしが1番の当たり引いたと思ったけど、流石に風竜には負けるかしらねえ」

そういうキュルケの瞳には、嫉妬の類は一切浮かんでおらず、むしろどこか寂しそうなものが感じられた。彼女が、魔法を使えないルイズをよくからかっていることは知っている。けれど、それが決して彼女を揶揄するのが目的でないことも、またタバサは承知していた。

ルイズはそのプライドの高さもあってか、失敗をする度にひどく落ち込む。そんな時に限って、キュルケは負けず嫌いな彼女を挑発し、怒らせついでに立ち直らせてきた。この赤毛の友人がいじめっ子な側面を持っているのは確かだが、本当に苦しんでいる者にはいつもそれとなくお節介をやく。タバサは、彼女のそんなところが好きだった。

そしてそんなキュルケにとって、ルイズが成長の一端をみせたことは、祝福と寂しさが入り混じった複雑な心境なのだろう。からかうのを楽しんでいるが、頑張ってももらいたい。成功したのは喜ばしいが、元気づけついでにいじめないのはつまらない。わがままにもほどがあるが、とても暖かなわがままさだ。

タバサもまた、余り関わりのないクラスメイトの成功を、心の片隅で祝福した。

「ミス・タバサ、前へ！」

「あ、ほらタバサ！ 貴方の番よ」

コルベールの呼び掛けにキュルケが気付き、タバサの肩を揺らす。

「わかった」

短く答えて本を閉じ、タバサは立ち上がった。その顔は、努めてポーカー・フェイスに保っている。

「あら？ タバサ」

「なに？」

キュルケに呼び止められて振り返れば、彼女は珍しいものを見る目でこちらを見ていた。

「貴方、もしかして緊張してる？」

「……」

表情を隠していたつもりが、あっさり見破られた。この勘の良さも、彼女の特徴の一つだ。そしてその彼女は面白そうに微笑んでみせると、タバサの頭を撫でる。

「大丈夫よ、貴方だったら、あの風竜に負けないような召喚ができるわ」

妹にかけるような優しい声。タバサはそれに頷いてみせると、儀式へと向かっていった。

しかし、タバサの本当の不安は、儀式そのものとは別にあった。それは、彼女の名前のことだ。

タバサ。その名前は、本名ではない。そもそも、その名前は普通人につけるような名前ではない。そして、彼女の本当の名は、キュルケにさえ話していない。

けれど、彼女は儀式で本名を名乗るわけにはいかなかった。彼女が今名乗っている名は、彼女自身の決意を表す名。その決意を達するまでは、この名を捨てる気はない。

そして、仮にここで本名を明かせば、キュルケは間違いなく偽名を名乗っていた理由を自分に問い詰めるだろう。否、仮に追求するようなことはないにしても、自分が今まで名乗っていたのが偽りのそれだったと知れば、少なからず彼女を傷つけるはずだ。ハルケギニア大陸の貴族にとって偽名を名乗ることそれ自体は珍しいことではないが、理屈と感情は別なのをタバサはよく判っていた。

そして、仮にその理由をキュルケが聞けば、必ず彼女を巻き込むことになる。これはあくまで自分の個人的なこと。彼女を巻き込むことは本意ではなかった。

だが、この儀式でタバサを名乗れば、それは神聖なるこの儀式を汚すことになる。果たしてそれで儀式が成功するのかどうか、それが彼女には不安だったのだ。

その思いを抱えながらも、彼女は儀式の位置につく。そして軽く息を整えると、意を決して使い魔召喚の呪文、サモン・サーヴァントの呪文を唱え始めた。

「我が名はタバサ……」

始祖ブリミル、どうか今だけは、偽りの名で儀式を行うことを許してください……

始祖と呼ばれ、神格されたメイジに祈りを捧げ、儀式を続ける。

「5つの力を司るペンタゴン……」

どうか、私の決意を貫くために……

「私の運命に従いし……」

私の今の名、タバサとして……

「“使い魔”を」

私の力となってくれる者を……

「召喚せよ!!」

私の許へ!!

口と心で、呪文という名の祝詞を完成させた瞬間、銀色の閃光が彼女の前で 踊りだす。光はやがて扉を形作り、そして、目も眩むような白い光が、周囲を煌々と照らし出した。

しかし、彼女は知らない。彼女が祈った相手が、子孫へ残した秘宝の秘密を、注意書きごと謎として残してしまっただけの間の抜けた人物であることを。

その上、自分の使い魔にさえ頭が上がらないほど情けない男でもあるということ。

そんな人間に祈りを捧げた後に、偽りの名で儀式を行った結果がどうなるか、この時点では誰一人として知る由もない。

力の女神デイン、知恵の女神ネール、勇氣の女神フロル、黄金の三大神と呼ばれた女神たちにより創造された光の世界、ハイラル。その南東部に広がる深き森で、妖精ナビィは生まれ育った。

この森は、生涯子ども姿で、自分だけの妖精をパートナーとする種族コキリ族が住んでいる森。

人が立ち入ることもなく、魔物に脅かされることもない、精霊たる大樹デクの樹により守られた平和な場所。

けれど、その平和は、野心に満ちた1人の盗賊によって破られた。

呪いを受けたデクの樹の命を受けたナビィは、森に住む1人の少年の許へと遣わされる。コキリ族でありながら、何故か1人だけ妖精を持っていない、その少年の相棒として。

少年をサポートしながら、ナビィたちは邪悪な呪いからデクの樹を開放することができたが、それは遅すぎた。魔なる力に蝕まれ続けたデクの樹は、ナビィたちが見守る中静かに息を引き取っていたのだ。

彼に呪いをかけた盗賊の手から、三大神の力が宿りし黄金の聖三角、トライフォースを守ることを、彼女たちに託して。

それから、ナビィと少年、リンクのハイラルの命運を懸けた冒険が始まったのだ。

その旅路の最中には、様々なことがあった。神に選ばれた姫、ゼルドとの出会い。さまざまな部族との交流と、邪悪な魔物たちとの戦い。

そして、やがてリンクとナビィは、彼がコキリ族ではなく、神の声を聞くための長き耳を持つ民、ハイリア人であることを知る。

時さえも越えるという信じがたい戦いの果てに、彼女とリンクは全ての元凶、大魔王ガノンドロフとの決戦に臨んだ。伝説の戦士、時の勇者へと成長したリンクは伝説の退魔の剣、マスターソードと7人の賢者、そしてナビィの力を借りて、ガノンドロフに真っ向から挑んでいった。そして、最強の魔物ガノンと化した大魔王を、闇の彼方へと封印したのである。

戦いが終わり、時は平和な流れを取り戻すことができた。長い冒険の末、リンクは彼のあるべき時、あるべき姿へと帰ることができたのだ。

そして、それは、ナビィとリンクの別れの時でもあった。

「(さようなら、リンク……)」

時の神殿で、マスターソードを再び眠りにつかせた相棒から、ナビィはそっと離れていく。

自分が彼とともに旅していた理由は、ハイラルを危機から救うため。そして、自分たちはそれを果たしたのだ。

いずれ、森の民コキリ族でないリンクは、森を捨て外の世界へ旅立っていくだろう。けれど、自分の住むべき場所は、あくまで森の世界なのだ。

彼とともに、行くことはできない。

「(リンクはもう、ナビィがいなくても、大丈夫だよね)」

リンクの方も、それを判っているのだろう。頭上はるか高くにある、日の光が皆さんと差し込む窓へと向かっていくナビィの姿を、黙って見つめている。

「（リンクと冒険できて、楽しかったよ）」

羽を揺らすごとに、思い出が蘇ってくる。哀しかったこともあった。楽しかったこともあった。驚くべきこともあった。それをこの勇敢で、優しく、寝ぼすけな勇者とともに歩んできたのだと思うと、別れへの辛さと、この上ない誇らしさが胸を満たす。

最後に見た相棒の顔は、やはり淋しさが浮かんでいて、けれど、決然とした凛々しさもあって、そして、僅かな涙が、その目尻に光っていた。

「（ありがとう、ワタシの相棒……）」

そして、ナビィは日の光に満ちた窓の外へ出る。視界が、眩い白の光に満たされていった。

「……え？」

しかし、ナビィはすぐに異変に気付く。

「なに……これ……」

窓の外へ出た瞬間、彼女を待っていたのは、白一色の世界だった。上下、左右、どちらを向いても白い光で覆い尽くされている。

「……どうなってるのかしら？ これも時の神殿の力？」

困惑するも、ナビィはしいて気を落ち着かせ、この状況の分析に努めた。この不可解な現象、時の神殿を入り口以外の道を使って出ようとした影響なのだろうか。なにしろ7年もの時間を渡るような力を持っている場所である。こういった奇妙なことが起きても、不思議ではないかもしれない。

そこで、ナビィはこの場所がかなり強力なエネルギーを帯びた場所であることに気付いた。灼熱の火山や氷の洞窟、はては湖の底で

も活動できる妖精には問題になるレベルではないが、普通の生物ならば相当の苦痛を与えるだろうことが判る。

「ああっ……があ……」

「？」

奇妙な声に目を向けてみれば、いつのまにかそこには人影があった。青いフードつきの服を着た少年がこの白い空間に浮かび、悶えている。

「ちよっ、貴方！ 大丈夫！？」

慌ててナビイはその少年の方に飛んでいくが、少年はよほど痛みがひどいのかまるで気付いた様子がない。

あまりの悶絶ぶりにナビイの持ち前のお節介根性が膨れ始めるが、生憎と彼女は他人を癒す類の能力に持ち合わせがない。

どうしたものかとやきもきしていると、視界に何か別のものが近づいてくるのが見えた。

「なんだろう、あれ？」

目を凝らす間にも、その輪郭が徐々に明らかになってくる。

それは仮面だった。輪郭はハート型をしていて、上部の縁に角が1対、中央から下方の縁にそれより小さい角が4対ずつ生えている。色遣いは全体的に毒々しくなされていて、大きなオレンジ色の眼が存在感を主張していた。

そして特筆すべきは、その仮面からかなり強力な魔力が感じられるということだ。

ナビイが少年と、仮面の両方に注意を向けていると、俄に周囲の空気が揺らぎ始める。

「え！？ 今度はなに！？」

驚きながら周りを見回していくと、急に体が何処かへ引つ張られていくのを感じた。

「すつ、吸い込まれていく!? いったい、一体何なの!?」
叫びながらも、ナビィと少年、そして仮面は、謎の吸引力そのままに運ばれていく。

そして次に視界が開けたときには

「……………」

草原の上で、小柄な青い髪の少女の視線を、謎の空間の道連れ2名とともに浴びていた。

「（もう、なにがなんだか……………」

〜続く〜

〈第1話 交わった異界〉

ムジユラの仮面 時の閉ざされた世界を生き続けた魔物の甲羅から彫られたその仮面には、この名が与えられている。

ある民族による呪いの儀式で使われていた、血塗られた歴史の魔の道具。それを被りし物は邪悪で凄まじい力を手にし、世に災いをもたらすという古の呪物。人間の伝説では、そのように語られていた。

しかし、それは事実とは異なっている。確かに、その仮面は被った相手に強大な力を約束してきた。しかし、邪悪な災いを呼び寄せるのは、あくまで仮面の、ムジユラの仮面の意思によってだ。

そう、ムジユラの仮面は自我を、生命を持つ仮面だった。幾星霜の時を経て呪いの念と魔性の祈りを浴び続けてきたためか、元々材料となった魔の甲羅の力がそうさせたのか、ムジユラの仮面は強力な魔力を蓄えていき、ついには知性を、心を、魂を得るにいたった。

それも、極めて邪悪なそれを、だ。

だからこそ、ムジユラの仮面は、己を被るものを欲した。自らの力を与える者を欲した。

その者の願いを叶えるために。そして、その者の欲望を、利用するため。

欲望につけ込み、その者の心を握り、自分の目的の通りに動かしていく。それが、ムジユラの仮面がもたらす、災厄の過程だった。

やがて人間たちはそれを恐れ、彼を闇へと封印したが、それも永

遠にとはいかなかった。紆余曲折を経てムジユラの仮面は陽光の下に戻り、そして子鬼の手に渡った。

それも、ムジユラの仮面にとっては好都合な、心に深い哀感の闇を抱えた子鬼に。

ムジユラの仮面は歓喜のままに、その子鬼に力を与えた。存分に力を振るわせた。そして、存分に力を使わせてもらった。

子鬼の孤独な心、その悲哀のままに世界を呪い、各地で災いの種を育んでいく。そして、ゆくゆくは滅びの月を大地に落とし、全てを等しく焼き尽くすつもりだった。

そのことに、特に理由があつたわけではない。ただ、呪われた祭器である自分自身が、これまでその身に宿してきた呪いの念が、彼に災禍を招く以外の存在意義を、見出すことを許さなかつたのだ。

しかし、それは打ち破られた。1人の少年と、妖精の少女によって。

緑衣をまとつたその少年は、12か13歳程度だつただろう幼さにもかかわらず、ムジユラの仮面が各地にまいた呪いを、手にする刃で以つて払い除けてみせた。そして、ムジユラの仮面自身すらも、その少年剣士の手にかかつた。

自らが招いた月の内部で、仮面であることを捨て、魔人と化した直接対決の場で、少年の剣にムジユラの仮面は討ち取られたのだ。

目的もなく、本能のままに世界を破滅させようとした者と、勇気を奮い、守るべきと決めたものを守らんとした者。

今にして思えば、最初から勝負など見えていたのかも知れない。背負うものが、あまりに違いすぎたのだ。

少年から最後の一撃を受けた瞬間、ムジユラの仮面は深い脱力感を感じた。全身から、なにかが抜け落ちていくのが判った。

意識が、だんだんと深い淵へ沈んでいく。視界が、徐々に白く染まっっていく。もはやものを考える力も、気力も残されていない中、ただ1つの思いが、心に浮かんでいた。

災いの時は、もう終わったのだ

しかし、と、ムジユラの仮面は思う。

しかし、それからどうしてこうなっているんだ？

周囲を取り囲む黒マントの少年少女たち、少し離れた位置にいる禿げあがった男、そして眼前に立つ青い髪の小柄な少女、自分の隣りにいる妖精と少年を見回しながら、ムジユラの仮面は思い悩んだ。

とりあえず、思い悩んでいる時点で自我が残っていることは判る。その代わりというべきか、魔力はその大半を、邪気に至ってはほとんど全てを失っていたが、あの瞬間は命を失う覚悟をしたので、生きていくだけでよしとすべきだろう。

それはいい。いいのだが、今がどういう状況にあるのかが全く理解できない。あの少年剣士との決戦からどうなったのか、気が付いてみれば、いつの間にかこの場に浮かんでいた。

見回してみれば、周囲は青々とした草花の草原で、遠方には城と見紛う程の荘厳な建物が見え、恐らく周りの者たちが使っている施

設であるつと見当をつける。

ついたところで、やはり何故こんな場所にいるのかという理由は説明できなかったが。

「……なんだこれ？」

わけが判らず考え込んでいれば、不意にそんな声上がる。見れば、人間の少年と妖精の少女がこちらに目を向けていた。

少年と妖精といつても、明らかに自分を倒したあの2人とは違う。妖精の方は、あの少女が黄色がかった乳白色の輝きだったのに対し藍色に輝いていたし、少年の方はといえば 何もかもが違っている。あの少年は耳が長く、金髪碧眼で、緑のロングチュニックにとんがり帽子という服装だった。しかし、この少年はといえば、耳は丸いし髪も目も黒く、青いフードつきの服を着ており、その上明らかに 彼よりも4つか5つか年上だった。

なによりも、眼の雰囲気がるで違う。それなりに気骨がありそうではあるものの、戦いとは無縁そうな甘っちょろい眼をしており、あの歴戦を物語る眼光とは比べるべくもなかった。

そんな分析をされているとも知らず、少年は不審そうな、しかし興味深そうな眼で、ムジユラの仮面を見据えている。

「お面が浮いてるって、これどういう仕掛け？ 糸とかついてないよな？」

言いながら、少年はムジユラの仮面の周りを沿うように腕を回し始めた。ムジユラの仮面が何かで吊り下げられているものなのか確認しているらしい。無邪気な行為と呼べるが、ムジユラの仮面はそういうものを容認する性格ではなかった。まして今の精神状態では、苛立たいにもほどがある。

「やめる、うっとうしい」

そのため、気付いた時には、言葉を発していた。そのことに、ムジユラの仮面は多少の驚きを感じる。自分はこれまで、人間の前で言葉を話そうとしなかった。それは、あくまで自分を被る相手を利用するため、自我があることを悟られて、警戒されることを避けるためだったが、邪念の抜けた今となってはそうする理由はない。

頭ではそう理解しているものの、こつとも自然に「話す」という行為を自分がしたことに、僅かながら戸惑っていた。

「うおっ！　しゃべった!？」

一方、言葉を向けられた少年の方は、明らかにムジユラの仮面よりも驚いていた。平凡な顔に驚嘆の色を浮かべ、まじまじとムジユラの仮面を見つめる。

「すげえ、なんだこれ!？」

「ぬうっ!？」

かと思いきや、彼はいきなりムジユラの仮面を両手でつかんできた。

「なにこれ、なにこれ!？　どっから声出てるの!？　どうやって浮いてんの!？　動力なに!？　どんな仕掛け!？」

「ビヤビヤビヤビヤビヤッ!？」

興奮した様子で、少年はムジユラの仮面をがくがくと揺らした。

揺さぶられて言葉にならない声を上げながらも、ムジユラの仮面は少年の顔を観察する。

そこには、混じり気なしの好奇心に輝く満面の笑みがあった。その笑顔に、ムジユラの仮面は抵抗も忘れて呆れてしまう。

いくら邪気が消えたとはいえ、言葉を操り自らの意思で動く仮面にこつとも物怖じしないとは。先程眼を見て感じた印象に、能天気も付け加えるべきらしい。

「なんとというか貴方、いい度胸……というよりいい神経してるね……」

そこで、青い妖精の少女がやはり啞然とした声で少年に話しかけた。すると、少年はまたも目を見開く。

「今度はホタルがしゃべった!？」

叫ぶ少年に、妖精は苦笑いした様子で答えた。

「ワタシはホタルじゃないわ。確かにこの羽は虫に見えるかもしれないけど、お尻だけじゃなくて全身が光るホタルなんていないですよ？　ほとんど羽ばたかないで、浮いていられる虫もね」

妖精の言葉に、少年はなるほどと肯いて見せる。

「え？　じゃあ、君なに？」

「妖精のナビイよ、妖精を見たことないんだ？」

「あ、ああ。つて、え!？　妖精!？　マジで!？」

少年はまたも驚きの声を響かせ、次いで手にしたままのムジユラの仮面に目を移した。

「つて、ことはなに？　もしかしてこれも、魔法のお面とかだったりすんのか？」

「……仮面と呼べ。銘はムジユラの仮面だ」

「あ、ああ。俺は才人、平賀才人」

ヒラガ・サイト、語感からダンペイ、シロウといったものと同系統の名前かと判断する。それをよそに少年、サイトは手を離し、なにやら頭を抱え始めた。

「俺、今一体何処にいるんだ？」

「ここに至ってようやくそれか」

自分のすぐそばにいた以上、恐らくサイトもムジユラの仮面と同様突然この場に来てしまったのだろう。それなのに、これまでそれを1番に悩まずにいたとは、どういう思考回路をしているのだろうか。

「……ミスタ・コルベール」

そこで、これまで言葉を発しなかった、青い髪の少女が口を開いた。

「この場合、どうすれば？」

頭頂部辺りの禿げた男の方を見ながら、無表情に言う少女。淡々としたような声だったが、ムジユラの仮面はそこに動揺の色も聞き取っていた。コルベールと呼ばれた男の方はしばらく答えあぐね、悩むように語りかけていく。

「ミス・タバサ、これは伝統なんだ。確かに、複数の召喚に加え、人間の召喚、残り2名も人格を持つ存在と、あまりに異例尽くしではあるが、伝統であり神聖な儀式である使い魔の召喚をした以上、君は彼らと契約しなければならぬ」

なにやら話を進めているようだ。聞きなれない単語が多くてよく理解できないが、どうやら自分たち3人も当事者であるらしい。ならば自分たちにも話に入る資格はあるかと、ムジユラの仮面が割って入ろうとした時、コルベールが自分に視線を向けてくる。

「ただ、他の2名はともかく、生物でない彼に関しては……」

困惑した表情で言われ、ムジユラの仮面は脳内で眉をしかめる。「生き物でなければいけないのか？」

聞き返しつつも、少し考えてみた。未だに状況はまるでつかめないのだから、ここで無生物を理由に放置されると困ったことになる。なので、ムジユラの仮面は自分の力を見せることにした。今の力では

最強たる第4形態は無理だが、第2形態位までならなんとかなるだろう。

そうと決めると、魔の仮面はそのオレンジの瞳を力強く光らせ、全身を唸らせ始めた。

「な、なんだあ!？」

すぐ傍のサイトが先程から上げ続けの驚愕の声をあげる間にも、その変化を続けていく。

人間の顔と同じ、せいぜい30センチ程度だった大きさをみるみる内に膨張させ、10倍近い大きさまで肥大化させた。次いで、側面から生えた角を、まるでヒレのようにゆらゆらと揺らす。仕上げとばかりに、背面からは褐色の触手を幾十本も伸ばし、蛇のようにゆるにゆるとうごめかせてみせた。

他人に被られるための第1形態から、自ら戦うための第2形態へ。その変貌を遂げたのを確認すると、ムジユラの仮面はコルベールとタバサと呼ばれた青い髪の少女の方に向き直る。

「これなら、生き物らしく見えるかな？」

触手の1本を掲げて見せながら、呆気にとられた表情のコルベールたちに問いかけてみた。そこで、不意に別の触手が引つ張られるのを感じる。

「ほんとすげーな、これマジで種も仕掛けもないのかよ？」

見れば、ヒラガ・サイトが自分の触手を1本つかみ、観察していた。その好奇心がむき出しの姿に、ムジユラの仮面はいつそ感心してしまう。

「なるほど、思っていたよりも更に能天気なようだな……」

「ひでえ言われ様だな、おい」

軽く眉をしかめてサイトは抗議してくるが、ムジユラの仮面はそう言われても仕方がないだろうと思っていた。

「3名とも、生きていることは確認した」

そこで、タバサの声に再び注意を向ける。身の丈より長い杖を持つ眼鏡をかけた少女は、彼らを見回していた。そして、サイトに視線を固定すると、彼の方へ歩み寄っていく。

「え、な、なに？」

「……」

怪訝とするサイトをよそに、タバサは無言。かと思えば、彼女は

おもむろにサイトの肩を片手でつかんだ。

「え、ちよつ、だからなんだよ!？」

「動かないで」

思いつ切り慌てふためくサイトだが、タバサはそれに答えずに短く命令を下す。そして、サイトは動揺しながらも言葉の通りおとなしくなった。根性はあるかと思っただ、どうやら異性には弱いらしい。

そして、彼女はもう片方の手で持った杖を軽く掲げ、詠う様な調子で言葉を紡ぎ始めた。

「我が名はタバサ」

「あ、うん。俺は平賀才人」

恐らく呪文の類の一部なのだろうが、サイトは自己紹介と勘違いしたらしく自らも名乗る。

「5つの力を司るペンタゴン」

タバサはそれを無視し、何事かを唱えながらもつま先立ちになった。

「この者に祝福を与え」

そして、段々と2人の顔が近づいていく。タバサの方がサイトより大分身長が低いので、彼女は大きく背伸びしなければいけないかったが。

「え……?」

初対面の少女が顔と顔の距離を縮めてくるという事態に、サイトは当惑の色を強めていたが、混乱のあまりか固まってしまっている。そして

「我が使い魔となせ」

その言葉が放たれた瞬間、2人の唇が重なっていた。

〈続く〉

第2話 見知らぬ蒼穹、月2つ

平賀才人、17歳。東京在住の高校生。

学業成績、運動神経、ともに並。趣味はインターネットで好物は照り焼きバーガー。

賞罰、特になし。彼女、いたことなし。

性格は好奇心が強く負けず嫌い、調子が良くて人も好く、楽天的でやや抜けているとは周囲の評。

彼、平賀才人のおおまかなプロフィールは、こんなところである。

そんな彼だが、現在混乱の極致にあつた。つい先程までは修理に出していたノートパソコンを秋葉原まで引き取りに行き、先日登録した出会い系サイトからメールが届いているか、もしかすると彼女いない歴17年にピリオドが打てるか等と考えていたにも関わらず、だ。

付け加えておくと、才人も出会い系サイトというものの実態を理解していないわけではない。そのほとんどが、実際には架空の人物になりすまし、それらしいこと書かれたメールを送って、言葉巧みに利用者から料金を請求するものだということは、ニュース等で聞き知っていた。

しかし、才人はそれでも中にはインチキでない本物だつてあるだろうと楽観視し、登録していたのである。恋人ができるかもしれないという望みと、知らない人とのメール通というちょっとした刺激を求めて。

この時点で、楽天的だという彼に対する周囲の見方の正否は理解できることだろう。

しかし、彼はその帰り道の途中、奇妙な光景を目の当たりにした。近道しようと思った人気のない路地に、銀色の鏡のようなものが浮かんでいたのである。

普通、こんな異常事態に人はどう反応するだろうか。大抵は警戒してかわろうとしないか、興味を持って調べてみるかのどちらかだろう。

そして、才人はその後者だった。謎の鏡に石を投げ込んでみたり、適当にペン先を出し入れしたりして、どうなるか実験したりした。すると、不思議なことに石もペンも鏡らしき存在の向こう側からは現れず、吸い込まれたように消えてしまうのである。ちなみに、挿し込んだペン先は無事。

ますます興味を持った才人は、ついに好奇心に負け、その鏡をくぐってしまおうと考えた、というよりも、考えてしまった。この不可思議現象への警戒心も流石に膨れ上がってきてはいたが、それにも勝る探究心が彼の体を動かした。

ぶつちやけた話、後先考えないアホの所業である。

そして、その代償は安くはなかった。鏡のような存在に身をとり込ませたところ、得もいわれぬ痛みが全身を苛むのである。視界が白一色に支配される中、誰かの声が聞こえるような気や、どこかに引っ張られるような気がしたからと思ったたら、今度は見知らぬ草原に立っていた。

しかも、傍には虫の羽を持った自称妖精の光る玉に、浮いて喋って変身する謎なお面というおまけ付き。

それからその2名　2人というと語弊がありそうだと幾らか言葉を交わし、青い髪のか

少女と髪が寂しい男性の会話を眺めたりしていたら

「我が使い魔となせ」

どういうわけか、少女に唇を奪われたのである。

そこまでのこともさることながら、彼女いない歴17年「実年齢である才人には、見ず知らずの少女とファーストキッスというのはハードルが高すぎる。しかも、その少女が相当に年下らしく、その上に映画から抜け出たような整った顔立ちをしていたのだから、尚更だ。

ってちよつと待て！！ 俺、これでファーストキス喪失！？
こんなわけわからん状況でか！？ 初めてはやっぱ好き な子としたかったぞ！！ いや、顔でいえばこの子は十分、というか俺的には望んでも無理そうな最高レベルだけど……いやいや、こんな小さい子相手に俺犯罪じゃね！？ アウトじゃね！？ あー、でも女の子の唇ってやーらけー……いやいやいや、俺はロリコンじゃない！！ 人間として終わってない！！

感情の起伏が激しく、人一倍こんがらがり易い才人の脳内は、突然の事態に大パニック真つ盛りである。

そして、キスの際は目を瞑るといってどこかで聞いたエチケツトを実行する間もなく、少女の顔が離れていった。

瞬間、才人はその姿に見惚れてしまう。

身長は、140センチほどだろうか。ショートに切り揃えられた髪の毛は、細くて風に揺れてさらさらと流れ、その深い蒼さ故に日の光の中サファイアのような輝きを見せる。

唇は小振りで、輪郭はあどけなくも形のいいラインを描き、鼻筋

もきれいに通っていた。肌はといえば、雪のように白く、瑞々しく、木目が細かいとはこういうものかと実感させられる。

何より目を惹くのは、彼女の瞳だった。赤いフレームの眼鏡の奥に覗けるその眼はやや吊り気味で、幼い印象の顔立ちに伶俐な雰囲気を与えている。そして、その中心にある碧い瞳は、どこか海が空を思わせた。清らかで、透明なようでいて、深く、遠く、底も果ても見通せない碧さ。冷たく、それでいて温度が隠されているような不思議な双眸。

けれど　その吸い込まれそうなほど美しい瞳を見ながら、才人は気付く。

なんだ、この眼？

そこに浮かんでいた、どこか申し訳ないような、哀し気な色に。

あどけなくも、美貌と呼ぶべきその顔立ちを無表情に覆いながら、微かに見え隠れする悲哀の色に、才人は動きを忘れてしまった。一方的にとはいえ、口づけを交わしたためか、何故か彼女から目が離せず、行為の理由を問うことさえできなかった。

一方、件の少女、タバサはといえば、自分の傍にいたナビイとムジユラの仮面にもキスをする。才人にした時と、同じ言の葉を紡ぎながら。

まるで理解に頭が追いつかず、茫然とそれを見送っていた才人は、ふと左手のあたりに違和感を覚えた。

「っ！？」　「がっ！？」

かと思えば、それは瞬く間に膨れ上がり、強烈な痛みとなって全身を貫く。その突如な激痛に、思わず草地に倒れ込んだ。

「グウツ!？」

「あつっ、うう……!？」

ムジユラの仮面とナビィも同じ様で、ムジユラの仮面の方は地面に墜落し、ナビィの方は浮いてはいたが、苦悶の声を上げている。焼けつくような痛みが頭の中を搔きむしり、才人たちは悶え苦しんだ。

「な、んだ……これっ!？」

たまらず、才人はきれぎれに声を絞り出す。これまではとりあえず危険という感じではなかったため慌てる程度ですんでいたが、今度はそうもいかない。左手を中心に走る唐突な激痛に苛まされ、才人は自身の安全に焦りを浮かべていた。

「心配ない」

そこへ、タバサが抑揚のない、しかし微妙に申し訳なさ気な声で語りかけてくる。

「使い魔のルーンが刻まれているだけ」

「いやっんなことついわれたって……!!」

「何故っそんなものっ、刻まれないといけないっ!？」

僅かながら辛そうにも聞こえるタバサの言葉に、しかし才人はムジユラの仮面と一緒に反論した。彼女の様子が気にならないではないが、使い魔のルーンという単語は意味不明だし、そんなものを勝手に刻まれて、その上こんな痛い目を見る等、幾らなんでも冗談じゃない。ナビィは何も言わなかったが、やはり相当に痛がっていた。

1秒が数分にも感じられるほどの苦痛の時間、永遠に続くのではないかとさえ思えたそれも、やがて終わりを迎える。

「っ……はあ、はあ……」

灼熱を伴った痛みが抜け落ち、才人は息をついた。息を整えながら、特に痛みがひどかった左手を見やる。そこには、なにやら文字

のような模様が浮かんでいた。同じ様に息の荒いナビイたちを見れば、ナビイは左の上羽、ムジュラの仮面の左の触手の1本にも、似たような模様が浮かんでいる。

「なあ、なんだこれ？」

「オレに聞いてどうする、こつちだつて聞きたいんだ」

とりあえず同じ痛みを味わったのだらう、ムジュラの仮面に尋ねるが、彼もまた自分の触手の模様を見ながら首を　　というか体を

傾げていた。それにしても、人語を解して自らの意思で動いているらしい仮面と普通に会話しているとは、我ながら大した神経だと才人は苦笑する。同じ苦しみを共有したらしいことで、親近感が湧いたのかもしれない。

「ふむ、君たちも珍しいルーンだね」

そこへ、先程タバサがミスタ・コルベルと呼んだ男性が、才人たちのルーンを覗き込んできた。

「ルーン？　これがさっきあの子が言ってたやつですか？」

「ああ。使い魔のルーンの話聞いたことがないのかね？　まあともかく、ちよつとスケッチをとらせてもらえるかい？」

「あ、はい」

よく理解できていないものの、年長の男性に頼まれてはとりあえず従ってしまう。そしてコルベルは才人たちのルーンとやらをスケッチし始めた。

その一方で、才人はコルベルの恰好に、段々と焦りのようなものを感じ始める。ローブというのだろうか、なにやらゆったりした服に、大きな木製の杖という、いかにも魔法使いといった姿。

普段であれば、年甲斐のないコスプレおじさんとも思っただらう。しかし、妖精だという光る生き物に、仕掛けがあるわけではないらしい奇妙な仮面。そして、突然痛みと共に現れた、この使い魔のル

ーン。

どれ一つを取っても、彼の普段とは程遠い代物だった。そして、それはある可能性を示唆している。それに気付いた才人は、それを否定するべく頬をつねった。

「いててっ!!」

「? 何してるの?」

同じくコルベールにルーンをスケッチされていたナビィが、不思議そうな声で尋ねてくる。

「いや、これ夢かなあって」

「今の100回は目が覚めそうな痛みの後にそう思えるなら、流石に能天気じゃ済まないぞ」

呆れたように言うムジユラの仮面に、だよなあと答えた。答えたことで、才人の焦燥感は更に募ったが。

「ん? ……これは……」

そこで、コルベールが何故か怪訝とした表情をする。そこへ、ムジユラの仮面が彼に問い掛けた。

「どうでもいいが、スケッチが終わったならもう戻っていいか?」

図体のでかいままだと不便でな」

「ああ、構わないよ」

コルベールに確認を取ってから彼が元の姿に戻ると、タバサが再び才人たちに声を掛けてくる。

「他の生徒の邪魔になる、こつちに」

それだけ言うと、タバサは人垣ができている方とは離れた位置へ歩いて行った。その背中を眺めながら、才人は両側の2名に聞いてみる。

「こつちにつたって、どうする?」

「決まっているだろう。どうにも状況が判らんならば、ついていく他にない」

言いながら、ムジユラの仮面はタバサを追っていった。ナビィも

それに肯いて、後に続く。

「……なんだかなあ」

頭を掻きながら、才人は近くに落ちていた自分のノートパソコンを拾い上げ、タバサ達について行った。

そして、タバサが人の集まりから適当に距離を取った位置で足を止めると、赤毛の少女が駆け寄ってくる。

「タバサ！」

少女がタバサの名前を呼べば、タバサも彼女に肯き返す。そこで、赤毛の少女は才人たちの方に目を向けてきた。

「無事召喚できたみたいだけど、よく判らないことになってるみたいね」

「いや、よく判らないのはこっちこそなんだけど。てゆうか、よくを通り越してわけわかんないんだけど」

苦笑気味に言う少女に才人が言えば、ナビィとムジュラの仮面もうんうんと肯く。

「あら、そう？ まあ、そうでしょうね」

すると、彼女は皮肉っぽい笑みで応えた。見れば、彼女もかなりの美貌の持ち主だ。年齢は才人よりも1つか2つ上だろうか。ボリュームのある赤い髪は腰より長く、綺麗な褐色の肌がどこか野性的な印象を与える。

シニカルな笑みが浮かんだ表情は目鼻立ちが整い、蠱惑的な魅力を湛えていた。その上、スタイルは大きな胸や、女性にしては高い身長を始めとてもグラマラスで、雑誌のグラビアモデルも顔負けといった風情である。

人形のようなおとなしい雰囲気だ美少女のタバサとは、また違ったベクトルの美少女といえた。

「とりあえず、自己紹介すべきかしら？ あたしはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。こっ

ちのタバサの友達よ。貴方達は？」

そこで、少女キュルケが己の名を明かした。長い上に覚えにくい名前だと少し思いながら、才人たちもそれに応える。

「ああ、俺は平賀才人」

「コキリの森の妖精、ナビィよ」

「ムジユラの仮面だ」

キュルケは、何故か才人とナビィの自己紹介に一瞬眉をひそめるが、すぐに笑みを取り戻した。

「それで、貴方達は何処から来たの？」

そして、すぐさま次の質問を投げ掛けてくる。どうやら、タバサに代わってこちらの素性を確かめようとしているらしい。

「何処つて、俺はアキバ……東京の秋葉原から」

才人がそう答えれば、キュルケとタバサは首を傾げた。

「トウキョウやアキハバラというのは？」

僅かながら不思議そうな感じで聞き返すタバサ。その様子に、才人は不安になりながら答える。

「というのは……ここ日本だろ？ みんな日本語話してるし……」

言いながら、声が段々と小さくなっていくのが判った。才人とって、現状での心を支えていたものが、揺らいでいくのが判った。

目の前の少女たちや周囲の人間は、明らかに日本人ではない。そして、今立っている風景も、間違いなく東京近辺のそれではない。それでも、彼らは自分と話が通じていた。つまり、日本語を話していた。外国人が皆流暢な日本語で話している以上、ここは日本のはずである。

その考えが、この理解しがたい状況に対する、支柱となっていたが、タバサとキュルケの反応を前に、それさえも崩れそうになる。

「質問を変える」

不安がる才人を見ながら、タバサが僅かな思案の後に言った。

「貴方達のいた、国の名前を教えてください」

「ここが日本ではない　　そう言われたに等しい言葉を聞きながら、才人たちは答えていく。

「……俺は、日本だ」

「ワタシはハイラル王国から」

「国じゃないが、タルミナ地方。　なんという国に属するかは知らん」

人間、妖精、仮面の順に返答されながら、タバサはまた思案顔になる。

「ここはトリステイン王国」

聞き慣れない国名を言いながらタバサは才人たちを見比べていく。

「貴方達の言った国名と地名は、どれも聞いたことがない」

「あ、うん。正直、俺もどれも知らない」

才人がそう言えば、残りの2人も同じ答えを返した。

「まじで、どういうことだよ……」

茫然と呟きながら、才人は頭を抱える。彼女たちが嘘を言っているとは思えない。というよりも、嘘で片付けるには説明不可能なことが多すぎる。

先程からちらついている懸念から逃れようと、才人はなんとなく天を仰いでみた。刹那、その目を大きく見開くことになるとも知らずに。

「なっ!?!」

本日何度目かの驚きの声を上げると、才人は目にしたままの事象を叫ぶ。

「月が……2つある!?!」

「え……ああ!?!」

「ほっ、確かに」

才人の言葉に反応して、ナビィとムジユラの仮面も空を見上げ、それぞれ違った反応を見せた。

しかし、才人は2人の反応に興味を示すことができない。月が2つ。幾らなんでも、これはあり得ない。地球上に、こんな景色が存在するはずがない。

しかし、それでも頭上に浮かぶのは、赤と青の大小2つの月。その現実には、才人の頭に浮かぶある考えを、はつきりと肯定していた。

「俺、魔法の世界に、迷い込んだのか……?」

小さく漏れたその言葉は、誰の耳にも拾われることはなかった。

一方、タバサとキュルケは、月に驚いている才人たちをきよとんとした顔で見つめている。

「月が2つって、それがどうかしたの?」

不思議そうな様子で尋ねてくるキュルケに、才人は猛然と言い返した。

「どうしたもなにも、月は普通1つだよ! どこの世界に2つあるんだよってここの世界なんだろうけど! なんなの、ここ!? なんなの、あんたら!? 俺なんでここにいるわけ!? ここなんて世界!? これファンタジー!? それともSF!? 地球何処よ、日本どつちよ!?!」

とつとつ疑問の許容量に限界がきた才人は、感情の赴くままに言葉をつつけていく。

そんな才人に、ムジユラの仮面が呆れた声を掛けてきた。

「ヒラガといったな? 少し落ち着け。傍で聞いていて、意味判らんから」

「落ち着けって、落ち着けるかよ!」

ムジユラの仮面に怒鳴り返すと、今度はナビィが溜息交じりに言う。

「Listen! なら落ち着かなくていいから、そちらのお2人

の顔を見てみて？」

「へ？」

言われて、キュルケとタバサに視線を戻す。2人の視線は、温度にこそ差があったが、ある一点において全く同じ色をしていた。

即ち、可哀想なものを見る眼という点で。

いや、ちよつと待て！ なにそのイタイ人見る眼！？ 俺そういう認識か！？

それに気付いた才人は、さっきまでとは違った意味で慌てふためいた。年下だろう美少女と年上と思わしき美人に、脳みそ的な意味で哀しそうな眼差しを送られるなど、切ないにも程がある。

「ちよつ、ちよつと待っててくれ！」

なので、とりあえず才人は自分が月が1つしかない場所から来たと証明することにした。手早くノートパソコンを開き、電源スイッチを押す。

「……っ」

「へえ、なにこれ？」

モニターに起動画面が表示されていくのを見て、タバサとキュルケが驚いた反応を示すが、才人は気にせず操作を続けた。サンプル画像から月夜の画像を選択し、デスクトップをそれに変える。

「ほら、これ見て！ 月1つだろ！」

画面を彼女たちに向けながら叫ぶ。

しかし、彼女たちの興味は、その画像に向いていないらしい。才人が怪訝としてみると、タバサが何事か呟きながら、手にしている大きな杖の先を、パソコンの上で振っていた。

「……マジック・アイテムじゃない」

「え？」

タバサの言葉に、キュルケが疑問の声を上げる。

「ディテクト・マジックに反応がない。少なくとも、系統魔法で動いてはいない」

「ちよつと待つて。それじゃあ、こんなのが魔法を使わないで動いてるって言うの？」

幾らか驚いた風に言うキュルケ、自分の持ち物に思案するタバサを見ていて、なんとなく気持ちが悪く落ちて着いてきた才人は、それに答えた。

「いや、そりゃ魔法じゃなくて、科学的っつーか工業的に作られるから」

その言葉で、タバサとキュルケが顔を見合わせる。やはり程度に差はあれど、驚いているという点では同じ表情だ。

「工業的、ということは、これは機械の類なの？」

「ああ、そうだけど」

タバサの疑問にそう答えると、彼女はまた何やら考え出す。数秒そうしたかと思えば、彼女はノートパソコンを指差した。

「貴方は、この絵のように月が1つの場所から来たの？」

「うん。だから、そう言ってるじゃん」

どうにか納得してもらえそうな流れになってきて、才人は安堵の息をついた。これで、哀しい脳の人扱いは避けられそうだ。心配することが違う気がしないでもないが。

「タバサだったな。オレからも1ついいか？」

そこで、ムジユラの仮面が会話に加わってくる。才人のパソコンを興味ありげに見つめていたタバサが、それに答えた。

「なに？」

「あれのことだ」

言いながら、仮面の顎をしゃくって方向を示すムジユラの仮面。そちらの50メートルほど先には、ぽつちやりした体型の少年が杖を片手に声を上げていた。

「我が名はマリコルヌ・ド・グランドプレ！ 5つの力を司るペン

タゴン、私の運命に従いし、“使い魔”を召喚せよ！」

言葉が終わった瞬間、才人は目を見開く。マリコル又と名乗った少年の前に現れたのが、自分がくぐった鏡のようなものとそっくり同じだったために。

驚き、それをまじまじと見ていたら、やがて鏡が消え、後には1羽のフクロウが残されていた。

「うおっ、フクロウが出てきたぞ!？」

「さっきは、金髪の娘がカエルを1匹出していたぞ」

才人が驚いていると、ムジユラの仮面が教えてくる。

「カエルって、この距離でよく判ったな」

「伊達にでかい目をしてはいない。それでタバサ」

ムジユラの仮面はタバサに向き直ると、質問を続けた。

「あの小僧、使い魔がどうか言っていたが、お前もオレたちにそのルーンとやらを刻んだと言っていたな？」

そこで、才人もはっとなってタバサを見つめる。

「もはや、オレたちはああしてお前に呼ばれたのか？」

その質問に対し、タバサは肯いてみせる。

「マジですか……」

今現在の自分の状況を端的に、程があるほど端的につきつけられ、才人は開いた口が塞がらなかった。

「時の神殿のせいじゃなかったのね……でも、なんでワタシたちを？」

よく判らない単語を交えつつ、ナビイもそこで声を発した。そして、才人もその言葉に同意する。

自分たちは、それぞれ全く別の場所から来たようだし、種類といふか存在自体もまるで異なる。何故こんな妙な選択肢で自分たちをこの異世界に招いたのか、理由が見えなかった。

そして自らが呼び出した3名の視線を浴びつつ、タバサはゆっくりと話し始める。

「使い魔の召喚、サモン・サーヴァントは、行うのは自分の意志でも、何を呼ぶかまではメイジの自由が利かない」

「メイジ？」

才人が聞き返せば、タバサは答えてくれた。

「私たち、魔法を使う者のこと」

魔法使いということかそういえば英語の辞書にそんな単語あったっけか、と才人は納得するとともに、やっぱりここ魔法の世界かファンタジーな等とも考えていた。

そして、それをよそにタバサはナビィへの返答を続ける。どことなく、暗い声音で。

「今言ったように、私の方では何を召喚するかまでは選択できない。私も、貴方達が召喚されるまで、何が現れるか判らなかつた」

「マジですか……」

再び啞然のセリフを才人が呟いていると、タバサの方は、今度はムジユラの仮面の方に杖を向けた。

「少し、デイトクト・マジックをかけてみていい？」

「デイト……なんだって？」

その単語が判らないのだろうムジユラの仮面に、タバサは教えた。

「どつという魔法が使われているのか、調べる呪文」

「ほう、別に構わないが」

許可をもらうと、早速タバサは呪文らしきものを呟きだす。それを聞きながら、才人はそれが自分のパソコンに対して使っていたのと同じ言葉であることに気付いた。

すると、タバサは微妙に眉をひそめ、ムジユラの仮面に問い掛ける。

「……貴方も機械なの？」

「？ いや、俺は魔道の呪物だ。歯車仕掛けや電気仕掛けのような無粋な代物ではない」

電気仕掛けの概念なんてあるんか

呪物と名乗っている割に近代的な発言をするムジユラの仮面を、才人は奇妙な眼で見つめた。

彼が機械の獣を手下にしていたこと等、才人には知る由もない。

「どういうこと？」

「？ どうしたの、タバサ」

何故か訝し気な声を出すタバサに、キュルケが問い掛ける。

「ディテクト・マジックに、反応がない」

「え、嘘!？」

ノートパソコンの時より明らかに驚いた表情で、キュルケはムジユラの仮面を見た。そして、タバサのものより細く短い杖を取りだすと、タバサが唱えていたのと同じ呪文をムジユラの仮面に向ける。

「本当……貴方、魔法を使わないで浮いてるの？」

「いや？ この浮遊は魔力によるものだが」

何を言っているんだとばかりに答えるムジユラの仮面に、少女たちは不審気な眼差しを送る。

「魔法を使っているのに、ディテクトできない？」

「確かに、どういうことかしら？」

「Hey!」

タバサとキュルケが腑に落ちないでいると、ナビイが声を上げた。

「少し、ワタシの考えを言っていないかしら？」

その言葉に全員の視線を集めながら、彼女は続ける。

「さつき、才人君が持っていた機械にタバサさんは系統魔法で動いていないって言った

わよね。今の呪文は、その系統魔法って種類の魔法に反応するものなの？」

「そう」

タバサが答えると、ナビイは推論を言い切った。

「それなら、彼はそれと違う魔法を使っているってことじゃない？
はっとした表情で、2人はムジユラの仮面に向き直る。ムジユラ
の仮面も、ナビイの考察に肯いてみせた。

「それが妥当な考えだな。かけられて判ったが、確かにオレの魔法
とは異なるらしい」

「貴方は先住の魔法を使うの？」

「なんだ、それは？」

タバサの疑問に、ムジユラの仮面は質問で返す。

「私も詳しくはないけれど、精霊の力を借りて行う魔法と聞いてい
る」

そうタバサが言えば、何故かムジユラの仮面は笑い声で応えた。

「ハハハ、ならばそれも違うな。オレは魔族、精霊とはむしる敵対
関係だ

「あ、やっぱり魔物だったんだ」

ムジユラの仮面の言葉に、ナビイが反応する。

「まあな。やっぱりということ、見当はつけていたのか？」

「モンスターでもないのに生きている仮面なんてそうそうないし、
物や道具が魔物化することはそう珍しくないわ。石像のアモスとか、
氷像のフリザドとか」

「……そうか、オレは連中と同系統なのか」

ムジユラの仮面は複雑そうに言うが、そんな2名に才人は問い掛
けてみた。

「なんか話が合ってるけど、お前ら同じ様な所から来たのか？」

ナビイとムジユラの仮面は一瞬顔を見合わせるが、やがて互いに
首　　というよりもやはり体　　を横に振る。

「違うと思うわ。タルミナって地名を聞いたことがないのもあるけ
ど、なんていうか魂の質がハイラルの魔物と違ってる気がするもの」

「同感だ。お前もオレの知る妖精たちとは、羽音や輝きが異なってる

見える」

つまり、この2名は互いに似た世界ではあるが、やはり異世界の住人ということらしい。

それも、才人がいた地球とも、今彼らがいるこの世界ともどうやら違う世界からだ。

3名が3名とも違う世界から違う世界へやってくるとは、なんともスケールの大きな話だった。

「なんだかなあ……それで、呼ばれた俺たちはどうすりゃいいんだ？」

「それは……」

「では、全員使い魔を召喚できましたね」

才人の疑問に答えるタバサの声を、コルベールの声が遮る。才人たち5名の視線がそちらに向けば、コルベールは手を叩いて周囲の者たちに指示を出していた。

「それでは、これにて春の使い魔召喚の儀式は終了とします。皆さん、教室に戻りますぞ」

言いながら、コルベールが杖を振って何事か呟くと、その体が宙に浮かび上がる。見れば、周りの少年少女たちも同じ様に飛び上がり、桃色がかったブロンドの少女などは翼がある青いドラゴンにまたがったりしていた。

「マジでファンタジーなんだな、ここ……」

その非現実的な光景に、もはや精神がまいるどころか感心してしまふ才人だった。そろそろ感覚が麻痺してきたのかもしれない。才人の神経が元々図太いことも一因しているだろうが。

「ミスタ・コルベール」

そこで、同じく浮かび上がったタバサとキュルケが、コルベールの許へ飛んでいく。

「ミス・タバサにミス・ツエルプストー、どうしたのかね？」

「はい、私とタバサなのですが、次の授業を公欠させていたくださいますか？」

「公欠？ 何故かね？」

首を傾げるコルベールに、キュルケは言葉を続けた。

「はい。彼女が召喚した使い魔たちですが、通常召喚される使い魔とは異なり、皆明確な自意識を持っています。その上、彼らは使い魔の存在すら存じていないようです」

「なるほど、そういえば、使い魔のルーンのこととも知らないようだったな」

「ええ、ですので、まずは彼らに状況を説明することから始めた方がよろしいかと思えます。けれど、私の小さな友人は言葉が多くありませんから」

言いながら、キュルケはタバサを後ろから抱き締める。

「そこで、私が彼女のフローをしたいと思ひまして」

「ふむ、君の言う通りだろうね。判った、公欠を認めよう。君たちは彼らとの交流に努めたまえ」

「ありがとうございます、ミスタ・コルベール」

「ありがとうございます」

タバサとキュルケはコルベールに一礼すると、才人たちの許へ戻ってきた。

「待たせた」

「いや、いいんだけど」

短く言うタバサに答えると、続けて才人は質問する。

「さっき授業とか公欠とか言ってたみたいだけどさ、2人って学生なのか？」

「ええ。ほら、あそこに建物があるでしょ？ あれがトリステイン

魔法学院。で、あたしたちは

あそこの生徒ってわけ」

タバサの代わりにキュルケが答えると、才人、ナビィ、ムジユラの仮面は揃ってなんともいえない表情　　というか雰囲気　　になる。

「ということは、オレたちは学生の授業の一環で今ここにいるわけか」

「笑えねー……」

微妙な声を出すムジユラの仮面と才人に対し、タバサが俯きがちに言葉を発する。

「ごめんなさい」

「あ、いや、わざとじゃないんだろ？　仕方ないよ」

哀し気に言うタバサに対して、慌てて才人はフォローした。

「それよりさ、もう少し使い魔ってののこと説明してくれるか？　まださっぱり判らないからさ」

「ええ。だから公欠頼んだんだもの」

「とりあえず、学院に戻る」

言って、学院の方を向くキュルケとタバサ。才人もそちらを見やると、途端顔をしかめる。

「あそこまで歩いてくのかよ……」

最低でも1？は向こうに建つ城のような外観の建物を見て、ぼやきが漏れた。他の4名は

皆飛べるが、自分は徒歩で行くしかない。

憂鬱な気分で頭を掻いていると、ムジユラの仮面が声を掛けてくる。

「なら、オレの力を使うか？」

「え？」

聞き返す内に、ムジユラの仮面は裏側を才人の顔に向けた。

「オレを被ってみる、俺の力を貸してやれる」

「お前の力を？」

その裏側を見ながら、才人は躊躇した。言葉をしゃべり、自らの意思で動き、裏側から不気味な触手を生やしてうごめかす。そんな仮面を被るといふのは、正直かなり遠慮したい。

しかし、同時に興味もあった。魔法の力を操る仮面、その力を貸してもらえる、それはどんな感覚なのだろうか、自分は何を得られるのだろうか。

警戒と好奇心、2つの感情のせめぎ合いは、やがて決着を見た。即ち、好奇心の勝利で。ちなみに逡巡の時間5秒ジャスト。好奇心のせいでこの状況にあるというのに、懲りない男であった。

才人はムジユラの仮面に手を伸ばすと、おもむろに自らの顔に押し付ける。

刹那、何かが変わっていった。自分が、それまでの自分とは違っていくことを感じた。全身を熱いものが駆け巡っていく。血液の流れが、そのまま力の奔流へ変わったような感覚に、心がどんどん昂っていく。

今なら、普通なら不可能といえることができる気がした。この力なら、様々なことをなしえる気がした。

「どんな感じだ？」

経験したことのない高揚感に酔いしれていると、不意にムジユラの仮面が聞いてくる。顔に直接つけたものから声を掛けられるのは、少し変な感覚だった。

「ああ、なんかすげえよ。今なら、色んなことができそうな気がする」

「色んなこと、か。なんでも、とはいかないか？」

言われてみて、才人は少し考えてみる。

「いや、そこまで自信は持てないな」

「そうか……どうやら想像以上にパワーダウンしているな」

やや沈んだ声でムジユラの仮面が言うが、すぐに気を取り直した声を上げた。

「だが、宙を舞うくらいならできるだろう」

「あ、うん。それくらいなら」

答えながら、空中へと浮かび上がる。今までの常識ではありえないはずのそれは、とても自然に行うことができた。まるで、足を前に出すような感覚で。

「へえ、すごいじゃない」

キュルケが感心したように言うと、タバサが続く。

「それじゃあ、行く」

その言葉に全員が肯き、5名は魔法学院へと飛んでいくのだった。

「きゆるきゆる……」

最初から最後まで忘れられていた、サラマンダー1匹を置き去りにして。

〈続く〉

く第2話 見知らぬ蒼穹、月2つく（後書き）

2011/08/08 改行修正

〈第3話 今日から使い魔、道連れ2名〉

魔法学院内にある、30メートル四方の空き教室。階段状になっている他の教室とは異なり、8脚の長机が2列に同じ高さで並んでいるだけの小さな部屋。その真ん中辺りの席に座りながら、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーは頭を悩ませていた。おいてきぼりを喰らって拗ねているフレイルムの頭を撫でてあげながら、親友であるタバサの召喚した使い魔たちを見比べていく。

そう、使い魔ではなく、使い魔「たち」だ。

普通、何らかの生物を1体召喚するのがサモン・サーヴァントである。それにも関わらず、彼女の青い髪 of 友人は、3名 人格を有する存在のため、体と呼ぶのははばかられる もの使い魔を呼びだしてしまっていた。

友達ながら変わったコとは思っけど、こんなところまでやらかさなくてもねえ

ちょこんと隣に座る小さな少女に視線を移し、思わず苦笑が漏れる。それに、向かい合って席についている といっても、実際に座っているのは1名のみだが その使い魔たち自身も、かなり奇妙な存在だ。

まずは、光の塊に羽が生えたような姿の、1番小さな使い魔を見る。ナビィと名乗った、口調から恐らく少女と思われる彼女は、これまでキュルケが見てきたどんな生き物とも違った。

そのトンボとチョウの中間のような羽だけを見れば虫のようだが、じっと見てみればすぐに違和感に気付く。この羽、まるで羽ばたい

てるといふ気配がないのだ。完全に停止しているというわけではない。ちゃんと動かしてはいる。しかし、それは精々揺らしている程度の域を出ておらず、とても浮力を生み出せるような動きとは思えなかった。

それに、その身にまとう輝きも無視できない。眩いわけではなく、むしろ穏やかな優しい光。森の木々の木漏れ日のような、美しく、それでいて神秘的な煌めき。どんな高価な宝石でも、この幻想的な輝きを模することはできまい。

そしてなにより、彼女は自分を妖精だというのだ。このハルケギニアでは、妖精とは架空の存在、絵本やおとぎ話で語られるだけのものはず。それなのに、彼女は自分を「コキリの森の妖精」と称していた。まるで、森の妖精という存在が、それだけで人間に理解してもらえろと言わんばかりに。

神秘的な、そして不可解な少女。いささか頼りな気ではあるものの、ミステリアスで色々謎の多いタバサの使い魔としては、ある意味似合った使い魔といえなくもない。

次は、ヒラガサイトと名乗った平民の少年だ。聞き慣れない響きの名前に見慣れない服装、黒い髪に瞳、黄色がかつた色の肌、造りは平凡なもの自分たちとはどこか印象を異にする顔立ち。それらの比較的珍しい要素を除けば、何処にでもいそうな男の子。仮にもシルイズに召喚されていたのなら、いつもの失敗の一種とでも思っただけほど注意深く見なかったかもしれないが、親友であるタバサが召喚したとあってはそうもいかない。そして、よくよく観察してみれば、彼の格好がただ珍しいだけのものではないことに気が付く。

キュルケの生まれであるゲルマニアは、他の国々とは違って資金や能力があれば魔法が使えない者でも貴族になりあがることのできる国。そのため、他国からは野蛮だなんだと揶揄されることも多い

が、その分各方面で有能な人材が登用されており、技術力だけを見るならば大陸でもトップクラスを誇っている。

しかし、サイトの着ている服は、そのゲルマニア出身の彼女の眼から見ても未知のものだった。来る途中、少し触らせてもらったが、木綿とも麻とも、ましてや絹とも違う、見たことのない質感を持つ生地。靴の方も、柔らかさそうでいて固くあるべきところはきちんと頑丈そうな、皮とは違う奇妙な素材でできている。

特に驚かされたのは、あの板状の道具だ。耳障りな音がし始めたと思えば黒一色だった部分に光が灯り始め、なにやら美麗な絵や光がそこに映っていったのである。そして、あるうことかそれは、月が1つしかない絵とは思えないほど鮮明な絵を映し出し、その上に魔法が一切使われていない機械なのだという。

技術先進国であるゲルマニアを始め、他のどの国家でもこの道具はもちろん、彼の衣服でさえ複製することは不可能だろう。外見は平凡、しかしその実、驚くほど技術が進んだ土地から彼が来たことは明白だった。

最後は、見るからに1番底が知れない、異形の仮面である。なにせムジラの仮面というこの仮面、自律的に行動し、会話することを可能としているのだ。

ハルケギニアにおいて、そういう仮面が存在することそれ自体はおかしなことではない。魔力によって動く人形であるガーゴイルはある程度の自由意思を以って行動するよう作られているし、知性を宿された魔道具であるインテリジェンス・アイテムもざらにある。しかし、これらは普通無機的な印象が付きものだ。

どんなに精巧に作られたガーゴイルでも、所詮人間によって作られた感情である以上、やはり喜怒哀楽の中に生命を感じさせる温度を持ちえない。インテリジェンス・アイテムは人間が使う系統魔法に加え、異種族が使う様な先住の魔力を用いていることがあるために意思の面ではガーゴイルに優るが、やはり物や道具に吹き込まれ

ている以上生き物とは明確に区別される。

しかし、この仮面はそれらのどれとも違っていた。いかにも人工的な道具然とした外見をしているにもかかわらず、まるで生きていくかのような生々しい気配を放っている。ましてや、あの肥大化して触手をうごめかせた姿。あの不気味なまでに命の脈動を感じさせる姿は、間違っても人の手で生み出せるような代物ではない。その上、系統魔法でも先住魔法でもない魔法を操り、被った者にその力を貸し与えるマジック・アイテムなど、聞いたことがなかった。

それぞれがそれぞれの理由でキュルケの理解を超えており、キュルケは僅かばかりの警戒を以って親友が呼び寄せた3名の話の聞いていく。

「つまり、貴方たちはみんな異世界の、それもそれぞれ別の世界の住人だつてわけ？」

そして、彼らの話を聞き終わってみれば、キュルケは溜息交じりにそう聞き返すこととなった。理解できない部分も多々あるが、まとめてみるとどうやらそういうことらしい。それにサイトたちの方は揃って頷いているが、キュルケとしては半信半疑というのが本音だ。確かに、彼らがハルケギニアで生まれ育ったと考えるには無理があると思う。しかし、いくらなんでも違う世界というのは流石に絵空事にしか聞こえなかった。とはいえ、嘘をついている風ではなさそうだし、こんな突拍子もない妄言を使う理由もないだろう。

キュルケは彼らの言葉を自分なりに整理しようとするが、やがてさじを投げる。知恵に関しては自信があるものの、知識量の方は生憎と人並み。異世界とやらの存在の如何については、はっきりと言及することはできなかった。

そこでと、キュルケは隣のタバサを見やる。この小柄な少女は読書が好きで、その知識の量は膨大という言葉でさえ表わしがたい程

だ。彼女なら、なにか彼らのいたという世界について心当たりがあるかもしれない。そう思って視線を向けてみれば、キュルケは僅かに眉をひそめた。

沈黙し、表情なく座っているタバサ。それだけを見るなら、いつもと同じだ。タバサと親しくない者ならば、特に気にすることさえないだろう。雪風のように冷たい雰囲気、人形のように無表情、無感動、無口な少女。それが周囲の人間のタバサに抱いているイメージだったからだ。

しかし、キュルケの眼には、それが「いつものタバサ」には見えなかった。表情自体は、ほとんど動いていない。けれど僅かに、本当にごく僅かに、タバサのまとう空気が、普段と違うように感じられた。暗いような、重いような、固いような雰囲気。それは、いつも彼女が持っている静かな、それでいて落ち着く空気とは、絶対に違うものだ。

「あの、さ」

キュルケが訝っていると、やがてサイトが声を掛けてくる。

「それで、俺たちがタバサさんに召喚されたってのは判ったけど…」

…」
何処か不安がっているような声でサイトは言葉を続けていき、やがて意を決したように問いを投げてきた。

「俺たち、帰れるのかな？ 俺、親に何にも言えずこっち来ちゃったし、せめて連絡取りたいんだけど……」

その言葉を聞いた瞬間、タバサの体が小さく震える。それにもやはりキュルケは驚くが、同時になんとなくタバサの様子に察しが付いた。

タバサは、きっと彼らに負い目を感じているのだ。

考えてみると、他人に対してタバサに全面的な非がある事態を、

キュルケは目にしたことがない。この少女と友人となつて1年近くになるが、問題があつたとしても精々つまらない言いがかりの類で、彼女が後ろめたく思う必要があるものは皆無だつた。元々彼女がほとんど他人とかかわるうとしないのだから当然ともいえるが、今回のように相手の人生にかかわるようなことをしてしまったことは、キュルケの知る限りで初めてだつた。

キュルケは溜息を1つつくと、タバサに代わつて説明しようとする。しかし、それは当のタバサの手で制された。

「私がすべきこと」

僅かに辛そうに、けれど毅然と短く答える親友。その小さな頭を軽く撫でてあげ、キュルケは頷き返した。

「正直に言つと、私では貴方たちを元いた場所へ帰してあげることができない」

「なっ!?!」

タバサの言葉に、サイトとナビイが悲鳴じみた声を上げる。ムジユラの仮面は、まるで意に介しない様だつたが。

「サモン・サーヴァントは、あくまで使い魔を呼び出すだけの呪文…… 反対に、使い魔を送り返すという呪文は、聞いたことがない。

それに、異世界へ移動する方法なんて、それこそあるかどうか判らない」

「そんな……」

「マジかよ……」

愕然とした様子で、うなだれるのは羽のある少女と黒髪の少年。それを見て、タバサが震える声を出した。

「ごめんなさい……」

タバサが、苦し気に謝罪の言葉を口にしていく。

「こんなことになるとは、思っていなかった……」

心底からのものだろう、申し訳なさが滲みでた声。それを横で

聞きながら、キュルケは内心驚愕の声を上げていた。タバサが、自分の親友がこれほど感情を見せたのは、初めてのことだったからだ。日頃キュルケがどんなに話しかけても、ろくに眉1つ動かさずにいたというのに。

「あ、いえ……」

「わざとじゃないんだし、ええと……」

一方、謝られた側はというと、気まずそうに視線を泳がせていた。無論、帰れないということは簡単に納得できる話ではないだろうが、こつ素直に謝罪されては責めるに責められないのだろう。その様子に、キュルケは少なくともこの2名が相当なお人好しであることを理解した。

「まあ、どちらもそう悲観的になる必要もないだろうよ」

そこへ、1名だけ落ち着いた風のムジユラの仮面が話に入ってくる。

「直接送り返す呪文がないにせよ、異界へ通じる方法に心当たりがないにせよ、現にオレたちはこの場へこの世界の魔力でやってきた。既に道ができていいるなら、再び開く術も何かしらあると見た方が自然だろう」

その言葉に、俯きがちだったタバサ、サイト、ナビィは顔を上げた。

「確かに、一理ある」

考えるように間をおいた後、タバサは自分が召喚した3名を真っ直ぐに見つめて言う。

「貴方たちを召喚したのは私の責任。貴方たちを返す方法は、見つけてみせる」

抑揚のない声で、それでいて鋭い程に真剣な声で誓いの言葉が放たれた。一種迫力さえ感じられるその宣誓に、思わずキュルケは息を飲む。そして、直接それを向けられた者たちはといえば、ムジユ

ラの仮面を除いてやはり気圧されたような感を漂わせていた。

張り詰めたような空気が流れる中、仕切り直すように咳ばらいをしたのはサイトだ。

「まあ、事故みたいなものだし、そうしてくれるなら俺はそれでいいよ」

「ええ、ワタシも」

受け入れるようなサイトの言葉にナビィも続き、少しその場の空気が和らぐ。それとともに、タバサも少し気持ちいが浮きあがってきたように、キュルケには見えた。

「にしてもよ」

と、そこでサイトが不思議そうにムジユラの仮面に声を掛ける。

「お前、やけに落ち着いてるよな？ 帰れないかもしれないって聞いて、全然驚かなかったのか？」

その質問に、ムジユラの仮面は余裕あり気に答えてみせた。

「オレたち魔族は、社会とやらに縛られている人間や、精霊どもの眷族である妖精とは違う。自分がどんな世界に所属しているかなどに対して興味はない」

だから一歩引いた目で現状を認識できるのさ、と付け加えてムジユラの仮面は笑う。

「それから」

言いながら、ムジユラの仮面はタバサの方に向き直った。

「お前は、オレを自分の使い魔とするために呼んだのだろうか？」

「そう」

正確には、もうしてるじゃない

既に使い魔の契約を済ませてある仮面の疑問に短く答える友人に、キュルケは内心つつこんだ。その間にも、ムジユラの仮面は得たりとばかりににやりと笑う。無論、仮面なので表情は動いていないが、眼の光の変化でなんとなくそうと判ったのだ。

「この世界の人間が使い魔に何を担わせるかは知らんが、オレはそれを受けてもいいぞ」

その言葉に、タバサは意外そうに聞き返した。

「……それでいいの？」

無表情に聞き返すタバサに対して、ムジユラの仮面はますます笑みを強める。仮面のようにポーカー・フェイスなタバサと、仮面のくせに表情を感じさせるムジユラの仮面、なかなか対称的な2名であった。

「さつきも言ったが、以前いた世界に未練はない（なにせ自分で滅ぼそうとしてたからな）。それに召喚される直前行っていた計画も失敗に終わって、特にやりたいこともないんでね。この世界の魔法にも興味があるし、人間の寿命分程度なら仕えてみるのも悪くはないさ」

途中小声で聞き取れない部分もあったが、あっさりとムジユラの仮面は言い切った。聞こえなかった部分をタバサに尋ねると、彼女も首を横に振る。聴覚に優れた風のメイジであるタバサにも聞き取れない声となると、どうやら今聞こえてる声も何らかの魔法の類なのかもしれない。そもそも、口もないのに発声していること自体おかしいとも言えるのだし。

そんな彼　仮面をこう呼ぶべきか否かはおいておく　に、ナビイが言う。

「人間に使役されるモンスターはいるから意外とは言わないけど、魔族がよく簡単に人間に仕える気になったね？」

不思議そうな様子で聞く彼女に、ムジユラは少し間を置いてから言葉を返した。

「少し戦いがあったな、それで人間というものを、じっくり見えてきたくなったんだよ」

どこか物憂げにムジユラの仮面は答え、次いでサイトとナビイを

見比べる。

「それはともかくだ。お前たちの方は？ どうするんだ？」

そう問われると、サイトたち2名は顔を見合わせ、やがてどちらともなく頷き合った。

「俺も、使い魔つてのをやってみようかな。地球に帰れるまではお世話になるわけだし、ちよつと興味もあるしね」

「ワタシもそうね。やりましょう」

召喚された3名全員から同意の言葉が出されると、タバサは大きく息をつく。これもまた彼女にしては珍しいことで、キュルケはそんな珍しい様子の親友に温かな視線を送った。

「それで、具体的に俺たちは何すりゃいいの？」

感情をいつもよりもずつと見せてくれる友人を嬉しく思っていると、サイトの疑問がそれを遮ってきた。僅かに水を差されたという苛立ちが湧くが、彼の疑問も当然ではある。それに対し、いつもの涼しげな態度を取り戻したタバサが答えていった。

「基本的に、使い魔の役割は3つある」

「言いながら、タバサは片手を上げ、指を1本立てる。

「1つ目は、主の目と耳となること」

「目と耳に？」

「諜報活動という意味か？」

聞き返すナビイとムジユラの仮面に、タバサは首を横に振った。

「メイジは使い魔に刻んだルーンを通じて、使い魔の視覚と聴覚を共有することができる」

「つまり、ワタシたちが見ているものや聞いているものを、タバサ様も見聞きできるということですか？」

「凄いな……って、そんなプライバシー無視な！」

ナビイが感心したように、サイトが焦った風で言えば、再度首を横に振るタバサ。それにサイトたち、そしてキュルケが首を傾げる前に、タバサは言葉を続ける。

「3名も召喚されたせいなのかは判らないけれど、貴方たちとは感覚共有ができない」

「そうなの？」

キュルケは思わず声を出していた。確かに複数召喚された例は聞いたことがないとはいえ、コモンマジックである使い魔との契約でタバサが正しい効果を發揮できないとは思わなかったからだ。

ルイズならともかく、タバサに限って……

この眼鏡の少女の優秀さはよく心得ているだけに、尚更タバサの発言は信じがたい。そしてそのことを自分のことのように悩みだす羽目になってしまった。当のタバサといえば、特に気にした風もないのだが。

「でも、目と耳になることでしたら、元々ワタシの得意技ですよ」

そして親友の代わりに顎に手を当てて考えていると、さらりとそんな声が耳に入ってくる。キュルケが顔を上げれば、近くまで飛んできたナビィが2人を見下ろしていた。

「お手数ですけど、タバサ様にキュルケ様、少々ご協力いただけますか？」

柔らかな声で丁寧になされる依頼に、キュルケとタバサはとりあえず了承する。

「では、まずお2人ともお互いに少し距離を取っていただけますか」

妙な頼みに2人は一瞬首を傾げるが、言われた通り互いに部屋の隅と隅、30メートルばかりの距離で向かい合った。すると、ナビィがキュルケの方に飛んでくる。体の輝きを、藍色がかった白から青一色に変えて。

「では、タバサ様はワタシが「Look」と合図をしたら、キュルケ様に普通の声で話しかけてくださーい！」

タバサに聞こえるようにナビィが大きめの声で呼びかけると、タバサが頷くのが見えた。

「では、Look!」

その言葉が放たれると、遠目にタバサの口が動くのを確認できる。

「キュルケ?」

すると、その動きの通りに、タバサの声が耳に届けられる。

「え、タバサ!？」

「そう」

驚いて聞き返すと、タバサの声がしつかり返ってきた。それなりに距離を取っているのに、まるで聞きにくいところがない。それに驚いていると、ナビイが笑い声混じりに言葉を挟む。

「ふふ、驚かれました? ワタシはこうやって、ヒトとヒトの会話を仲介することができんです」

耳と同時に口の役割もしてますね、とナビイは付け加えた。

「それから目ですが、本かなにか、字の書かれたものはございますか?」

問い掛けてくるナビイに、キュルケは少し考える。

「本じゃないけど、手紙でもいい?」

確か、下級生の男子から送られてきた恋の詩がつづられたラブレターがあつたはずだ。受け取った恋文を他人に読ませるなど本来無作法とされるが、キュルケの常識としては特に問題ない。読ませる相手がタバサならば尚のことだ。

「では、それを机の上に置いてください」

言われた通り、取り出した手紙を開いて机に置くと、今度はナビイの色が緑色に変化する。

「ではもう一度、Look!」

そう合図すると、教室の向こうからタバサが大きめの声でキュルケに問い掛けてきた。

「これ、キュルケ宛てのラブレター?」

「そうよー、なんて書いてあるか、読めるー?」

同じようにキュルケが聞き返せば、タバサは頷いて答える。

「恥ずかしい文句で詩が書いてある。声に出す価値はない」

「……辛辣ね、同意見だけど」

身も蓋もオブラートもない言い様に、キュルケは苦笑する。普段閉じてばかりの口で、開けばさつくりと毒舌が飛び出すのが、この少女の面白い特徴の1つだ。周囲の人間から見れば、ありがたくな特徴かもしれないが。

「これは、視覚はともかく、聴覚に影響しているように思えない」
キュルケたちの方へと近づいてきながらタバサが言うと、ナビィがそうですねと同意を示す。

「ですが、音を聞く必要があればそれを伝えることはできますよ」
その返答を受けてみれば、タバサの眼鏡が僅かに光った気がした。

「興味深い」

「ふふ、これは“Z注目”と呼ばれる技です」

最近では“L注目”とも呼ばれますが、と付け加えてナビィは笑った。

「Z注目使いか、では癒しの技は使えないのか？」

そこで、ムジュラの仮面が口を挟み、ナビィがその問いに頷いてみせる。

「そうか、まあ治癒使いは力を使う度にしぼんでしばらく消えるかな。Z注目の方が利便性はあるが」

そこで、それにしてもとばかりにムジュラの仮面がナビィに近寄る。

「お前、妖精のくせにいやに世俗的だな？ 大妖精や高位の精霊ならまだしも、人間の王侯貴族に敬語を使うのか？」

「あはは……、ワタシの場合、王族やら部族の長さんやらとお会いする機会が多かったから……」

「変わった妖精だな」

呆れとも感心ともとれる態度で、ムジュラの仮面が呟く。そして、

黙って座っていたサイトが腕組みをしながら呟いた。

「ナビイが最初からそういう能力持ってたから、ルールが狂って感覚の共有ってのがうまくいかなかったのかな？」

「わからない。けれどその可能性はある」

サイトの疑問に答えると、タバサは指を2本立てた手を上げる。

「2つ目は、主の望むものを見つけること。秘薬の原料となる硫黄や苔等を取ってくる役目」

それを聞き、ナビイは困ったように言った。

「見つけてくることはできるとは思いますけど、取ってくることは無理かしら」

「それは俺とムジユラの仮面でできるんじゃないか？ 探すのはナビイで、運ぶのは俺らってことで」

ムジユラの仮面被れば俺も飛べるしな、とサイトは笑いながら、キュルケたちの許へやってくる。

そして全員が一ヶ所に集まると、タバサは3本目の指を立てた。

「3つ目が1番重要。その能力で主を護ること」

そう言つと、ナビイとサイトが顔を見合わせる。

「うーん、戦闘補助はできても、ワタシは直接闘うことはできないわ」

「俺も、精々喧嘩を2、3回したことある程度だしなー」

弱気な言葉を口にするのと、2人はムジユラの仮面に視線を向けた。自然、キュルケとタバサの目も彼に移る。

4対の視線を浴びながら、色々と得体の知れない仮面は僅かな間をおいて言葉を発した。

「オレ1人では、正直厳しいかもしれないな」

意外な言葉に一同が驚くより早く、ムジユラの仮面は先を続ける。

「さっきも少し言ったが、オレは以前の力を大分失っているんだ。

なにより、オレは自分で自分の力を使うのが苦手だね」

「どういう意味？」

怪訝とキュルケが聞くと、ムジユラの仮面は少し恥ずかしそうに声を紡ぎ始めた。

「オレは見ての通り仮面だからな。つまり本来使われる側だ。情けない告白になるが、オレはオレを被る他者の意思から力を使うことはできても、自分単体ではどう力を使っていいのかよく判らないのさ」

そこまで言うと、声が自嘲じみたものに変わった。

「さもなければ、あんな子鬼を利用する意味はなかったし、あるいはあの決戦の行方も変わっていただろうに」

独白のような呟きにキュルケたちが首を傾げれば、ムジユラの仮面はこっちの話だと苦い声で応じる。

「まあ、そういうわけだな。オレが戦うには、オレの力を引き出す被り手がいるのさ」

言って、ムジユラの仮面はサイトを見据える。

「被り手って、俺か？」

自身を指差すサイトに、ムジユラの仮面は頷いた。

「ふうん。まあ、お前を被った時は確かに力が湧いたけど、どこまでできるのかはよく判らないよ」

不安気にサイトが言うと、ムジユラの仮面はさもありませんといった風に笑う。

「なら、表に出てオレを被れ。どこまでできるか、自分で証明してみせる」

ムジユラの仮面に促され、才人たちはヴェストリの広場というところに来ていた。城の中庭にあたるその場は日当たりが悪く、景観は整えられているが雰囲気はどこか物寂しい。そのためなのか、そ

れとも今が本来授業の時間だからか、今その場には彼らの他に誰もいなかった。

「んで、具体的にどうすりゃいいんだよ？」

その広場の中央辺りに立ちながら、才人は手に持つムジユラの仮面に問い掛ける。

「いいから、とりあえず被れ」

急かすような返答に、才人は肩を1つすくめて彼を顔に押し付ける。

「デュワッ！」

「なんだ、その掛け声？」

「俺の故郷で、顔につけて強くなるものの代表的掛け声」

ムジユラの仮面の疑問に、笑い声混じりに答えた。そういえば、タバサの眼鏡も赤フレームだな、と思いながら。

それから半瞬遅れ、先程感じたのと同じ力の奔流と、同じ精神の昂りが脳天を貫き、全身を駆け巡る。

「ふう、マジこれでパワーダウンしてんのか？」

「残念ながら」

ムジユラの仮面を通し流れてくる力を感じながら、才人は感嘆の息を漏らした。本来の自分では到底

あり得ない、進るようなエネルギーの流れ。これで弱体化しているとは、とても思えない強大さだ。

「信じらんねえ。元々はどれだけ強かったんだよ」

「そう感じるのは、お前がオレから力を引き出してくれているからだ。上手にな」

賞賛の声が、顔面から耳許へと届けられる。それが昂った心に心地よく響き、元々お調子者の才人は悦に入った。

「はは、うまいこと言って、俺をいいように使おうとか思っていない？」

図に乗りついでに冗談めかして言うと、ムジユラの仮面は沈黙で応じてくる。

「いや、黙られると不安なんだけど……」

「ちよつとした茶目っ気だ」

「……本当か、おい」

何やら不安が立ち上ってくるが、本当に自分をどうこうする気ならこんな警戒を煽るようなことは言わないだろう。気を取り直して、才人は力を使おうとする。

「そんで、この後はどうするんだ？」

「好きなようにすればいいさ。思った通りに力を振るえ」

簡単な返事に、才人は軽く頭を掻いた。

「いや、好きなようにつたつて、どうすりゃいいんだよ」

「とりあえず、なにか戦わなければならぬ場面でも想像してみる。そうすれば、自ずと見えてくる」

お前みたいに好奇心が強い奴は、えてして想像力もあるからな、と付け加えられた言葉を聞きつつ、才人は両の手の平を見下ろしてみる。

戦わなければならぬ場面、か……

正直、ぴんとこない。近頃治安が悪化してきたとはいえ、平和ボケした現代日本で育った才人には、戦闘など縁遠い言葉だ。

しかし、と才人はタバサの方に目を向ける。才人たちから校舎側に20メートル程離れて、キュルケ、ナビィと共に立つ青い髪の少女。自分を、突然この異世界に連れてきた人物。家から、友から、家族から、地球から才人を切り離れた者。それを考えれば、彼女は仇とも呼べる存在だ。

けれど、才人はタバサを責める気には、あまりなれなかった。せいぜい12か13歳程度と思われる、あどけない美少女。そんな自分より4つか5つも年下の女の子に頭を下げられて、尚恨み言を言える程、才人は狭量なつもりはない。勝手に召喚などして使い魔になれなどふざけるな、という気持ちはないでもないが、召喚のゲー

トをくぐってしまった才人にも非はあるし、彼女1人に責任を押し付けるような真似はしたくなかった。

それに、彼女は自分たちを帰すと約束してくれたのだ。彼女が、才人たち3名を召喚した責任として。

立場的には被害者かもしれないが、あんな小さな少女にそんな気を遣わせてしまっていては、年上の男として何か情けない。何か変な考え方という気もするものの、できる限り彼女の力になりたいとそう思っていた。彼女が危険な目にあっている時は、守れるものならば守ってやりたい。あんな小さな女の子にどんな危険があるのかと内心ツツコミが入るが、なにせファンタジーの世界である。先程の桃色の髪の少女が乗っていたドラゴンや、キュルケの召喚したサランダー、ナビイとムジュラの仮面は新種のドドンゴかと尋ねていた。のような幻獣と呼ばれる存在が普通に存在しているらしいので、そういったものから守る場面はあるかもしれない。

怪物に襲われる、うん、これだな

そこで、才人はその方向でイメージを固めていった。角が生えて二足歩行する、特撮の怪獣じみたフォルムの、化け物。それが、タバサを追いかけている。タバサは魔法で応戦するも、効果は見られず徐々に追い詰められていった。鋭い牙の生え揃った顎から涎が滴り、今にも食いつかんと開かれた。そこまで想像するだけで、才人の内に何とかしないとという気持ち膨れ上がる。

では、どうかするべきか。ムジュラの仮面のおかげで、何とかする力はある。問題は、それをどう使うかだ。

まず考え付いたのは、武器だった。剣や槍を使うべきか、いや、もっと強力なもの、銃火器の類はどうだろう。拳銃や猟銃程度では駄目だ。もっと強力な武器、そう、大砲の類がいい。

そこまで考えると、我知れず才人の体は浮き上がっていた。足が地から離れた浮遊感を感じながら、イメージを続けていく。

大砲を使うといっても、その場にいちいち大砲を出現させるわけにはいかないだろう。そんなスペースがない場合だつてある。

物を生み出す様な考えが普通に浮かんできたことに一瞬驚くが、すぐに気持ち切り替わつて想像を練り続けた。これもムジユラの仮面を被っている影響なのかもしれない。

大砲を作り出さず、大砲を使う。そうするにはどうすべきか。僅かに頭を悩ませると、すぐに答えは出た。

その考えに、才人はムジユラの仮面の下で笑みを浮かべる。簡単なことだ、笑いながら、才人は拳を握つた。

大砲がないなら、“自分がそうなればいい”。思いながら、右手を開き高く掲げた。どうせなるなら、ただの金属塊を撃ち出すだけの大砲とは、違うことがしたい。折角ムジユラの仮面に魔法の力を借りているのだから、魔法の力を砲弾にする方が面白い。

どんな魔法がいいだろう。炎はどうか、焼くことはできても打撃力に欠ける気がする。雷はどうか、あるかどうかは不明だが、絶縁体には無効化されてしまう。しかし、どちらも悪くない。炎の熱気と、雷の速度と破壊力。その両者の強みを併せ持っているものは何だろうか。

思いながら、掲げた右の拳を開く。必要なものは、光だ。高熱を持ち、何よりも速く飛び、破壊力を持つ程に凝縮された光の砲弾。その想像を固めていくにつれ、自然と右手に力が込められていった。

雷電に似たエネルギーが右手に集い、やがて飴細工のように形を為していく。イメージに従つて作り上げられていく光の砲弾を手に

しながら、才人の心は興奮と不安で渦巻いた。自分の思いのままに強大な力を操ることができる興奮と、自分の思った通りに破壊の力が生み出せてしまう不安だ。

「恐れているのか？」

その才人の思いを読み取ったのか、ムジユラの仮面が尋ねてくる。

「ああ、正直、ちょっと怖いよ」

その問いに、才人はやや恥ずかし気に肯定した。何かを破壊できる力、それは好奇心を刺激するとともに、恐怖も与える。物を壊す、傷つけるということは、平和に生まれ育った者には大きな責任に思えるのだ。

「恐れることはない」

徐々に膨れていく不安感の中、ムジユラの仮面の声が染み入っていく。

「今のお前は強い。強さは責任に繋がるが、同時に責任を取る力にも繋がる。恐れるな、たとえ失敗したとしても、今のお前ならばどんなミスも取り戻せる」

諭す様な穏やかな声が、心を落ち着けていく。それとともに、影をひそめていた力への興奮が湧き興ってくる。

その興奮のまま、才人は眼下の地面に右手を向けた。タバサたちを巻き込むようなことのないよう、離れた地点へ照準を定める。

「うおおおお……！！」

咆哮と共に、才人は右手に握った力を解放した。その刹那、光の砲弾が迅雷さながらに手の平から飛び出す。矢よりも早く飛び一撃は瞬く間に大地との距離を縮めていき、一瞬の後には目標へと達する。そして、光の砲弾はその威力を示した。閃光が爆ぜ、その残骸が細かな粒子となって火花と共に舞い散る。赤く焼けた土が弾け、濛々と土煙が上がった。そして、それらが晴れたその様を見て、才人は息を飲む。つい先程までは淋し気ながら整えられた景色を見せ

ていた広場には、直径5メートルにも及ぶクレーターが穿たれていた。

「ふう、こんな手下の仮面に使わせていたような力を使われるとは心外だが、まあ威力は上々か」

ムジユラの仮面が何処かつまらなそうに言い、それに才人は聞き返した。

「仮面が仮面手下にしてたのか？」

「同類を部下に持つのはおかしなことではないだろう」

その返答に、それもそうかと頷いた。それから、改めて地上の戦果を見やる。

「しかし、ホントにすげーな、お前の力」

「正確には、オレのではない」

才人がその言葉に首を傾げる前に、ムジユラの仮面は続けた。

「オレとお前の力だ」

優しい気なその声は、才人の自尊心を刺激した。これ程の力が、自分の成果でもあるのだと言われ、達成感に似た感慨が湧く。次いで、僅かながら疑問も湧いた。

「失礼なこと聞くけどさ」

「？」

「なんかさつきからおだてるようなこと言ってるけど、ホントに他意はないんだよな？」

やはり、ムジユラの仮面は沈黙で返す。

「だから、黙んなよ！ 気になるだろ！」

「では、使えない道具はタダのゴミでしかないとだけ言っておく」

「意味判んねーよ！」

顔を覆う相手に怒鳴り返ししながら、才人はとんでもない相手と手を組んでしまった予感がふつふつと沸いてくるのだった。

そして、まだ誰も気付いていない。

ムジユラの仮面を被っているその瞬間、ムジユラの仮面に刻まれていた使い魔のルーンが、才人の左手に浮かんでいるということに。

まだ気付いている者は、誰もいないのである。

〈続く〉

く第3話 今日から使い魔、道連れ2名く（後書き）

2011/08/08 改行、その他一部修正

〈第4話 もう1組の主従〉

ハルケギニアの竜の中に、古代から伝説として詠われる種族が存在する。その種族は言語感覚に優れ、知能は通常の竜はおるか人間さえ上回り、先住魔法の名で知られる精霊の力を操り、強力な息吹を武器とし、大空を疾風のごとく飛翔する。

その強力な種族を韻竜といい、その中で風と深く関わる眷族は風韻竜と呼ばれた。

「そして、その一員が、このイルククウなのね！ きゅい！」

魔法学院の片隅で、年齢200歳 人間でいえば10歳前後

である竜の少女、イルククウは、自らを召喚した桃色がかったブルンドの少女、ルイズにそう名乗る。その召喚者は半ば呆然とした表情でイルククウを見上げていると、やがて我に返ったらしく口を動かしてはじめた。

「まさか、貴方が韻竜だなんて思わなかったわ……」

信じ難いとばかりにルイズが言う。

「きつとそうだと思うたから、黙ってたただの風竜のふりしてたの！ だって、ルイズ様ったら風竜を呼んだと思っただけで泣いて喜んでるんですもの！」

風韻竜が人間に劣るなどとはこれっぽっちも思っていないが、一応は使い魔となったのだし相手のことは様付けしておく。

「これで、わたしが風竜どころか風韻竜だなんて判ったら、嬉しがりすぎで死んじゃうかもしれないわ！ この風韻竜の機転と心遣いに、感謝するがいいのね！」

初めて一族から暮らす巢の外に出てきたことと、初めて人間と会

話していることの興奮から、イルククウは口も軽く言葉を吐き出していく。普通の竜ならばこんな風にぺらぺらと喋ることなど不可能だが、韻竜である彼女には雑作もないこと。それにイルククウは年頃の少女らしくお喋りな気質なのだ。

「なんだか微妙に偉そうな態度が気になるけど、それにしても驚いたわ」

イルククウが一人言葉を続ける中で、ルイズは少し落ち着いたらしい声をだす。

「韻竜は、もう絶滅したつていられているのに」

「きゅい！ それは違うのね。わたしたちは、人間の目から離れた場所に巣を作つて、そこで暮らしているの」

ルイズの言葉に、イルククウは召喚される直前までいた場所を思い出す。

彼女たちの一族は、俗世間から遠く離れた場所で、修道僧のように毎日大いなる意思への祈りを捧げ続けるという、なんとも退屈な暮らしを続けていた。父曰く、自分たちのような古い一族はあらゆる危険から離れて長生きすることが世界への恩返しなのだというが、巢の外へ出ることも許されない生活なんて幼いイルククウには窮屈すぎる。

だからこそ、イルククウはルイズが開いた召喚のゲートに、迷わず飛び込んだのだ。偉大なる古代の眷族たる自分を召喚するのだから、さぞや強力な魔法使いなのだろう、その人物から様々なことを学べば、一族に新たな知識をもたらせるだろう、そんな期待を胸に。

ゲートの主が思ったよりも頼りな気な少女だったということとは少々期待外れだったし、偉大なる風韻竜の自分をただの風竜呼ばわりしたことには多少怒りを覚えたが、自分に抱きつきながら涙を流す

姿を見ては、とても刺激するような真似はできなかった。

それに、ルイズの容姿が人並み外れて整った、可憐な容姿であることも大きい。ウェーブ気味で、桃色がかったブロンドの綺麗な長い髪。小柄でほっそりした、柔らかそうな体。勝ち気そうな鳶色の双眸を持つ、あどけなくも高貴さを感じさせる顔立ち。竜の目から見ても、ルイズは美しいと認めることができた。イルククウも女の子、可愛いものには弱いのだ。人間の少女が愛らしい猫や犬に頬を緩めるように、異種族であっても、むしろ異種族だからこそか、可愛いものは可愛いと感じてしまうものらしい。

一方、ルイズはイルククウの言葉に1つ頷くと、なにやら顔を笑みで彩りだす。

「私が、風竜どころか風韻竜を召喚するなんて」

小さな呟き、それを皮切りに、自信に満ちた声が放たれていく。

「そうね、そうよね！　とうとう努力が実ったんだわ！　私だってヴァリエール公爵家の娘なんですから、いつか大成するって信じてたわ！」

満面の笑みで、ルイズは自分の召喚の結果に、再度の喜びを露わにした。ほんの少しだけ、また目に涙を見せながら。

「見てなさいよ、あいつら！　なんとたつて風韻竜を使い魔にしたんだから！　これでもうゼロだなんて呼ばせないわ！」

「ゼロってなに？」

「なんでもないの！　もう関係ないんだから！　きつと、この調子で私はどんどん才能を開花させていくわ！」

言いながら、ルイズは腰に手を当てて薄い胸を張った。

それにしても、先程は泣いて喜んだと思ったら、今度はこの自信たっぷりの様子。愛らしい外見の割に、結構調子に乗り易いタイプなのかもしれない。

もつとも、お調子者なのはイルククウも同じなので、似た者主従といえるのだが。

それはともかく、自分を召喚したことでこれほど喜んでくれるルイズに、イルククウは好印象を抱いた。

「きゅい！ そんなに喜ばれると、わたしも嬉しくなってくるわ！ きゅいきゅい！」

歌う様な調子で言いながら、イルククウはあることを思い出した。

「きゅい！ でも、ルイズ様！ これだけは覚えておいてほしいのね！」

「？ どうしたの？」

「あのヘンテコ！ あの気持ち悪いのには、近づいちゃダメなのね！」

イルククウの言葉に、ルイズは首を傾げるばかりだ。そこでイルククウも記憶をたどり、補足の言葉を重ねる。

「ほら、あの青い髪のちびっこ！ あの子の召喚したのの1匹なのね！」

「青い髪……ああ、あの子、タバサっていったかしら」

「そうなのね、って、ありゃん？ ルイズ様あの子のこと知らないの？」

同じ魔法学院のクラスメイトだということなのに、よく知らなそうな様子に疑問符を浮かべる。

「去年は別のクラスだったし、あの子目立つタイプじゃないからルイズは説明しながら、それにツエルプストーとよく一緒にいるし、とよく判らないことを言っただけをしかめた。」

「それで、あの子がどうかしたの？」

聞き返す召喚者に、若干苛立ちながらイルククウは繰り返す。

「だから！ あの子が召喚したヘンテコ！ 3体も召喚されてたけど、その中で1番気持ち悪いの！」

「ああ、あの気味の悪い仮面のこと？」

イルククウはこくこくと頷いた。

「そうそう、そいつ！ あれには近づかない方がいいのね、というか絶対近づいちゃダメなのね！」

「う、うん。まあ、あんなのに近寄りたくはないけど」

鼻息荒く迫れば、ルイズがやや（？）怯んだ様子で応える。

「でも、なんでそこまで念を押すのよ？」

不思議そうな顔で尋ねてくるルイズ。それに一瞬イルククウの方がきよとんとするが、すぐに人間は精霊の声が聞こえないことを思い出した。

「あのヘンテコ、絶対危険なのね！ だって、あいつが出てきた途端、周り中の精霊たちが一斉に警戒しだしたんだもの！」

「精霊が警戒？ そんなことってあるの？」

どうやら韻竜が精霊の声を聞ける種族であることは理解しているらしい。召喚者の博識ぶりに嬉しくなるが、今はおいておく。

「今まではそんなこと1度もなかったし、お父様もお母様も長老様たちも、誰もそんなことがあるなんて言っていなかったのね。だから、そんな事態を引き起こすあいつは、絶対に危ない奴なのね！」

語気も強く、力説してみせた。あんな者に、この愛らしい召喚者を会わせるわけにはいかない。

あの時の精霊たちの声、あんな怯えを含んだ声なんて、聞いたことがなかった。第一、あの仮面の姿自体も気に入らない。繰り返すが、イルククウは女の子。可愛いものは好きだが、不気味なものは嫌いなのだ。まずは外見で第一印象が決まることは、どの種族もあり変わりがない。

「えーつくし！」

「どうしたの、ムジユラの仮面？」

突然奇妙な声を上げるムジユラの仮面に、ナビイが驚いた。

「いや、なにか急にくしゃみが……」

ムジユラの仮面が戸惑った風で言っていると、今度は才人が訝しむ。

「鼻も口もないくせに、どこでくしゃみ出すんだ？」

「いや、オレもこれまでこんなことはなかったんだが……」

そして、ムジユラの仮面は体ごと首を傾げ、周りの者たちも合わせる様に首を捻るのだった。

「そう、判ったわ。元々そうするつもりはなかったけど、あの仮面には近づかないようにする」

シルフィードの警戒心が伝わったのか、ルイズは先程よりもはっきりと約束してくれた。それに安堵の息をつくとき、今度はルイズが表情を引き締めて口を開く。

「でも、私の言うことも聞いてちょうだい」

「？ なんなのね」

聞き返すと、ルイズは周囲を見回して、人目があるかどうかを確認した。今更という気がするのだが。やや呆れ気味に見ていると、ルイズはイルククウに近づき顔を下げさせる。

「今日から、人前で言葉を話すのはダメだからね」

そして、声をひそめて耳打ちされた言葉に、激昂する。

「何を言い出すのね、この桃色娘は！ 偉大なる風韻竜であるこのわたしに、いつまでもおバカな風竜なんかのふりをしているっていうの……」

唾と一緒に抗議の声を飛ばした。今日はルイズが落ち着いてからということまで我慢したが、これから毎日会話してはいけないなど冗談ではない。その怒りのままに、イルククウは文句の言葉を放っていく。その声の風圧に吹き飛ばされそうになりながらも、ルイズは

長い髪を抑えつつ言葉を続けた。

「お願い、聞き分けて！ 韻竜種は絶滅していると思われてるし、もし貴方のことが知れたらきつと大変なことになるわ！」

「大変なことつて、どんなことなのね」

まだ憮然としながらも、少し声を抑えてイルククウは聞いてみる。その質問に、ルイズが溜息混じりで説明を始めた。

「きつと、魔法研究所が研究のためだつていつて、貴方を連れてい
つちゃうでしょうね。もしそうなつたら、きつと連日連夜実験材料
にされて、拳句の果てには体をバラバラに……」

ルイズの語る内容に、イルククウは慄然とする。

「こわい！」

たかだか言葉を喋るか喋らないか程度のこと、そんなことになり得るとは思いもよらなかつた。恐怖の声を上げるイルククウに、ルイズは頷く。

「そう、恐いことになつちゃうのよ。私もそんなことにならない様
させたいけど、アカデミーは王立機関だからヴァリエール家でも流
石にどうにもできないし、それに万一エレオノール姉さまに知れよ
うものなら……」

そこまで言つと、突然ルイズは身を震わせ始める。

「きゅい？」

それに怪訝としていると、ルイズの口からなにやら言葉が漏れて
いることに気が付いた。

「ごめんなさい姉さまでもイルククウはせっかく召喚できた私の使
い魔なんですだから取らないで……」

「きゅ、きゅい……？」

自分の鱗のように顔を青くしながらぶつぶつと呟くその姿に、
イルククウは我知れず後ずさつた。その距離、約3メートル程。先程
のエレオノール姉さまなる人物に、よほどなにかあるのだろうか。

「貴族の義務は判っていますですけどおねがいです連れていきたくない
でああごめんなさいほつぺたつねらないで顔ふまないでごめんなさい
母さまへの報告だけは堪忍して……」

「あ、あの……、ルイズ様……?」

憑かれたように独り言を続けるその様は正直不気味この上ないが、
イルククウは思い切って声を掛けてみた。そこで、やっと正気に戻
つたらしいルイズが咳払いをする。顔色はまだ真っ青なままだ。

「と、とにかく、喋ったら大変なことになるから、他の人には喋っ
ているところを見られないようにしなきゃダメなんだからね!」

びしつと指を突きつけてくるルイズに、イルククウは勢いよく首
を上下させた。先程の尋常でない、むしろなさすぎるルイズの様子
に、すっかり不安が伝染してしまったのである。

そこで、ルイズが何か思いついたような顔をした。

「そうか、それなら名前も変えた方がいいかもしれないわね」

「きゅい? 名前?」

「ええ。イルククウって可愛い名前だと思うけど、私が思いつくよ
うな名前じゃないし、なんでそんな名前にしたかって聞かれたら答
えられないもの。もし聞いてきたのが姉さまだったりしたら……」

そこまで言って、また何処か遠い所に行ってしまいそうになりか
けるルイズに、イルククウは慌ててブレーキを掛けさせる。

「そ、そういうことだから、人前ではなにか別の名前で呼んだ方が
いいと思うのよ」

言うが早いか、ルイズは唇辺りに指を当て、考え込み始めた。

「風韻竜なんだから、風に関する名前の方がいいわよね、それに女
の子だし、可愛い名前に
しなきゃ」

眉根を寄せて、可愛らしく唸るルイズ。それを見てみると、自然
と胸が温かくなってきた。使い魔となった自分の身を案じてくれ、
自分の名前を一所懸命に考えてくれていている。そのことに、イルクク
ウはルイズの優しい心根を感じずにはいられなかった。

そして、やがてルイズは結論が出たらしく、両の手を打ち鳴らす。

「うん、決めた！ シルフィードっていうのはどう？」

「シルフィード？」

聞き返すと、ルイズは笑顔で頷いた。

「物語に出てくる、風の妖精の名前よ。どうかしら？」

シルフィード……

ルイズが考えてくれた名前を反芻していると、心が感激に染まっ
ていくのが判る。

「素敵な名前ね！ きゅいきゅい！ 可愛くて綺麗な名前！ 新し
いなーまーえー！」

跳びはねたい様な喜びを歌声で表してみれば、ルイズの方もます
ます顔をほころばせていった。

「ふふ、気に入ってくれたみたいね」

「ええ、とつても！ どうもありがとう、ルイズ様！」

感謝の言葉を告げながら召喚者、否、主人であるルイズに鼻先を
すりよせる。

「も、もう、使い魔が勝手にご主人様に顔を近づけるなんて、本当
は不敬なんだからね」

口ではそんなことを言っているが、その紅潮した頬と緩んだ口許
を見れば、照れ隠しであることは見え見えだ。そんな主の子どもつ
ぽい愛らしさにイルククウ、否、シルフィードの中でルイズへの愛
おしさが募っていった。

「でも、あのヘンテコには絶対近づいちゃいけないのね！」

だからこそ、あの奇妙な仮面に対しては、釘をしっかりと刺してお
く。

そして、実のところその考えは決定的外れのものではなかった。

ハルケギニアに生息する幻獣と、ハイラル、タルミナ等でモンスターと総称される魔物や魔族。姿形に関しては大差が無くもないのだが、この両者はある一点において大きく異なっている。それは、幻獣が生態系に則った存在であるのに対し、モンスターはこの世のルールの乱れから生まれ出るものであるということだ。

世界のルールの乱れ、例えば世の平和が脅かされる時、そこにモンスターの生まれる余地が生じる。生まれたモンスターたちはその凶暴性のままに世を乱し、それが更にモンスターを生む。その歪んだ生態故に、モンスターは世界の理法を司る精霊たちとは敵対関係にあった。

普通、幻獣は精霊と戦おうなどとは思わないし、中には韻竜のようにその力を借りるものさえいる。しかし、モンスターはそうではない。例を挙げるなら、ハイラルではナビイの故郷である森を守護してきた精霊デクの樹が魔物に呪い殺されたし、それとは別の時代に空の精霊ヴァルーや水の精霊ジャブー等が魔物に脅かされ、また別の時代にはフィローネ、オルディンといった光の精霊たちが魔物に力を封じられている。

そして、当の奇妙な仮面、ムジュラの仮面自身もまた、邪気と魔力が健在の頃はタルミナの四方を護っていた守護神たちを呪って魔獣に変えた上、精霊の眷族である大妖精を 殺したわけではないが ばらばらに引き裂いていた。

世界に仇なし、時として精霊さえも手にかける魔性の命、それを魔物や魔族と呼ぶのだ。

そんな異世界の存在の生態をシルフィードたちが知る由はないが、それでもシルフィードはあの仮面に対しては最大限の警戒をしておくよう、心に決めていた。

と、そこでシルフィードのお腹がぐもった音を鳴らす。

「きゅい、ルイズ様、わたしお腹がすいた、お腹がすいた、お腹が

すいた！」

「そうね、そういえば、召喚してからまだご飯あげてなかったっけ」

思い出したようにルイズは言うと、踵を返してシルフィードを招いた。

「じゃあ、いらっしやい。厨房の場所を教えるから、貴方が来たらご飯をもらえるように言いつけておくわ」

「きゅい！ ごはんごはん！」

喜ぶシルフィードに、ルイズは少し眼を厳しくさせる。

「でも、約束ちゃんと判ってるわね？」

「きゅい！ きゅいきゅい！」

喋ってはいけないことを覚えていることを示すように、シルフィードは竜の泣き声で応えた。その態度に満足したらしいルイズは、シルフィードを厨房に連れていき食事を与えてくれる。その食事の美味しさに、シルフィードは思わず感涙してしまった。巢では調理という概念がなかったため、貴族用の食事を作るコックたちの料理は新鮮な驚きと喜びに満ち溢れていた。

そして、そんな食事を与えてくれた主のことが、ますます好きになっていく。舌鼓を打ちながら、イルククウ改めシルフィードとなった風韻竜の少女は、新たな絆の証である使い魔のルーンを見つめるのだった。

その左前足の甲に浮かんだルーンが何を意味し、自分を召喚した少女がどういうメイジなのか、何も知らないままに。

〈続く〉

く第4話 もう1組の主従く（後書き）

2011/08/08 改行修正

〈第5話 最初の夜 in トリスティン〉

ムジユラの仮面の力を試した後、才人たちは一旦空き教室に戻った。そして、才人、ナビィ、ムジユラの仮面の3名は、タバサとキユルケにこの世界のことを詳しく説明されていく。

曰く、この大陸は今才人たちがいるトリスティンを始め、大きく5つの国家と幾つかの都市国家からなる西側のハルケギニア、それ以東のエルフという種族が住まう東方と一括りにされる土地に分かれていること。

曰く、この世界では基本的に魔法が使えるメイジは貴族とされ、それ以外の者は平民とされることで社会が構成されていること。

曰く、基本的に魔法を使えない者が貴族と同等の権威を持つことはできず、それが可能なのはキユルケの母国ゲルマニアくらいのものであること。

曰く、この世界において魔法は社会の基盤となっており、それ以外の技術は二の次であること等だ。

反対に、才人たちも自分たちの世界のことを話していく。

曰く、地球の技術に魔法は全くなく 仮にあつたとしても遙か昔のことだ 、物理法則や数学、工業力を発展させた科学という技術により生活が成り立っていること。

曰く、ハイラルは3人の女神たちにより創造され、人間、コキリ族、ゴロン族、ゾーラ族等の幾つかの種族が共に生きる地であること。

曰く、タルミナもハイラルとやや内容が異なるが人間と異種族が共存し、4人の巨人が四方の守護神となっていること等を。

そうやって、一通りの説明の交換が終わる頃には、日がすっかり傾いていた。窓から赤い西日が差し込みはじめ、次いで遠くから鐘の音が響きだす。

「終礼の鐘」

「ああ、もうそんな時間なのね」

タバサの言葉にキュルケが続いた。終礼ということは、もう今日の授業が終わる頃なのだろう。そして、今が夕暮れであることに気付くと、才人の胃が自己主張を始める。

「そろそろ腹減ったな……」

腹部を撫でながら言ってみれば、タバサが頷いた。

「もうすぐ夕食の時間」

「そうね、食堂に行きましようか」

キュルケの言葉に一同は揃って頷いたが、彼女はそこで何か考える様に才人たちを見てくる。

「でも、才人たちも食堂に入れるとまずいかしら？」

「え、なんで？」

才人が首を傾げると、キュルケは肩をすくめてみせた。

「アルヴィーズの食堂は、貴族専用なのよ」

「トリステイン貴族は頭が固いから、平民が入ればなにかしら言われると思う」

「そ、そうなの？」

2人の説明に、才人は若干焦る。食堂が使えないのなら、自分はどこで食事を取ればいいのかだろうか。

「問題ない、厨房は使用人用の食堂を兼ねているから、そこで貴方たちの分の食事も用意するように言いつけておく」

「そっか、ありがとなタバサ」

タバサの言葉に才人は安堵し、彼女の小さな頭を撫でる。途端、彼女は僅かに驚いた風に、ただし表情は動いていないが、顔を向けてきた。次いで、才人もすぐに自分が何をしたかに気付き、慌

てて手を離す。

「あ、ご、ごめん！」

相手が幼い少女とはいえ、そんな気軽に触れるものではない。女の子に慣れていない普通の自分なら、簡単にこんなことはしないはずだ。主従関係を結んだことで、気が緩んだのだろうか。

それを見ていたキュルケが、意地の悪い笑みを浮かべる。

「貴方、奥手そうに見えて意外に手が早いじゃない？」

「な、なに言ってるんだよ！」

冗談めかして言うキュルケに、才人は抗議の声を上げた。幾ら出会い系サイトに登録する程彼女募集中状態だからといって、こんな下手をすれば小学生程度の女の子に手を出す気は毛頭ない。

まあ、確かに可愛い子だとは思っけど……

そんな考えが頭をよぎると、才人は何かを否定するように頭を振る。自分はロリコンではない、色々と破滅する類の人間ではない、そう念じながら。

「おい、何をやってるのか知らないが」

「もうタバサ様とキュルケ様行っちゃったよ」

ムジユラの仮面とナビイの声で才人は思考を中断し、主となった少女の後を追った。

そして先行する2人に追いつくと、才人はナビイとムジユラの仮面に視線をやる。

「そういや、俺はともかくお前ら何食べるんだ？」

ナビイは妖精ということだし、ムジユラの仮面に至っては仮面である。何を食べるのか、今一つ予想が付かない。

「ワタシは別に何もいらないわ。妖精は食事の必要がないの」

「同じくだ。オレは生物というだけで、基本は仮面だからな」

「そうなのか？」

「そうなの？」

2人の回答に、才人とキュルケが疑問を呈する。

「森の妖精っていったら、なんとなく花の蜜とか飲むイメージがあったけど」

「フフ、いいませんよ。妖精は精霊と似た存在ですから、普通の生き物とはちよつと違うんです」

キュルケの疑問にナビイが答え、才人もムジユラの仮面に尋ねた。

「お前も、触手とか生やしたからクラゲみたいにして何か食うのかと思っただけど」

「誰がクラゲだ！ 胃袋などないから、食おうが食うまいがどちらでもいいんだよ」

「助かる」

そこで、タバサがぽつりと呟いた。

「食費が1人分で済む」

「あ、ああ、お世話になります」

食費という単語にこれから彼女に扶養される実感が出てきた才人は、思わず頭を下げる。

「自分より4つか5つは年下の娘に首うくを垂れるとは、いい様だな」

「やかまし！」

ムジユラの仮面のからかいに、才人は怒鳴り返した。反論の言葉がないのが尚情けない。

「15歳」

すると、2名の主となった少女が足を止め、言葉を投げってくる。

「私の歳」

「へっ!？」

タバサの告白に、彼女の使い魔3名は驚きの声を八モらせた。

「ちよつ、ちよい待った! えつ、なに!? 15!? じゃあタバサって、俺のたった2つ下!? マジで!？」

「嘘っ!？」 ワタシてつきり、リンクと同じ12歳くらいだって

思ってた！！」

「あの剣士といい、子鬼といい、最近ガキに縁があると思っていたが、思ったよりは上だったか」

三者三様の驚愕を聞きながら、タバサは言葉を続ける。

「だから、4つも5つも、ということはない」

それだけ言うと、タバサは踵を返して足を進めていった。そして、キュルケが才人とムジュラの仮面に咎めるような眼を向けてくる。

「貴方たち、レディの年齢に関する話題は、もっと注意しなさいな」

「は、はい……」

視線に気圧された才人だけが答え、一行は再び厨房を目指した。

しばらく歩き、厨房が見えてくると、青いドラゴンを従えた桃色の髪の後ろ姿がそこから遠ざかっていくところだった。

あれだけでかい使い魔だと、メシの用意も大変だろうなー

余計な心配をしながら、タバサが使い魔にかける食費が自分の分だけでよかったと、才人は一人苦笑した。

そして、いざ厨房の前に立つと、タバサが扉のノッカーを叩く。木製のドアが乾いた音を響かせ、軋むような音とともに開かれた。

「はい、どういたしました？」

中から顔を見せたのは、黒髪のメイドだ。恐らく、この学院で働いている使用人なのだろう。日本の学校でいう事務員にあたるのだろうか、それがメイド服というのは流石異世界、と才人は妙な関心をした。歳は才人と同程度だろうか、その髪の色と黒い瞳が、僅か数時間で遠い世界となってしまった日本を思い起こさせる。無論肌の色や顔立ちは日本人離れしているが、その小作りな顔立ちといい、軽くまぶされたそばかすといい、なかなか可愛らしい容貌をしていた。

メイドの少女はタバサたちの姿を確認すると、姿勢を直して慇懃に一礼する。

「これはミス・タバサ、ミス・ツエルプスター、如何いたしました？」

学院の生徒の顔と名前暗記してんのかな？ すげーな
淀みなく主とその友人の名を唱える少女に、舌を巻いた。貴族と
いう立場の生徒たちが通う学校で働く以上、名前を失念するという
無礼があつては我が身にかかわるのだろう。才人はそんな事情にま
で考えが至りはしないが、自分と同一年程度だろう少女の立派に社
会人として働いている姿に、ちよつとした敬意を覚えた。

しかも、結構可愛いし……

「私の使い魔の食事をお願いしたい」

「あたしの使い魔のも、お願いするわね」

益体のないことを考えていると、タバサとキュルケが自分たちを
指し示す。

「お2人の使い魔さんのお食事ですね、畏まりました」

言いながら少女は一礼すると、才人たちへ視線を移す。が、そこ
で彼女は小さく首を傾げた。

「あの、ミス？ こちらの方は？」

その言葉に、才人は苦笑する。

「ああ、その、俺がタバサの使い魔になった、平賀才人です」

「ええ？ だって、貴方、人間では！？」

「いや、まあ、そうなだけどね」

大仰に驚く少女に、才人としては頭を掻くしかない。先程までの
説明でも判つてはいたが、やはり人間が、それも複数召喚された上
での1体として使い魔となる事態は、ひどく珍しいようだ。

「まあまあ、貴方、ちよつと落ち着いて」

そこへ、ナビイがとりなすように間へ入ってくる。

「あ、貴方は？」

「私はナビイ、タバサ様の使い魔2番目よ」

「2番目？」

要領を得ない風な少女に、今度はムジユラの仮面が声を掛けた。

「オレたちの場合、色々特殊なようだな。ちなみにオレがタバサの使い魔の3番目ムジユラの仮面、こっちの赤いのがツエルプストーの使い魔フレイムだ」

自分とフレイムを紹介したムジユラの仮面を見て、それからナビイと才人に視線を移していき、メイドの少女は目を瞬かせた。

「ミス・タバサは、3名も使い魔さんを召喚なされたのですか、それも、言葉を活せる方ばかり……」

言うなり数瞬茫然としていたが、すぐに我に返った様子であたふたと再起動する。

「ご、ごめんなさい！ お時間を取らせてしまいました！ 使い魔さんたちのお食事ですよね！？

皆さん、こちらへどうぞ！」

少女に促されて、才人たち使い魔4名は彼女の後を追い厨房へと入る。

「それじゃあ、あたしたちは食堂で夕食だから」

「後で、寮の前で合流」

「おう、了解」

赤毛と青髪の少女たちに、才人は軽く手を振り返した。

「おう、お前らか！ ミス・タバサとミス・ツエルプストーの使い魔たちってのは……！」

厨房に入ったナビイたち使い魔カルテットを出迎えてくれたのは、顎髭を蓄えた恰幅のいい中年男性だった。男性、この学院の料理長だというマルトーは、ナビイたちにかわるがわる視線を送ってくる。

「いや、俺もここで働いて長えがな、喋れる奴が召喚されるだけでも珍しいってのに、3人も召喚されたのなんて初めて見たぜ！」

立派な体格に似合った豪快な声で言ったのけると、マルトーはサイトの肩に腕を回す。

「特にお前だ！ サイトつつたか？ 変な名前だな！」

「ほつといてくださいよ、俺の国じゃ普通なんですから」

サイトがそう抗議すれば、マルトーはそうかと笑った。次いで、その気風のよさそうな顔に僅かな同情の色が浮かぶ。

「貴族に召喚されちまうんざ、お前も運がなかったな」

「はあ、でも、ゲートとかいう奴をくぐっちまった俺も軽率だったし」

サイトが頭を掻きつつも答えると、マルトーは感心したようだ。

「かーっ、健気だねえ！ 気に入ったぜ、坊主！ なんかあったら、ここに来な！ 俺に出来ることなら、力になってやるぜ！！」

「あ、ありがとうございます！」

その人の好きそうな笑みに、サイトもまた相好を崩して頷いた。彼も比較的人好きがしそうな気性に思えるので、馬が合うのかも知れない。

そんなことを思いながら、ナビイは厨房の中を見回してみる。ナビイたちのいる位置から見て調理場は奥の方にあり、幾人ものコックやメイド、給仕がせわしなく動き回っていた。大きなかまどやオーブンがたくさんあり、見ているだけで熱気が伝わってきそうだ。更にその手前は椅子やテーブルが並んでおり、恐らくここが使用人の食事スペースなのだと推測できる。

「そいじゃ、お前らの飯だな！ 待つてな、今作ってやるぜ！」

やがてサイトの肩を解放すると、マルトーは職人の顔つきになっていた。仕立てのいい調理服の袖をまくり、ナビイとムジュラの仮面を見てくる。

「そつちのお面と光ってるのは、いらねえんだったな？」

「仮面と呼べ。ああ、オレもこの妖精も、食事の必要はない」

ムジユラの仮面がやや憮然として答えれば、マルトーはその表情に驚きの色を混ぜた。

「妖精ってか！？ こりやまたすげえ奴が召喚されたもんだ！ 妖精なんざ、絵本でしか見たことねえぜ！」

それだけ言うと、マルトーは調理場へ戻っていく。その背中を見送りながら、ナビィは彼の言葉を反芻した。

既にタバサとキュルケから聞かされてはいたが、やはり妖精はこの世界では架空の存在でしかないようだ。自分の同胞がこの地にいないという事実は、少し寂しく思えた。

「どした、ナビィ？」

少し気持ちを沈ませていると、いつの間にかテーブルの席にっていたサイトが声を掛けてくる。

「あ、なあに？」

「いや、なんか光り方が微妙にどんよりしてたから、どうしたのになって」

どうやら、感情が輝きに表れていたらしい。怒った時には赤くなり、警戒時には黄色くなる等、妖精の輝きは感情と深く関わっているのだ。

「うっん、ちょっと、同じ妖精がこっちにいないのが、寂しいかなって思ってる」

「そっか……」

短い相槌が打たれ、サイトの眼差しに物憂げな色が混じった。

彼自身も故郷から離れた身であるが、同じ種族、つまり人間が周りにいないわけではない。だから、同種とさえ会えなくなった自分に同情してくれているのだろう。かと思えば、一転してサイトは温かな笑みを浮かべてみせた。

「まあ、大丈夫だろ？ タバサだって、俺たちを帰してくれるって言ってたし、それまでは俺もムジユラの仮面もいるんだ。寂しいことないって」

励ます様な口振りに、ナビイは笑みを 多分人間には判らない
だろうが 浮かべた。楽天的な考えであるとも思ったが、この少
年は基本的に優しい性格のようだ。

「そうね、ありがとうサイト」

素直な例の言葉が、口をついて出る。次いで、新たに仲間となっ
た2名の顔を交互に見た。

「今日からワタシたち、同僚ね！」

「ああ、そうだな！」

「こうして口を聞きながら誰かと手を組むなど、初めてだ」

言いながら、タバサの使い魔たちは笑い合った。

それから、サイトはムジユラの仮面に向き直る。

「そういや、さ。お前呼ぶ時ムジユラでいいか？ ムジユラの仮面
っていちいち言うの長ったらしいからさ」

「好きにしる。オレもお前をヒラガと呼ぶぞ、サイトよりそちらの
方が気に入ったからな」

そして、また彼らは笑みを見せた。人間と魔族が笑い合う様。人
間を脅かすモンスターと戦ってきたナビイには、なんとも奇異な光
景だった。

そう思った時、ナビイの脳裏に微かな疑念が浮かぶ。

ムジユラって、一体どういう魔族なの？

「お待ちどう様です」

「できたぜ、坊主」

ムジユラの仮面たちが談笑していると、先程のメイドの少女とマ
ルトーがサイトの食事 及びフレイムのえさ を持ってきた。
深皿の中に褐色のシチューが、肉や野菜を浮かべながら湛えられて
いる。

「おお、うまそー！！」

それにサイトは喜色満面で応え、少女が皿を置けば早速スプーンで一口すすった。

「いったきまーす！」

言うのが早いのか、スプーンがその口に吸い込まれていた。瞬間、サイトの目が輝く。

「うん、美味しい！！　すごく美味しいよ！！」

歓声を上げるサイトに、少女とマルトーは揃って笑みを見せた。

「おう、そんなに喜んでもらえるたあ、料理人冥利に尽きるねえ！！」

笑いながらマルトーがサイトの背を叩けば、サイトがすすっていたシチューを吐き出しかける。

「それに比べて貴族の連中ときたら、美味しいのが当たり前と思ってやがる、俺たちがどんなに苦労して最高の味を出そうとしてるかなんて、気にもしやがらねえ！！」

腕を組みながら、苛立ちを露わにするマルトー。先程の台詞でも薄々気が付いてはいたが、どうやらこのコックは貴族を嫌っているようだ。それも、相当に。

「確かに、あいつらは大したもんだ。魔法を使って土から鍋だの城だのを作る。とんでもねえ火を吐き出せる。果てはでっけえドラゴンだって操れる。けどな、俺たち平民だって、こんな風に絶妙な味に料理を仕立て上げられるんだ。これだって、魔法みてえなものだ！」

力説するようなマルトーの言葉に、サイトは頷いてみせた。

「確かに。俺、こんな美味しいシチュー初めて食ったよ！」

「おお、判るか！　やっぱお前いい奴だな！　ますます気に入ったぜ！！」

豪快な笑いを浮かべながらサイトの肩に腕を回し、それにサイトは苦笑い気味ながらまんざらでもなさそうな表情で応える。

こいつら、人生楽しそうだな……

本人たちが聞けば恐らく心外だろう感想を抱いていると、ナビイが近寄ってきた。

「なかなか明るい性格みたいね、黒髪と同僚君は」

「ああ人が好いと、扱い易いとも難いともいえるな」

ナビイの言葉にそう答えると、彼女は僅かに輝きに黄味を、警戒色を帯びさせてくる。

「ところで……」

「……なんだ？」

微かに硬くなった少女の声音に合わせ、ムジユラの仮面もまた表情を 仮面なりに 引き締めた。

「ムジユラ、貴方一体何者なの？ ただの魔族ってわけじゃないでしょ？」

問われ、ムジユラの仮面は僅かに思案する。

「何者か、と言われれば、俺にもよく判らない。なにせ、同種と呼べる存在がいらないからな」

言葉の通り、ムジユラの仮面はこれまで自分と同じ様なモンスターに出会ったことがなかった。魔物、魔族はあくまで魔なる生命体を括るための呼称で、種類と呼ぶには大まかすぎる。そのため、ムジユラの仮面自身が自分の具体的な存在を定義できていないのだ。

「ただ、俺は邪気の持ち合わせが少ないんでね。すすんで破壊や殺戮を行うつもりはないさ」

「ええ、貴方からは邪悪な気配がそれほど感じないのは判るわ」

けれど、とナビイは続けた。

「多分、貴方の邪気が抜けたのは、貴方が魔力を失った時と一緒にでしょ？ 貴方の元々の力が尋常でないことも、なんとなく判るよ」

青い妖精の言葉に、ムジユラの仮面は少し感心する。まだ出会って間もないのに、中々の観察眼だ。よほど洞察力が優れているのか。それとも、よほど魔族と相対した経験が多いのか。

多分、両方だろうな

「不躰かもしれないけど、教えて。どうして貴方は邪気と魔力を失ったの？ 何故人間に力を貸す気になったの？」

それを聞かなければ、仲間として心を許すことはできない。言外に、そう言われているのが判った。

別に信頼してもらおう理由はないが、これから行動を共にする相手とわざわざ波風を起こす道理もない。全てとはいかないが、ここは素直に答えることにした。

「邪気と魔力を失った理由は、ある人間の剣士に敗れたためだ」

「剣士に？」

聞き返すナビィに頷く。

「オレは魔力を持った仮面だ。オレは自分を被った者に力を貸し与えてきた。そして被った者は、自分の欲望のままにオレを使った」

過去を振り返りながら、ムジユラの仮面は言葉を続けていく。

「強大な力を持てば、欲望のままにそれを使う。人間とはそんなものだと思っていたが、あの小僧はそんなオレの人間観とは違っていた。オレを倒す程の力を持っていながら、それを昨日今日会ったばかりの者たちを救うために使う、そんな奴だった」

思い起こす。あの緑衣の少年の戦いを。自分がタルミナ中にかけて呪いを打ち破り、そして

本来縁もゆかりもないだろうその地に住まう者たちを救ってきた、あの姿を。

「奴を見て、少し人間という者が判らなくなった。判らないからこそ、興味が湧いてきた」

「だから、人間の使い魔になったってこと？」

「まあな」

短く答えてやると、ナビィが小さく息をついた。

「そう。まあ、今はそこまで聞ければいいわ」

つまり、まだ聞きたいことはある、ということだろう。それはそ

うだ。何故その剣士と戦うことになったのか、他者に力を与えて何をさせてきたのか等は、何も語っていないのだから。

しばらく視線をぶつけ合っていると、不意にナビイはくすりと笑いを零す。

「それにしても、人間はともかく、魔族と仲間になる日が来るなんて、思ってもみなかったな」

オレはつい最近まで妖精と行動を共にしていたがな

妖精の呟きに対してそんな考えが浮かぶが、説明が面倒なので口にはしない。

「考えてみれば、サイトにしてもそうね」

「うん？」

続けられた言葉に訝しむと、少女はまた言葉を続けた。

「リンクの次に仲間になったサイト、リンクとサイト、サイトリンク、洒落が効いているというかなんというか……」

「何言ってるんだ？」

自分でもよく判っていない風に、ナビイは苦笑を返してくる。

一方、ムジユラの仮面は“リンク”という名に、僅かな引っかけりを覚えていた。

リンク……あの剣士の小僧と同じ名前だが……

数瞬訝しむが、やがて疑念を切り捨てる。ナビイの話によれば彼女はそのリンクなる相棒と別れた直後に召喚されたようだし、ムジユラの仮面もあの剣士に倒されたその時に召喚されたはずだ。時間的に、計算が合わない。

そう思い至れば、あの剣士の名前にすら自分は反応してしまうようになっていてという事実気付き、ムジユラの仮面は1人苦笑した。

その当の少年剣士によって、自分のいた世界の時間がさんざんに掻き回されていた事実が、全く考慮に入れられることはなく。

そんな遣り取りをよそに、フレイムは1人　もしくは1頭
幸せそうに少女の運んできた焼肉を厨房の隅で頬張っていたという。

食事の後、タバサは自身の使い魔となった3名と合流し、寮へと向かった。途中、部屋が自分のものより2階下のキュルケと別れ、タバサたちは自室へ戻った。勿論、使い魔であるサイト、ナビィ、ムジユラの仮面にとっては初めて入る部屋である。特に、サイトなどは異性の部屋に入ったことがないのか、必要以上に緊張しているようだった。

「おー、夜見ると更にすげーな、あの月!!」
しかし、それも30分以上前の話。ベッドに腰掛けて、使い魔召喚に関する本を読んでいたタバサは、本から視線をちらと声の方に移す。そこには、窓際に集まったサイトたちが、ハルケギニアの双目を眺めながら感嘆している姿があった。

「こっちの月は、青と赤に光るんだね」
「俺の所だと、白とか黄色とかに光ってたよ」
「ハイラルでもそうね」

サイトとナビィの会話が聞こえてくる。異世界の月の話、僅かに興味をそそられはしたが、月はしょせんただの月、それほど詳しく聞くこともないだろう。

「よう、ムジユラ。どうした？　やけに無口だけど」
窓枠に手を掛けながら、サイトが傍らに浮くムジユラの仮面に問い掛けた。いつの間にか、愛称で互いを呼ぶ仲になっていたらしい。普段ならばどうでもいい話と切り捨てるところだが、自分の使い魔

たちのこと、ましてや色々と前例のない使い魔たちのことだ。些細なことでも、気に留めておいた方がいいだろう。それぞれの特徴をまとめたノートでも作るべきだろうか。

「ああ、あの2つの月がな……」

「へえ、お前も月に見惚れたりするの？」

意外そうにサイトが聞き返せば、ムジユラの仮面はなにか月よりも遠くを見るような眼で応えた。

「あの2つの月、あれを両方大地に落とせば、どれ程の業火を生むだろうな……」

「……何考えてんだよ……」

異形の仮面の返答に、黒髪の少年は呆れたような声を漏らした。呆れたのはタバサも同様だ。月を落とせば、などと、無駄な妄想もいいところである。そんなこと、不可能でしかないというのに。

しかし、誇大妄想はさておくとして、ムジユラの仮面は色々興味深い存在だ。メイジとは異なる、なおかつ強大な魔法を操る仮面弱体化しているらしいとはいえ、先程見た力だけでもその能力の深さは窺いしれた。

そして、それ もとい、彼 を被ることになった少年、ヒラガサイト。彼もまた無視できない。彼の持っていた“の一”とばそんななる道具。あれはこれまで幾多の書物を読んできたタバサにさえ、全く未知の代物だった。そして、彼曰くあれは彼にとっては珍しくないものらしい。あんなものが普通に作られるような技術力、それを持つ土地で育った彼は、おそらく自分にハルケギニアの文献とは違った知識をもたらしてくれるだろう。

そして、彼らの傍で浮遊するナビィ。彼女の特殊能力はかなり有用になると思われる。単純に聴覚を共有するだけでなく、離れた相手と会話を可能とする力。使い魔を3名も従える身としては、ムジユラの仮面、サイトと別行動を取る際も連絡が非常にスムーズになるはずだ。

なによりも、彼らの一人一人が、それぞれハルケギニアと全く異なる世界から来たのだという。

違う世界　正直にいつて、そんなものおとぎ話でしかあり得ないと思っていた。しかし、彼らは確かにハルケギニアの存在とは違うように思える。少なくとも、ハルケギニアとは全く常識を異にする場所があることは確かだろう。

そして、彼らをそこから連れだしてしまったのは、タバサだ。タバサが、彼らをそれまでいた世界から、彼らが常識としていた日常から、無理やり遠ざけてしまった。3名の内1名は別段気にした風ではないにせよ、決して故意があったわけではないにせよ、自分が彼らの生活を一変させてしまったという事実は、タバサの心に重くのしかかっていた。他者の運命を自分の都合で捻じ曲げる　それは彼女が最も憎むべき男がしたこと、同じことであるように感じられたからだ。だからこそ、自分には彼らに対する責任を負わなければならぬ。そのため、今もサモン・サーヴァントに関する文献を改めて　今日まで既にあらかた読んだ　読み直している。

「なあ、タバサ」

それから2冊ほど本を読んだところで、サイトが声を掛けてきた。

「なに？」

「いや、タバサさっきから本読んでるけど……」

そこまで言うと、サイトは何故か困ったような表情を浮かべた。どうしたのだろうか、彼らを放っておいて読書をしていたことが気に入らなかつたのだろうか。

「俺たちにも、字を教えてくださいませんか？」

「違ったようだ。」

「字を？」

「ああ。タバサは俺達を帰す方法を探してくれてるって言うってたけど、やっぱり俺達も自分で探した方がいいだろ？　なら、本とかで調べられるように字が読めないとき」

そういうサイトの顔は、微妙に赤みを帯びている気がした。どうやら、先程の表情は年下の女子に物を教わろうとするのが気恥ずかしかつたためらしい。

タバサはベッドから立ち上がると、周囲の本棚から簡単な本を何冊も見繕う。そして、それらを机の上に乗せると、杖を振るって予備の椅子を机のそばにつけた。

「こつち」

サイトは一瞬きよんとするが、すぐにここに座れと言われたことに気付いたらしい。相手を崩し、タバサの用意した椅子に座った。それに、彼の同僚2名も続く。そして、タバサと使い魔たちの識字講習が始まった。

「言葉は判るから、字はどうだろうと思ってたけど」

授業開始早々、サイトがそんな呟きを漏らす。

「やっぱり、全然読めないな」

落胆したように、黒髪の少年は肩を落とした。ここで読めたらこの講習の意味がなくなるのだが、それを聞いてタバサも妙に思う。

「そもそも、何故貴方たちと私たちの言葉が通じるのかも不明」

彼らの内、少なくともサイトは名前の雰囲気からして自分たちとは異なる言語体系の持ち主と推測できた。ナビィとムジュラの仮面は、名前からはあまり違和感がないが、それでも違う土地から来た以上言葉に差異はあるはずだ。それなのに、彼らとの会話は互いに未知の単語が時折現れる意外は普通に行えている。

「何故貴方たちとは言語の違いを感じないのか、判らない」

「Hey!」

タバサとサイトが首を傾げていると、ナビィの元気のいい声が耳に届く。

「Listen! どうしてかは判りませんが、もしかしてワタシたちにこの世界の言語を翻訳する力が働いているんじゃないでしょうか?」

「翻訳する力?」

サイトが聞き返せば、ナビイは体ごと頷く。

「きっとワタシたちが自分たちの言葉で喋ると、なにかの働きで喋ったことが自動的にこの世界の言葉に翻訳されるのよ。逆に、ワタシたちが聞くこの世界の言葉は、ワタシたちの言葉で聞こえるようになるの。だから、ワタシとサイトとムジュラがそれぞれ喋った言葉も一度この世界の言葉になるから、タバサ様たちにも通じるし、ワタシたちにも聞く時の翻訳機能で通じる様になるんだわ」

そう締め括ったナビイの推論は、筋の通ったものだった。確かにそう考えれば、それぞれ異世界の住人であるサイトたちが自分たち、そして彼ら自身の間で言語を共有できる理由に説明が付く。

しかし、疑問が残らないではない。

「でもさ、なんでそんな都合のいいもんが働いたりするんだ?」

その疑問は、サイトによって指摘される。一体何故そんな翻訳機能が生じたりするのか、それが判らなかつた。そこで、ムジュラの仮面がどうでもよさそうな調子で考察を口にする。

「異世界へとが繋がることは、前例がないんだろ? だったら、召喚魔法の副作用としてそんなことが起こることもあるんじゃないか?」

「なんか投げ遣りだな、おい」

サイトが少し咎めるような声を出す。確かにムジュラの仮面の声はいかにもいい加減なものだったが、まあ考え方としては妥当であるとタバサには思えた。

そこで、タバサは話が脱線しすぎていることに気付く。

「続ける」

「あ、はいはい」

本を指差しながら声を掛けると、サイトが真面目な顔をつくってそちらに向き直り、ナビィとムジユラの仮面もそれに倣う。そして、タバサはサイトたちに字の読み方から教え始めた。

それからしばらくして、ナビィの言う翻訳機能はどうやら文字にも有効であったことが判明する。サイトたちはタバサが本の単語を読む度にその単語を習得し、それを数回繰り返しただけで基本的な文章は読めるようになっていた。更に、どうやらこの機能は翻訳用であると同時に要約用でもあるらしい。サイトたちの音読を聞いていれば、皆原文とは微妙に違う、しかし間違ったものでなく、より意味の通り易い簡潔な文章に置き換えて読んでいた。例えば、「ミルクを零してしまった」という慣用表現を、「大変なことをしてしまった」という本来の意味で読むといった具合で、言い回しの類を簡略化するのだ。

そうやって1対3の講習を続けていくと、いつの間にかもう大分夜も更けていた。

「そろそろ、寝る時間」

「あ、そうだな。結構経ったし」

サイトの声を背に、タバサはクローゼットへ近づき、おもむろにマントを脱いで、上着のボタンを外しにかかる。

「ちよっ、なにやってんだよ!？」

それを見ていたサイトが、背後でやたら慌てた声を上げた。

「寝間着に着替える」

振り返って答えながらも、ボタンを外す手は休めない。

「い、いや、なにも男がいる前で着替えることないだろ!？」

「これから一緒に暮らしていく」

焦っているのか少し調子のずれた声のサイトに、タバサは冷静に答えた。実際、サイトとはこれからこの部屋で共同生活していくのだ。別に全裸になるわけでもなし、下着姿を見られる程度で、動じ

ることはない。それに、他人に肌を見られる程度で羞恥を感じるには、自分は侮辱を受けすぎている。

「だから問題ない」

言いながらシャツを脱げば、サイトの顔が真っ赤に染まった。

「お、俺が問題あるんだよっ!!」

叫ぶや否や、サイトは脱兎の勢いで部屋から出ていった。半瞬遅れて、ドアが音を立てて閉じられる。

「……………」

そうして、取り残されたタバサは、先程のサイトの表情を思い出す。はけで塗ったような、見事な赤面。自分でも未成熟だと思つたタバサのこの体を見て、あそこまで照れることはないだろう。内心ではそう思うものの、あそこまで素直に焦られると、こちらもなんだか恥ずかしくなってくる。

「……………」

結果として、タバサは頬を軽く染め、今更ながらシュミーズで包まれた体を抱くのだった。

「はぁ……………」

タバサの部屋の前で、才人は大きく溜息をついた。

「まったく、自分が女の子だって自覚あんのかよ」

男の前でためらいもなく着換え出すタバサに、呆れと戸惑いが入り混じった感情で毒づいてみる。幾ら幼い外見だからとて、15歳という年頃の少女の態度ではないだろうに。

「と、いうよりも、お前が男扱いされてないんじゃないのか?」

一人頭を悩ませているところへ、横手から意地の悪い声が掛かる。

「なんだ、いたのかムジユラ」

「悪いか?」

「いや、悪くないけど」

部屋を出る時にくつついてきたのだろう、いつの間にか傍らに浮いていたムジユラの仮面に、才人は軽く頭を掻く。ナビィの姿は見えなかったので、彼女は部屋に残ったようだ。

「それより、俺が男として見られてないって、どっいう意味だよ」
少し厳し目の声で、ムジユラの仮面に問い質す。生きているとはいえ、仮面に男のアイデンティティーを否定されては黙ってられない。

一方で、ムジユラの仮面はどこか見下すような光を眼に湛えていた。

「お前、色々と経験ないだろう？」

「ぐはっ!？」

いきなり凶星を突かれ、彼女いない歴17年の才人はひざから崩れ落ちかける。

「なんでお前がそんなこと知ってたんだよ……」

「見れば判る」

硬い声で尋ねれば、あっさりとは無情な答えが返ってきた。

「その歳でろくに知らないガキじゃ、男と見られんでも仕方はないだろ？」

「ぐうっ……」

ムジユラの仮面の言い分に、才人としては唖るしかない。しかし、そこでふと気付く。

「って、ちよつと待てよ。そんなこと言うけど、それじゃあタバサは？ タバサはどうなんだよ」

あの2つも年下の幼げな少女に先を越されているとすれば、なんとも切ない。しかし、ムジユラの仮面は答えずにいる。

「おいっば！」

「さあて、自分で聞いてみたらどうだ？」

再度の質問には、そんな返事を送られるにいたった。無論、常識

的に考えれば今日会ったばかりの少女に面と向かってそんな質問をするわけにはいかない。というよりも、そんなことを気にしている時点で、なにやら罪悪感がふつつと湧きだしてきた。そんな才人に対してムジユラの仮面が向ける眼はというと、実に意地の悪さがよく判る輝き方をしている。

「薄々気付いてたけどよ、ムジユラ、お前性格悪いだろ」

「今頃気づいたのか？ ナビィと比べて随分鈍いな」

罵倒の声に余裕で応えるムジユラの仮面に、才人はまたも溜息をついた。これからこの性悪な仮面と同僚をやっていくのかと思うと、やや頭痛を覚える。

そんな遣り取りを続けていると、やがてタバサの着替えが終わったとナビィの声が告げてきた。それに従い、才人たちは部屋に戻る。そこには、果たしてナビィと、レースの付いた薄いグリーン色のネグリジェを着たタバサがいた。

「今日はもう寝る」

「ああ、でも」

タバサの言葉に答えながら、才人は改めて室内を見回す。部屋のサイズは、日本でいう八畳間程はあるだろうか、入口から見て右側の壁は一面が才人の背よりも頭3つ分は高い本棚で覆われ、その全てが本に埋め尽くされていた。入口からすぐ左には大きめの白いクローゼットと、各種雑貨の乗ったアンティークな棚が設置されており、入口の正面には先程才人たちが月を見ていた高さ2メートル、幅1.5メートルほどもある大きなアーチ状の窓がある。その右隣りにあるのは、字を教えてもらった机だ。

そして、窓の左隣には簡素な造りながら見るからに柔らかそうな、それでいて人が3人は余裕で寝られそうな程大型のベッドがあった。けれど、言い換えればそれだけしかない。

「俺、何処で寝ればいいかな？」

戸惑い気味に、才人はタバサに尋ねた。ベッドはその大型のもの一つだけで、他に寝具は見当たらない。疑問に思っていると、タバサは無造作に手にした杖でベッドを指した。部屋に一つしかないベッドを。

「ここ」

「えーと……」

何やら嫌な予感がしてきた才人は、少し表情を引きつらせて質問を重ねた。

「じゃあ、タバサは何処で寝るの？」

「ここ」

やはり唯一のベッドを指し示される。予感的中。つまり、タバサは才人と一緒に寝るつもりでいるらしい。

「あー、タバサさん？」

「なに？」

首を傾げるタバサに、才人は1つ咳払いして言葉を続ける。

「俺、男。で、タバサは女の子。OK？」

「知ってる」

そう言うタバサの顔は、無表情ながら何を言っているのかと言わんばかりの色が見てとれた。

「普通、男と女は、簡単に一緒に寝ようとしたりしちゃダメなの。」

「OK？」

「ベッドは1つしかない」

一般論からたしなめようとする才人に対し、タバサは事実を淡々と告げてきた。

「貴方は私のせいで故郷から切り離されてしまった。そんな相手にベッドを使わせないような真似はできない。私も、自分の部屋ではなるべくベッドで寝たい」

「いや、それは……」

そういう風に言われては、才人も返す言葉がうまく見つからなかった。それに、確かにタバサとベッドを共にしなければ、自分かタ

バサのどちらかが床で寝るしかなくなる。才人としてもどちらかといえバッドで寝たいし、だからといって女の子を床で寝かせるわけにもいかない。それは理解できるが、やはり知り合ったばかりの少女との同衾には少なからず抵抗がある。

どうしたものかと頭を悩ませていると、不意にタバサの瞳に目が行った。そこには深い碧さがあつた。海のように底の知れない、強い意志を秘めた翠眼。それに気圧され、才人は抗議の意思が薄れていくのを感じ始める。

「まあ、別にいいだろうよ。2人で寝るにも十分すぎるサイズに見えるぞ」

眠た気な声に振り返ってみればムジユラの仮面が眼の光を鈍くしてたたずんでいた。

「オレは先に寝させてもらう。主、壁を借りるぞ」
「壁？」

才人、タバサ、ナビィが揃って疑問の声を上げる間にも、ムジユラの仮面は言った通りベッド側の壁まで寄ると体を反転させた。そして、裏側を壁にぴたりとつけると、その目から光を完全に消して見せる。どうやら、眠ったらしい。

それにしても、と才人は思う。

「この部屋にこいつが掛けられてるってのも、相当似合わないな……」

いかにも何処かの部族の仮面といった風情のムジユラの仮面が、この本ばかりではあるが優美な内装の部屋に飾られているという有様は、酷くアンバランスに思えた。

「でも、それを言ったらサイトの空色の服にムジユラ被るのだから、まるで合っていないよ」

「……確かに」

言いながら、才人は自分のナイロンパーカーを軽くつまむ。この

服装でムジユラの仮面を被るのは、確かに似合わすぎるだろう。

でも、こいつに似合う服ってどんなだよ

ムジユラの仮面とマツチしそうな服と、それを着た自分を想像し、才人は一人呻いた。そこへ、タバサが才人のパーカーの裾を軽く引っ張ってくる。

「寝る」

「あ、うん」

なんだか、もはや口答えする気もなくし、才人はとりあえず上着だけ脱ぎ、白のハーフスリーブシャツ姿で、タバサとともにベッドに入る。

ま、ただ寝るだけだし、別にいいか

持ち前の楽天ぶりを発揮し、才人はそっと目を閉じた。

しかし、30分もしない内に、その見通しが甘かったことを思い知る。

才人は、1つ小さな呻きを漏らしてその誤算の正体を見据えた。薄闇を通し、ベッドの向かい側に1つの影を見つけることができる。勿論、タバサだ。ほぼ同時に布団を被ったタバサは、既に夢の中の住人だった。自分たち3名に文字を教えて疲れたのだろうか、すっかり熟睡している。

ちなみに、妖精であるナビィは睡眠の必要はないとのこと、机の辺りを漂っていた。ムジユラの仮面は、変わらず壁に張り付いていて現在部屋のインテリア中。

それはともかく、問題なのはタバサが才人の方を向いて寝ていることだった。より詳しく言えば、タバサの寝顔が、大問題なのだ。

なんつーか、綺麗過ぎだろ……

心の中で、賞賛のような悪態をつく。彼女の顔立ちが平均以上であることは気付いていたが、眼鏡を取り、夜の帳が下り、瞼の閉じられた状態というのは、昼間起きている時に見るのとはまた違った

印象を受ける。

光の下よりも深みを増した髪。長いまつ毛に縁どられ、柔らかかに閉じられた瞳。暗がりの中から覗けるそのあどけなくも整った寝姿は、一種神秘的な美しさを感じさせた。そんな姿を見ていると、不覚にも胸の鼓動が逸り始めるのを感じてしまう。

そういや俺、さっきタバサとキスしたんだよな……

不意にそのことが思い出された。刹那、心音がまた少し高くなる。その高鳴りは才人の意思に反して緩やかに上がっていくようで、それにつれてますますタバサの寝顔から目が離せなくなっていく。

いやいや、だから待って待っての！俺はロリコンじゃない！
いつかやらかしちゃう類のヒトじゃない！

思わず才人は頭を振るが、そこでタバサが15歳であることを思い出す。

セーフか？……いや、アウトだな

さり気なく失礼な判定を1人脳内で行い、才人はタバサから顔を背けようとした。

「……まって……」

そこへ、震えの混じる声が、才人の耳に届く。思わず声の方を向いてみれば、才人はそこで目を見開いた。

「まって……」

そこに、閉じられた瞳の隙間から涙の粒を落とす、タバサの姿があったのだから。

「た、タバサ!？」

驚きに任せて身を起こすも、次に聞こえてきた言葉に眉をひそめる。

「とうさま……かあさま……」

涙に濡れたような声で、父と母を呼ぶタバサ。混乱するサイトをよそに、それは続けられる。

「とうさま、かあさま……まって……だめ……」

涙が零れていた。言葉が零れていた。涙が一滴零れる度に言葉が一言零れていき、言葉が一言零れる度に涙が一滴零れていく。

「とうさま…… ippetteはだめ…… かあさま…… のんではだめ……」
哀しみの粒がシーツを濡らす。嘆きの音が耳を突き刺す。苦悶に満ちた嗚咽が部屋を満たしていく中で、胸が締め付けられるような痛みを訴えた。

「とうさま…… かあさま…… だめ…… わたしをひとりにしないで……」

そして、それ以上の悲哀の激痛に苦しむ少女の姿がある。才人は、そつとその許へと身を寄せていった。

「とうさま…… かあさま……」

未だに悲哀の嵐は治まる兆しはなく、その最中さなかでタバサは1人震えながら、孤独な悲鳴を上げ続けている。

「おいていかないで…… ひとりにしないで……」

そんな彼女の体を、才人はそつと抱きしめた。首に手を回し、不慣れな手つきで小さな頭を撫でる。

「大丈夫、大丈夫だ……」

タバサの耳元に、静かな、そして言い聞かせるような声で呟いた。すると、タバサの体から、僅かに震えが消えていく。

「大丈夫だから……」

その言葉に、なにか意味や根拠があるわけではない。そもそも、才人にはタバサの寝言の意味も、泣いている理由も判らない。けれど、タバサは今苦しんでいる。それだけは確かだ。だから、何とかしたいと思った。たとえそれがこんな拙い慰めしかできないのだとしても、放っておくことはできなかった。彼女は、こんな哀しい声をすべき娘むすめじゃない。もつと幸せな笑みを浮かべるべき娘だ。何の根拠もないそんな確信が、才人の中で生まれていた。

そうやって不器用な慰めを続けていると、やがて腕の中から安らかな寝息が聞こえてくる。

「落ち着いたか……」

誰に言うでもなく言葉を漏らす、タバサを撫でる手を止めようとはしない。このままこうしておいた方が、タバサも安心するかもしれないから。

そこで、才人は改めてタバサを見つめ直す。身長は140センチほどしかなく、体つきは華奢と表現するよりないほど細い。この頼りない体の中に、彼女はどれほどの悲哀を抱えているのだろうか。謎めいた少女とは思ってはいた。しかし、そんな言葉では追いつかない自分などには想像もできない程に大きな事情が彼女にはあるのかもしれない。それを感じた時、才人の中でタバサを護るという思いが、朧気ながら輝き始めていった。

数分後自分の状態を冷静に考えた才人が自分のロリコン審問を再開するのは、また別の話。

その頃、トリステイン魔法学院の上空に1頭の竜が浮かんでいた。シルフィードよりも大型で、白い鱗を持つ風竜。ジュリオ・チエザーレは、その上にまたがっていた。白を基調とした神官服と濃紺のマントで身を包んだ彼は、夜の上空の寒気に小さく身を震わせた。余りの寒さにその顔は歪むが、それでもなおそこには美貌とよぶべきものを感じさせる。白金色の眩い髪に、女性と見紛うような細面の上でバランス良く、そして最高級の造形で各部位が配置された顔立ち。

なによりも目を引くのは、彼の瞳だ。左目はルイズのそれと同じ鶯色だが、右目はタバサのような碧い瞳。異なる色に光る月に例え、月目と呼ばれる目。ハルケギニアでは不吉とされるその相貌は、彼の美しすぎる美貌の中で危うさのアクセントのように輝いていた。

「なんなんだろうね」

魔法学院を見下ろしながら、ジュリオは独りごつ。

「トリステインの“担い手”の様子を見に来てみれば、いやはやとんだびつくり箱だ」

言葉面こそ飄々としているが、その声音に硬さは否めない。

「風韻竜に“盾”のルーンが刻まれたのは、まあいいとしても、青の姫君が召喚した連中、あいつらは一体なんなんだ？」

疑念の滲んだ声を上げながら、ジュリオは魔法学院の寮棟の辺りを見据えた。

「あの黒髪君の方は、たぶん“工芸品”の世界から来たんだろうけど、後の2人は判らないな。というか、妖精に魔族？ まるでおとぎ話じゃないか」

呆れの感情を混ぜながらも、ジュリオの疑念は終わらない。

「大体、彼らに刻まれたルーン、あんな形で刻まれるものなのか？ それ以前に、なんで彼女の使い魔にあのルーンが？ いや、そもそもなんで3体も召喚されたんだ？」

そこまで言うと、ジュリオは乱暴に頭を掻きむしる。

「ああ、くそっ、わけ判んねえよ！！」

品のいい顔立ちに似合わぬ粗野な言葉遣いで吐き捨てると、ジュリオは1つ息をついた。

「とにかく、このことは聖下に報告すべきだな。行こう、アズーロ」

声を掛けながら相棒の脇腹を踵で軽く叩き、ジュリオはその空域から去っていく。

こうして、才人、ナビィ、ムジュラの仮面の、異世界での最初の一日は終わっていった。

未成熟ながら、他者を護るために力を尽くせる少年、平賀才人。
勇者とともに巨悪と戦い、伝説の一翼を担った少女、ナビィ。
本来ならば、月さえも動かし得る力を持つ者、ムジユラの仮面。
この3者との出会いが、雪風のタバサにどのような運命をもたらすのか、この世界をどう動かしていくのか。
その答えを持つ者は、まだ誰もいない。

〈続く〉

く第5話 最初の夜i n トリステインく (後書き)

2 0 1 1 / 0 7 / 0 4 一部修正

2 0 1 1 / 0 8 / 0 8 改行修正

2 0 1 1 / 0 8 / 1 6 改行修正

〈第6話 最初の朝withメイド〉

「結局、一睡もできなかった……」

朝まで己がロリコン疑惑を検証していた才人は、窓から差し込む朝日を恨めしく見つめた。その眩さが、寝不足の目を嫌みに突き刺してくる。

「そんなに眠りにくいんだったら、いつそベッドから出ればよかったのに」

顔の傍に浮かびながら、ナビイが呆れた声を掛けてきた。それに対し、才人は顔をしかめて応える。ナビイの言っていることはもっともだし、才人自身もそうしようかとは何度か思った。

けれど、才人はそれを選べなかった。

「そんなわけにもいくかよ……」

言いながら、才人は腕の中に抱く存在に目を向ける。青い髪をした小さな頭が、小さな寝息を立てていた。そのタバサの静かな寝顔を見ていると、睡魔に咬まれて痛む頭が少し楽になった気がする。

「こんなちっこい女の子が泣いてて、ほっとけないだろ……」

昨夜のタバサを思い出す。夢の中で両親を呼びながら、涙を流し続ける姿。とてもか弱く、今にも壊れてしまいそうな慟哭。女の子のあんな姿を見て、無視できるはずはなかった。

「そうだね……」

ナビイもその気持ちを察してくれたのか、優しい気な輝きを湛えて2人を見下ろしてくる。

「でも、そろそろ離してもいいんじゃない？」

「え？」

言われて、もう泣いていない彼女を朝になってまで抱き続けていることはない気がついた。慌てて、才人はタバサを離して距離を取る。

途端、どつと眠気が襲いかかってきた。たまらない倦怠感が、脳内を搔きまわす。

「うっ、眠い……」

「そりゃそうだよ、一晩中起きてたんでしょ？」

「だって、会ったばかりの女の子と同じベッドで寝て眠れないって」

欠伸交じりに答えてみせる。今までは、腕の中のタバサが気がかりで大して気にならなかったのだが、いざ離してみると自分がいかに寝不足であるかを自覚してしまった。

「せめて、同じ部屋で何日か寝泊りしてからなら眠れると思うんだけど」

「それはそれでどうなんだろ……」

やや呆れた風のナビィに苦笑を返していると、タバサが小さく身じろぎをする。

「んう……」

「お、起きたかご主人様」

「おはようございます、タバサ様」

上体をゆっくり起こしたタバサに2名が挨拶すると、彼らの主はじつと才人の方を見てきた。

「な、なに？」

無表情に見つめられて、思わず声が上がす。

もしかして、一晩中抱いてたのばれてるかな？

やましい気持ちはなくともやましいことはしただけに、背筋が嫌な汗でぬれていった。そして、無言の圧力を受け続けること約10秒、やがてタバサが口を開く。

「眼鏡」

「へ？」

言われた意味が判らず、呆けた声が口から出た。

「取って」

「あ、はいはい」

続いた言葉に、ようやく理解する。ベッド脇のテーブルから眼鏡を取り、タバサに手渡した。やはりやましいところがあるだけに、動作は少し慌て気味で。

「ありがとう。それから、おはよう」

「はは、どういたしまして」

やや引きつた笑みで返事を返しながら、ひとまず安堵の息をつく。どうやら、昨夜のことはばれていないらしい。

そんな才人に怪訝としたのかしていかないのか、タバサは無表情のまま受け取った眼鏡を掛けた。次いで、彼女は部屋の壁の1点を見やる。

「ムジユラの仮面は？」

「ああ、まだ寝てるみたいだな」

言われて、壁に張り付いたままのムジユラの仮面を見た。瞳の光を消したその姿は、まるでただの仮面にしか見えない。

「こうしていると、とても動いたり魔法使ったり使わせたりするようなしるもんには見えないな」

近くの椅子に掛けておいたパーカーを着ながら呟けば、タバサがそれに頷く。

「生きてるか死んでるかも判らない」

「大きなお世話だ」

タバサの言葉に反応し、苛立ち混じりの声と抜けるような音とともに、仮面の眼に光が戻った。続いて、やたらと身体を震わせながら壁から離れていく。

「ヒトがまどろんでるからって、勝手なことを言ってくるな」

「客観的考察」

悪びれずに言うタバサに、ムジユラの仮面はつまらなそうに鼻

何処にあるのだろうか　を鳴らした。

そんな遣り取りを見ながら、才人はまたも大きく欠伸する。

「昨日眠れなかった？」

それに気付いたタバサに問われれば、つい眼を泳がせてしまった。

「ああ、まあね」

まさか夜通し彼女が泣かないようにしていたせいとも言えず、言葉に迷う。

「そんなに眠いなら、顔を洗ってきたら？ 井戸水は冷たいから、よく目が覚めるよ」

そこで、助け舟というわけではないだろうが、ナビイがそんな提案をした。彼女の言う通り、眠気覚ましには冷たい洗顔が一番だ。

「そうすつか。タバサ、水場って何処かな？」

首だけタバサに向けて尋ねると、何故か彼女は籠を才人に差し出してくる。その中には、これまた何故かシャツやら下着やらが入っていた。

「ついで」

「は？」

またも言葉の意味するところが判らず、首を傾げる。昨日から思っではいたが、どうもこの少女は喋る時の単語が少なすぎるくらいがあるらしい。

「洗濯」

「あ、そういうこと」

「それぐらい、洗濯物出された時点で気付けよ」

タバサの捕捉に納得すると、ムジュラの仮面に茶々を入れられてしまった。言われてみると、タバサの言葉足らずは否めないが、自分の察しの悪さもまた確かだ。無口な少女に、洞察力不足な自分、実に先行きが思いやられる主従である。

しかし、それでも何とかなるかと考えを切り替えるのが才人という男だ。気を取り直して、タバサから洗濯物を受け取る。

「メイドに渡してくれればいい」

「ん、了解」

「私の洗顔用の水も汲んできて」

「はいはい」

口数の割に意外と注文の多いタバサに、苦笑いが浮かぶ。

「では、被れヒラガ。飛んでいけばすぐだろう」

言いながらムジユラの仮面が裏側を向けて近づいてくるが、才人は首を横に振る。

「いや、眠気覚ましに、歩いて行くよ」

「そうか？ まあ、とりあえずついていくかな」

「ワタシも行くわ。学院の構造を少しでも把握しておきたいし」

そして、才人はタバサに水場の場所を確認し、ムジユラの仮面とナビィを伴って水場へ向かうのだった。

魔法学院のメイドの1人、シエスタは洗濯籠を抱えて水場へ向かっていた。トリステインでは珍しい黒髪に黒い瞳の彼女は、いつも朝早くから仕事を始めなければならない。

なにせ、彼女の奉公すべき学院の生徒たちは貴族、それも精神的に未熟なその子弟たち。貴族は往々にして傲慢であり、平民のことを顧みない者が大半である。大人の貴族でさえそうなのだから、その子どもとなれば平民への態度は推して知るべきだ。たかが洗濯といえど、遅れたりすればどんな目にあうか知れたものではない。

「よいしょつと」

井戸の傍まで来ると籠をおろし、その付近に備え付けられている洗濯桶と洗濯板を用意する。

「さて、始めますか！」

準備が整うと、袖をまくって洗濯を始めようとした。

「でも、ムジユラで飛んで風を感じるのも、眠気覚ましになったん

じゃない？」

そこへ、少女の声が耳に入ってくる。

「まあ、横着はよくないしさ」

「へえ、真面目なんだ」

そちらを見てみれば、籠を持った黒髪の少年と羽の生えた光、怪しげな仮面がこちらに近づいていた。確か、学院生徒のタバサに召喚された3名だ。

「いや、面倒になってきたらムジユラの世話になるかもだけどさ」
「いい加減だな」

仮面　確かムジユラの仮面と名乗っていたはずだ　が茶化す様に言えば、少年　サイトという名前だったと思う　は笑いながら「まあね」と返している。ただでさえ奇妙な組み合わせの3名が仲良さ気に談笑している姿は、益々奇妙であった。

「あれ？　君、昨日の娘こだよな」

やがて彼らは井戸まで来て、サイトが声を掛けてくる。

「あ、はい。おはようございます、皆様」

立ち上がって礼をすると、光の少女　ナビィと昨日聞いた
が笑い掛けてくる。

「そんなに硬くならないで」

穏やかな輝きを放ちながら彼女は言うものの、シエスタはやはり
恐縮してしまう。

「いえ、でも皆様、貴族様の使い魔さんたちですし」

貴族にとつて使い魔はパートナーであり、使い魔とメイジは感覚を共有している。魔法学院のメイドであるシエスタは、それを知っていた。使い魔を　貴族の感覚から見て　粗末にしたことで腹を立てられ、職を追われた同僚もいないではないのだ。彼女らの主であるタバサは特に高慢そうな様子はないが、それでも礼は尽くすべきだとシエスタは考えていた。

「そんなの気にすることないって」

しかし、その当の本人たちの1人にそれは笑い飛ばされる。

「いえ、そういうわけには」

「いいからいいから」

やはり遠慮の声を送ろうとするが、あっさりとサイトはそれを遮ってしまった。

「俺たちだつてここの生徒の1人に仕えることになつたわけだし、立場的には君と似たようなもんだよ」

「そうそう、従う相手が直属か全体かの違いだけだよ」

サイトの言葉にナビィも続き、2名は　ナビィは多分だが

笑みを見せる。その屈託のない雰囲気に、やっとシエスタも自然に笑えた。

「オレとしては、かしくかれていいんだがな」

「黙れ、性悪」

独りごつムジユラの仮面に、サイトが切れ味のいい眼と言葉を向けるが、向けられた方は眼ににやついた様な光を浮かべるだけだ。仲がいいのか、悪いのか、よく判らない2名である。

「そういえば、君の名前なんていうの？」

そこで、思い出したようにサイトが訊いてくる。そこで、彼らからはされたにもかかわらず、自分の紹介をしていなかったことに気がついた。

「あ、はい。私、シエスタっていいます」

「シエスタか。じゃ、改めまして、俺は平賀才人、才人って呼んでくれ」

「ワタシはナビィ、よろしくね」

「ムジユラの仮面だ、ムジユラでいい」

互いの紹介を済ませると、シエスタはサイトの持つ籠に眼がいく。

「サイトさん、それ、ミス・タバサの洗濯物ですか？」

「ん？ ああ、そうだけど」

「では、そちらもお預かりしますね」

言いながら、サイトから籠を受け取り、自分の持ってきたものの隣に並べた。

「ありがとう、けど、それ全部君が洗濯すんの？」

「はい、そうですよ」

シエスタが答えると、サイトは少し眉をひそめて洗濯物の山を見ていた。

「大変じゃない？」

洗濯籠を指差しながら、心配そうな声を掛けてくれた。なにせ、数十人分の洗濯物が集まっているのである。基本的に貴族は服を汚すことが少ないとはいえ、人数があるのでその量は莫迦にならない。

そんな彼の心配を少し嬉しく思いながらも、シエスタは笑って答える。

「大丈夫ですよ、これくらい」

強がりではなかった。確かに勤め始めの頃はその膨大な量に閉口したものだが、今ではすっかり慣れて、手早く綺麗に終わらせるコツもつかんでいる。なので、特に問題に思わずシエスタは洗濯を始めようとした。

「あ、ちょっとタンマ！」

なのだが、何故かサイトに制止を受ける。

「お近づきの印、っていうには変だけど、ちょっと手伝うよ」

「え、そんな、いいですよ」

サイトの言葉に、もちろんシエスタは遠慮した。幾ら気さくな雰囲気だとはいえ、貴族の使い魔たる彼に自分の仕事をさせることはできない。しかし、例によって黒髪の使い魔はそれを一笑に付する。

「だから気にすんなってば。俺も力使うの慣れておきたいし。なあ、ムジュラ？」

「そうだな。せいぜい慣れてくれよ」

話を振られたムジユラの仮面が、サイトに裏側を向ける。それをサイトがためらいなく被ると、右腕を洗濯物の山へと向けた。何をしているのかと首を傾げるシエスタをよそに、サイトは何事か呟く。

「ただイメージすりやいいんだよな？ それっ」

掛け声が早いか、急に籠の中の衣類が浮きあがった。それにシエスタが驚くより早く、今度は桶に張っていた水が球状になって宙に浮く。次いで、井戸から水が縄のように伸びてきて、その水の球に給水していき、直径5メートル程の大きさにまで膨らませた。

それから、浮き上がっていた衣類が次々に水の球へと放りこまれていき、最後に洗剤を飲み込むと、水がすごい勢いで回転を始める。その回転で洗剤が大量の泡を立て、中の衣類が見る見る泡に覆われていった。

水の球の回転は、時に反転を加えながらも数分続き、やがて洗剤混じりの水が球の形を失って捨てられる。宙に残った泡だらけの洗濯物は、また井戸から伸びてくる水の綱に作られた新しい水の球に呑まれてゆすがれていった。そして、それが終わってまた水が捨てられたかと思えば、今度は温かな旋風が衣類の周りで舞い踊り、洗濯物の水気がどんどん落とされていく。しばしの後、温風が収まると、衣類が籠の中に戻されていった。

シエスタは、半ば呆然としながらその中身を手に取る。

「乾いてる……それに汚れも完璧に落ちてる……」

自失気味でそれを確認したところで、ようやくシエスタは我に返った。

「すごいです！ サイトさんはメイジ様だったんですか！？」

興奮しながら、シエスタはサイトに詰め寄る。目の前の、どう見ても平民にしか見えない少年が魔法を使って見せたのだ。これは驚くなくという方が無理だった。

その当の本人は、ムジユラの仮面を外して苦笑の表情を見せる。

「俺が魔法使えるわけじゃないよ、俺はこいつの力借りてるだけ」
言いながら、サイトが手にしたムジユラの仮面を指差す。指されたムジユラの仮面は、何処か妖しい声音で言葉を発した。

「なんなら、被ってみるか？ オレの力を貸してやるぞ」

そう言うと、ムジユラの仮面はサイトの手を離れ、シエスタへと自身の裏側を向けてくる。その背面を、シエスタは見つめてみた。

暗い。ただの仮面の裏側、そうであるにもかかわらず、そこは異常に暗かった。まるで果てがないような、底なしの淵のような、そんな感覚を覚える暗がり。暗黒と呼んで差し支えないそれを見てみると、何故だか冷たい汗が浮かんでくる。

「いえ、遠慮します」

なので、シエスタは断りの声を上げた。魔法を使えるというのは少し好奇心をくすぐられるが、それよりもこの得体の知れない仮面への警戒心の方が強い。第一、本人　むしろ本面というべきかには悪いが、このお世辞にも趣味がいいとはいえない仮面を同年代の少年の前で被るのは、女の子として何か色々と捨ててしまいうな気がするし。

「そうか、まあそうだろうな」

ムジユラの仮面は、シエスタの言葉を特に気にした様子もなく、サイトの方に向き直る。

「オレの様な意思のある魔の仮面、なんの警戒も抜きで被る様な能天気、ヒラガくらしいのなんだ」

嘲るような調子のムジユラの仮面に、サイトが抗議の声を上げた。

「警戒しなかったわけじゃないだろ、5秒くらいは悩んだろーが」

「十分無警戒だよ……」

呆れを隠さないナビィの声を受け、サイトは何やら拗ね始める。

「なんだよお前ら、俺ってそんなに能天気かよ……」

「うん」

「ちょっとは否定しろって！」

声を合わせて肯定した2名に、サイトは再び抗議した。そんな使い魔たちの遣り取りを見ていると、なんだか可笑しさがこみ上げてくる。

「フッフ、皆さん、仲がいいんですね」

シエスタがそう言うと、サイトたちは互いを見合わせた。

「うーん、おんなじ子に召喚されて契約したせいかな、なんとなく気が合ってます」

「性格は全然違うのにね」

「出身も、種族もな」

サイト、ナビィ、ムジユラの仮面の順に言われるが、最後の台詞に少し引っかかりを感じる。

「そういえば、皆さんってどちらから来られたんですか？ 特にサイトさん、服装も名前感じも変わってますし」

サイトの着ている服は、シエスタには見たことのないものだった。恐らく、何処か外国のものなのだろう。今でこそ比較的王都の近くにいるが、シエスタは元々田舎生まれの村育ち。外国のことはほとんど知らないで、少し興味があつたのだ。

しかし、その質問にサイトは寂し気な苦笑で応えてくる。

「遠いところだよ」

「どれだけ遠いかも判らないくらいね」

サイトの言葉に、やはり憂いを帯びた声音のナビィが続いた。

「あの、どうしました？」

いけないことを聞いてしまったのだろうか。何やら落ち込んだ様子の2名に、申し訳ない気分が湧いてくる。

「いや、こっちのことだよ」

そこで、サイトは気にするなと言わんばかりの笑顔を返してくれた。その優しさに、少し元気が戻る。

「そんじゃ、俺は顔洗うか」

そう言つて、サイトが井戸水を汲もうとした。しかし、その動きはかなりたどたどしく、作業は難航していた。井戸の水汲みをしたことがないのだろうか、見ていてもどかしくなってくる。

「サイトさん、汲んであげますよ」

とうとう見かねて、シエスタは青い服の少年にそう申し出た。それに、サイトはばつが悪そうにお願いしますとつるべ縄を渡してくる。

「お手本を見せますから、次からは私がやるみたいにして汲んでくださいな」

「あ、うん。ありがとう」

頭を掻きながらのサイトの返事に、小さく笑みが漏れた。先程のいとも簡単に大量の洗濯を済ませた時とのギャップに、なんだか可笑しくなってくる。

そして汲んであげた水で、サイトは顔を洗いはじめた。

「くああ、つめてえ！ 一気に目が覚めるな！」

ただの井戸水に、サイトはいかにも感動したような声を上げる。その新鮮そうな口ぶりに、シエスタは首を傾げた。井戸の汲み上げに苦労したり、サイトは普段どのように水場を利用していたのだろうか。

「サイト、そろそろ戻らないと」

「主が水を待つてるぞ」

同僚2名の言葉に、サイトはそっかと頷き、シエスタから手拭いを借りて顔を拭いた。

「んじゃ、今度は自分でつと」

言いながら、黒髪の使い魔は先程よりも順調につるべを引き上げ、桶に水を注ぐ。

「あ、そっいや洗濯物ももう持っていつていいのか」

言いながら、サイトが自分たちの持つてきた分の洗濯物を見やっ

た。

「けど、洗濯物と水、両方運べる？」

懸念するナビィに対し、サイトはムジユラの仮面を見ながら応える。

「仕方ない。ムジユラ、帰りは頼むよ」

「はいはい」

返答しつつ、ムジユラの仮面はサイトの顔に覆いかぶさる。次いで、サイトが指を鳴らすと、水の入った桶とタバサの衣類、彼らを持ってきた籠が浮き上がる。衣類が洗濯籠の中に全て収まると、サイトはシエスタに向き直ってきた。

「それじゃあ、また後でな」

「あ、はい。また朝ごはんの時に会いましょう」

挨拶もそこそこに、サイトたちは宙に浮いた荷物を伴い、学生寮の方へと飛んでいく。その空飛ぶ背中を眺めながら、シエスタは大変なことを言い忘れていたと気がついた。

「みなさん!!!」

まだ間に合う。口許にメガホン代わりに手をあてがい、3名の使い魔たちへと声を飛ばす。

「洗濯物、ありがとうございましたー!!!」

その叫びに、サイトたちは少しだけ振り返って手を振ってくれた。そして、また寮の方へと宙を舞っていく。

この日、シエスタに初めて使い魔の友達ができたのだった。

「そういえば、サイトさんの名前、感じがひいおじいちゃんに似てるかも」

〈続く〉

〈第6話 最初の朝withメイド〉（後書き）

2011/08/16 改行修正

2011/10/02 誤字修正

〈第7話 現世の爆音、異界の旋律〉

タバサは、昨夜夢を見た。両親と一緒にいた夢を。父と母が、彼女の傍で微笑んでくれていた夢を。

夢の中で、父は駆け寄る彼女を、優しく抱き上げてくれた。母は、抱きつく彼女の頭を、笑顔で撫でてくれた。

優しい父、温かな母、誰よりも愛しく想っている、彼女の両親

今では、記憶の中にしかない、2人の姿。大切に、誰にも汚されたくない、大事な思い出。

それが、彼女には哀しかった。夢の中でなら会えることが、夢の中でしか会えないことが、そして何よりも、“それを夢だと知っていること”が、堪らなく辛かった。

しかし、今朝のタバサの機嫌は良かった。傍目にそれが判るのはキュルケくらいのもだろうが、心が軽かった。哀しい夢の中で、優しい温もりが自分を包んでくれたから。何故かは判らないが、その温かさが、自分をとて安心させてくれたから。

だから、彼女は少し弾んだ気持ちで、授業時間前の読書を楽しんでいた。

魔法学院の普通の教室は、昨日タバサたちが使った空き教室とは違い、半円型をした階段状になっている。5段からなる、石造りの階段の一段一段には、3脚の長机が1・5メートルほどの間隔をあけて設置されていた。最も広い再下段には、長机と面する形で教壇が置かれ、その後ろの壁には黒板が掛けられている。

タバサは、2段目の右端の長机の、更に右端に座っていた。視力が弱く、かつ他人の干渉を嫌うタバサとしては、黒板に近く、かつ

人気の少ない位置が望ましいのである。

「おー、色々いるもんだなー、使い魔って」

昨夜の温もりの余韻を感じながら本を開いていると、隣に座る人物から楽し気な声が上がった。タバサの使い魔たちの1名、サイトだ。横目で見てみれば、彼は周りの他の使い魔たちを、興味深そうに見回している。その好奇心が剥き出しになった姿に、タバサは内心でやや呆れた。

確かに、一クラス分の様々な使い魔たちが揃った光景は壮観だ。それは理解できる。しかし、つい昨日生まれた世界と離れ離れになっってしまったばかりで、よくもここまで憂いなく振る舞えるものだ。よほど大物なのか、それともムジユラの仮面の言う通りよほど能天気なのか。

多分、後者

そこで、タバサは“使い魔観察ノート・サイト編”に「好奇心が強い」、「並はずれた能天気」と記載しておいた。

「もう、サイト。あんまりキョキョロしてたら、恥ずかしいよ？」
そこへ、彼の頭上付近に浮かぶナビイのたしなめの言葉が入る。サイトはそれに気をつけるとは言うものの、視線はしっかり周りをさまよわせており、ナビイに溜息を洩らさせた。一方、タバサたちの後ろやや上方に1名だけ黙って浮いているムジユラの仮面は、何やら身体を痙攣させたように震わせている。すると、その体が見るみるうちに大きくなっていき、昨日見せた触手を生やした姿へと変わった。

「これで、周りの奴らに迫力負けはするまい」

バシリスクやスキュア等の幻獣たちを見据えながら言うムジユラの仮面に、ナビイがまたも溜息をつく。

「貴方も貴方で、張り合ってどうするの」

同僚2名の有様に肩　　というか羽　　をすくめるナビイを見て、タバサは少し安堵する。少なくとも、このオレンジ大サイズの少女には常識を期待できそうだ。その一方で、ムジユラの仮面の行動は少し意外だった。言動は落ち着いたものがあるらしく思えたが、根は案外子どもなのかもしれない。

そこで、観察ノートの“ナビイ編”には「比較的常識派」と、“ムジユラの仮面編”には「意外と幼稚」と記載する。

書き終わったノートを閉じて再び本を開こうとすると、サイトが小さく笑いながら声を掛けてきた。

「なあ、あの目玉、ちよつとムジユラに似てないか？」

言いながら彼が指差す方向には、1つ目の幻獣、バグベアーがいた。その言葉にムジユラの仮面本人は抗議の声を上げるが、タバサは少しそれを考えてみる。言われてみれば、2つ目と1つ目の違いこそものの、目が特徴的である点や羽もなく宙に浮いている点等、両者には共通点が多いかもしれない。またムジユラの仮面編ノートを開き、「バグベアーと通じるもの有」と記す。

そうこうしている内に、紫のローブにとんがり帽子姿のふくよかな女性教師が入ってきた。初めて見るので、恐らく2年生以降担当の教師なのだろう。

女性教師は教壇に着くと、優しい気な笑みを浮かべて周囲を見回した。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功の様ですわね。このシュヴルーズ、この新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

女性教師、シュヴルーズの言葉に、隣のサイトがうんうんと同意の頷きをする。と、そこで彼に、否、彼らに気が付いたシュヴルーズが、少し驚いた顔を見せた。

「おやおや。変わった召喚をした方がいらっしやいますね」

そして、とぼけた声でそんなことを言われてしまう。捉えようによつては嫌みにも聞こえる言葉だが、彼女の表情には一片の悪気も感じられない。

いわゆる、天然

思わずノートを取りかけるが、別に教師の分まで作る必要はないと気づき、やめた。

そして、そんなことを言われる原因となつた3者は、なにやら額を寄せ合っている。

「変わった召喚つて、やつぱ俺たちだよな？」

「他にいるか？」

「とりあえず、挨拶した方がいいのかな？」

なにやら使い魔同士で話をまとめたらしく、サイトが立ち上がり、ナビィとムジュラの仮面がシュヴルーズに向き直る。

「えっと、お初にお目にかかります、かな？ 俺はタバサの使い魔が1人、平賀才人です」

「同じく、タバサ様の使い魔が1人、ナビィです」

「同じく、タバサの使い魔が1人……オレの場合単位1人でいいのか？ ムジュラの仮面だ」

自己紹介を済ませたサイトたちに対して、シュヴルーズが微笑みを返してみせた。一方、周囲の生徒たちの多くは戸惑った表情をしている。

サイトを、平民を召喚するという事態で嘲笑を受けるくらいは覚悟していたが、共に召喚したナビィとムジュラの仮面が使い魔としてそれらしいのでやじりにくいらしい。

「自己紹介ありがとう、皆さん。私もこの学院の教師になつてしばらくですが、複数の使い魔が召喚されるというのは初めて見ましたよ」

そこで、シュヴルーズがサイトたちへと言葉を返した。

「ただでさえ貴方たちのように言葉を話せる種族を呼び出すことは珍しいというのに、まして 内1人は人間だなんて」

教師というよりは、珍しい事態に直面した研究者の声と目が異界の使い魔たちに向けられる。学問に携わる者である以上、知的好奇心は人並み以上にはあるようだ。

「そういえば、ミス・タバサは私と同じ“トライアングル”と聞いています。3つ足せるから3体召喚したというわけではないでしょうが、それを為せるだけの力があるということなのでしょうね」

1人納得したようなシュヴルーズとは逆に、サイトたちの方は首を傾げていた。

「トライアングル？」

「3つ足す？」

疑問をサイトとナビィが表せば、シュヴルーズは何処か得たりといった顔になる。

「貴方たちはご存じないようですね。では、丁度いいですし……ミスタ・グランドプレ」

「え？ は、はい！」

突然指名されたクラスメイトが、慌てながら立ち上がる。

「1年生のおさらいです。魔法の系統と、メイジのクラスについて教えてください」

「はい。系統には風・水・土・火の4系統があります。メイジのクラスは、この系統が幾つ足せるかで決まります」

マリコルヌの答えに、シュヴルーズは頷いた。

「今の答えに付け加えますと、メイジの系統魔法は現在失われた虚無系統の、合わせて5つの系統によりペンタゴンを形成します。また、メイジのクラスは1つの系統を単体で使える“ドット”に始まり、2つの系統を足せる“ライン”、3つを足せる“トライアングル”、そして4つを足せる最高位の“スクエア”の4クラスがあります」

言いながら、シュヴルーズは杖を取る。タバサの持つような長いものではなく、指揮棒タイプの細長く小さなものだ。

「申し遅れましたが、私の二つ名は“赤土”。土系統メイジ、赤土のシュヴルーズです。これから1年、皆さんに土系統の魔法を講義します」

言いながらも杖が振るわれ、教壇の上に幾つかの小石が現れた。

「私は土系統を最も重要な系統だと考えております。これは単なる身びいきではありませんよ？ 万物の組成を司る土系統は、冶金、建築、農耕地の開拓等、生活に密接した技術に大きく関わったものであるからです」

力説するシュヴルーズではあるが、場に微妙な白々しさが漂う。土系統が生活に重要なことは、その通りだ。しかし、強調するように言われては、本人が否定しても身びいきとしか思えない。

そんな生徒たちの空気を読んでいるのか、いないのか、シュヴルーズは授業を続ける。

「そして、土系統の呪文である“錬金”の呪文。これは土系統の基礎であるとともに、特異な呪文の1つでもあります」

言葉とともに、シュヴルーズの杖の先端が小石に触れた。

「先程の話の続きになります。系統を幾つ足せるかによりメイジのクラスは決まり、また、幾つ足されたかで呪文の効力が決まります。系統を足すことにより、より強力な呪文となるわけです」

しかし、と紫ローブの教師は続ける。

「通常、系統を足した呪文は同種の異なる呪文になります。例えば、土系統ではありませんが火を単体で使う“ファイヤー・ボール”にもう1つ火を加えると、“フレイム・ボール”になります。どちらも同じ火の球の呪文ではありますが、威力だけでなく性質が少々異なったものとなります」

それを聞き、タバサはちらりとキュルケが座っている方を向く。

案の定、火のメイジである親友は、同意するように頷いていた。フ

アイヤー・ボールはただ火球を飛ばすだけの呪文であるのに対し、フレイム・ボールは火球が敵を追いかけていく呪文であるためだ。

「それに対し、錬金の呪文は違います。勿論系統を足すことにより効力は上がりますが、呪文自体が別種の性質を持つということはありません。これを変化がない単調な呪文と捉える者もおりますが、これは1つの効力を安定して強化できるということなのです。私の知る限り、これと同じ特徴を持つ呪文は、風系統の“ウインディ・アイシクル”くらいでしょう」

その言葉に、今度はタバサが頷く。氷の矢を飛ばすウインディ・アイシクルは、雪風の二つ名を持つ自分の得意呪文だ。ドットの頃は単系統で使っていたが、トライアングルになった現在では水を1つに風の二乗を足して使っている。

「さて、では実際にやってみせましょう。1年生の頃にできるようになった人もいるでしょうが、基本は大事です」

そして、呪文の詠唱とともに、シュヴルーズの杖が振るわれた。

次いで、教壇の小石の1つが黄金色の、金属質の光を放ち出す。

「ご、ゴールドですか、ミセス・シュヴルーズ!？」

それに、驚いた様子でキュルケが尋ねた。それに対し、シュヴルーズが苦笑しながら首を横に振る。

「いいえ、ミス・ツエルプストー。ただの真鍮ですよ。黄金の錬金はスクエアクラスでなければなりません。先にも言いました通り、私はトライアングルですから」

「なるほど」

そこまで授業を黙って聞いていたムジユラの仮面が、ぽつりと眩いた。それに、興味深そうに講義を眺めていたサイトが反応する。

「どうした、ムジユラ? やっぱり、石が金属になったりしてお前も驚いたか?」

サイトの言葉に、ムジユラの仮面はまさかとばかりに笑う。

「別に物質を変化させる程度で驚きはしない。オレなら、生き物を別の生き物にすることだってできる」

さらりと恐ろしいことを耳にするが、それをよそに異形の仮面は続けた。

「ただ、ここの人間たちの魔法と、オレの魔法の違いを考えてみてな」

「ああ、そついや種類が違うとか言ってたな」

サイトがそつ言えば、ムジユラの仮面は頷いて見せる。

「魔法という呼び方が同じなだけで根本は別物かとも考えたが、案外そつでもなさそつだ」

「そつなのか？」

その発言に、サイトだけでなくタバサの興味も湧く。注意を受けても面倒なので表面上は静かに授業を受けている態勢を取るが、注意は専らサイトとムジユラの仮面の会話に向いた。

「どつやら、ここの中魔法は、世界の法を個人^{のり}の意思で変えて超常を為すらしいな。そついう意味では、オレたち魔族の魔法と通じるものがあるそつだ」

何処か面白がっているようなムジユラの仮面に、ナビィの声が掛かる。

「でも、モンスターの魔法って法どころか、世界そのものをむしばむ力でしょ？ 土地を氷で閉ざしたり、世界を闇で包んだり」

「まあな、それはそれで間違っちやいない」

「って、間違ってないのかよ！ お前被って力使っつてんの俺なんだぞ！？ そんな物騒っばいもん使っつてんの、俺！？」

ムジユラの仮面の答えに、サイトが腰の引けたような声を出した。それはともかく、とりあえずタバサは今の会話で判ったことをノートに記しておく。

「では、実際に誰かにやってみてもらいましょう」

ムジユラの仮面編に「私たちと似て非なる魔法（世界に対し有害らしい）」と書き終えるのと丁度同時に、シュヴルーズの声が耳に届いた。視線を教壇へ戻せば、シュヴルーズが誰を指名したものと視線をめぐらせている。

「そういえば、今年は風竜の幼生を召喚した生徒がおりましたね」
人の好い笑顔で放たれたその一言に、教室の空気が一瞬凍った。
そして、凍らせた当の本人の視線の先には、桃色の髪をした少女の姿がある。

「ミス・ヴァリエール、貴女にやってもらいますようか」
そして、その言葉が放たれた瞬間、一気にクラス中が騒然となった。

「あ、あの！ ミセス・シュヴルーズ！！」
生徒のほぼ全員がざわめく中で、キュルケが代表するように立ち上がる。

「どうしました、ミス・ツエルプスター？」
「危険ですから、ルイズは止めた方がいいと思います！」

ルイズを除く、恐らくその場の生徒全員の総意を口にしたキュルケに、賛同の頷きが幾つも起こった。昨日はルイズの成功を喜んでいたように見えたが、現実主義的なキュルケはまだ彼女の實力を信用しきっていないらしい。

「ちよっと！ どういう意味よ、それ！！」
一方、当の本人であるルイズは、それに対して大いに抗議してくる。

「意味なんて決まってるじゃない、ルイズ！！」
「そうだそうだ！！」

「毎度毎度被害に遭うこつちの身にもなれよ！！」
ルイズに言い返すキュルケに、そこかしこで追隨の声が上げられた。というより、上げていない者を探す方が難しい勢いだ。タバサは無言だったが。

事情が判っていないだろうサイトたちはというと、啞然としながらルイズや他の生徒たちを見比べている。

「無茶するなよ、“ゼロ”のくせに!!」

そして、とうとう批判の声に、その単語が入れられてしまった。途端、ルイズの瞳が鋭さを増す。

「私はゼロなんかじゃないわ! 風竜を召喚したんですもの!!」
憤怒のこもったその叫びに、一瞬周囲は気圧されるが、すぐに反論の嵐が巻き起こった。

「それだって、どうせまぐれだろ!」

「しかも、風竜だったって幼生じゃないか!」

「火竜みたく火を吹けるわけでもないし、ただ飛べるだけだろ!」
風竜という大きな成果のために声音こそ弱まるが、それでも声の数は依然として多い。しかし、プライドの高いルイズは負けじと言葉を続けた。

「シルフィードはただの風竜じゃないわ!! なんていったって、シルフィードはふういつ……あ……」

そこまで言うと、何故かルイズの声が途切れる。喧々囂々《けんごうごう》としていた生徒たちも、そのルイズの様子に怪訝とした。

「ただの風竜じゃないって、じゃあどう違うんだよ?」

「ええと、その……」

誰かが投げかけた疑問に、ルイズは視線をさまよわせるだけだ。その姿に、流石にタバサも訝しむ。ただの買言葉で言っただけなのだろうか。否、途中まではいやに自信あり気だったので、何の根拠もなく言ったとは思えない。どうでもいいといえどもいいのだが、なんとなく気になってルイズの次の言葉を待つ。

それから如何ばかり経ったか、やがてピーチブロンドの少女の口が開かれる。

「け、毛並みが違うのよ！ 毛並みが！！」

次の瞬間、サイトの腰が椅子からずり下がり、ムジユラの仮面ががくりと高度を下げ、ナビィが空中でつんのめり、タバサの眼鏡が少しずれる。

「い、今の、絶対なんかごまかす発言だったよな……」

「あ、ああ、だと思っが……」

「りゅ、竜に毛並みって……」

「意外と間抜け」

サイト、ムジユラの仮面、ナビィ、タバサの順にこっそりとつつこみを入れておく。何をごまかしたのか知らないが、幾らなんでも毛の生えていない生き物に毛並みはないだろう。ルイズは座学の成績は良かったはずであるが、応用力はないのかもしれない。

そして、そんなごまかされ方をされた方はどうなったのか。

「毛並みなんか違ったてどうするんだよ！」

「そうだそうだ！」

「なんの役にも立たないだろ！」

次の瞬間、サイトが椅子から転げ落ち、ムジユラの仮面が床に墜落し、ナビィが空中で逆さまになり、タバサの眼鏡とマントの襟えりがずれる。

「あ、あれでごまかされるなよ、あんたら……」

椅子に這い上がりながら、サイトが言った。

「ど、どんな頭してんだ、こいつら……」

浮かび上がりながら、ムジユラの仮面が毒づく。

「そ、それだけ冷静な思考ができなくなってるってことだとは思っけど……」

身体を反転させながら、ナビィがフォローを入れた。

「渡る世間は莫迦ばかり」

眼鏡と襟元を直しながら、タバサがそのフォローを切って捨てる。

ナビイの言う通り、妙な熱狂で皆冷静とは程遠い。それでも、あんな言い訳をあつさり真に受けるようでは莫迦としか言い様がない。そして、それが自分の学友たちであるという事実、タバサは頭痛を覚える。

「いい加減になさい!!」

そこで、とうとうというべきか、やっとというべきか、シュヴルーズからたしなめの声が入った。人の好さ気な顔に厳しい表情が浮かべられ、教室の生徒たちが見回される。

「なんですか、貴方たちは。同じ教室のお友達同士で罵り合^{のち}うなんて、貴族として

恥ずべきことですよ」

シュヴルーズの小言に、騒いでいた生徒たちは揃ってばつが悪そうな顔になった。尚も何か言いた気な生徒も少なからずいたが、これらの生徒はシュヴルーズが魔法で放った赤土の粘土で口を覆われてしまう。

「では、気を取り直しまして、ミス・ヴァリエール。錬金の実践をお願いします」

そして、ついにルイズが実践してしまうこととなってしまう。

「何故錬金の呪文でここまで大騒ぎになったのかは理解に苦しみませんが、失敗を恐れているは何もできませんよ」

優しくルイズに言うシュヴルーズ。言葉だけなら正しく聞こえるが、もう少し「何故ここまで大騒ぎになったのか」について熟考してほしかった。

やはり、天然

そして、ルイズはルイズでやる気になっているらしく、教壇へと静かに向かっていく。その姿を見るや否や、生徒たちは一斉に机の下へと避難を始めた。

「なあ、タバサ」

タバサもまた本を片付けて机に潜ろうとすると、サイトが声を掛けてくる。

「なんであの娘が魔法使うってだけで、こんな騒ぎになるんだ？」

「ワタシたち、今一つ事態が飲み込めないんですけど……」

疑問符を顔一杯に浮かべた使い魔たち。だが、詳しく説明している時間はなさそうだ。既に、ルイズは教壇の前で杖を掲げている。

「説明は後。隠れて」

「わ、判った」

「はい」

釈然としない様子ながら、サイトとナビイは指示に従った。一方、ムジユラの仮面は隠れもせず教壇の方を向いたままだ。

「おい、ムジユラー、隠れろってよー」

「オレは大丈夫だ、このまま見学してるさ」

「って、言ってるけど」

警告を拒んだムジユラの仮面を指差すサイトに、タバサは首を振って答えるしかなかった。

そして、教壇の方からルーンの詠唱が聞こえた、その次の瞬間

けたたましい爆音が巻き起こった。凄まじい衝撃が教室中を揺らし、黒煙が周囲に広がっていく。どうやら、危惧していた通りの事態になっただけらしい。

「きゃっ!?!」

「な、なんだあ!?!」

何が起こるか判っていなかったナビイとサイト、そして他の使い魔たちは突然の爆発に驚き、そしてほとんどの使い魔が異常事態に暴れ始めた。

「な、なにがあったんだ……?」

机の下から這い出たサイトが、呆然としたように呟く。タバサも

机から出てみれば、視界に広がるのは地獄絵図だった。多種多様な使い魔たちがパニックで暴れまわり、あちこちに机や壁、黒板等の残骸が散乱し、熱気に焼け焦げた跡がそこかしこに点在する。教壇の方に目をやれば、シュヴルーズが壁にもたれて失神しており、そしてルイズは、全身をぼろぼろにしながらも杖を振り下ろした姿勢で固まっていた。

その光景に、すっかり絶句しているサイトとナビィに、タバサは説明した。

「彼女は、どういうわけか使う呪文が全て爆発を起こす。私たちが警戒したのは、そのため」

それを聞き、サイトたちは一瞬啞然としていたが、すぐにはつとした顔を見せる。

「つて、ムジユラは!？」

「今の爆発、まともを受けたんじゃない?」

その言葉に、タバサ、そしてサイトたちはムジユラの仮面の方へと視線を向ける。そして目にしたのは、仮面の使い魔が静かに浮かんでいる姿だった。

「む、ムジユラ、大丈夫か?」

「大丈夫でなく見えるか?」

サイトの質問に、逆に皮肉っぽい質問で返すムジユラの仮面。その余裕ある態度に、流石にタバサも驚く。

「平気なの? あの爆発を受けて」

そう尋ねてみれば、ムジユラの仮面はにやりと瞳に笑みを浮かべた。

「オレは自分の魔法を跳ね返されたり、自分の作った武器で攻撃されたりと、自分の力が関わるものでなければ、前面からの攻撃でダメージは受けん」

「お前、ホントに反則だな……」

ムジユラの仮面の答えに、サイトが感心どころか呆れたように呟き、タバサはその言葉の意味を考える。自分の力が関わらない限り、前面からの攻撃は通じない。それは逆に言えば

背面からの攻撃には、他者の力でもダメージを受けるということ
思わぬところから弱点が発覚し、早速タバサはノートに記した

「にしても、ひどい有様だな」

改めて教室の惨状を見回したサイトが言うのに次ぎ、元凶という
べきルイズの声が耳に届く。

「ちよつと失敗したみたいね」

一瞬の間もおかず、教室は非難轟々《ひなんごうごう》の場へと
姿を変えた。まあ、当然である。そして、その渦中にいるルイズは、
やはりひどく落胆しているように見えた。

タバサたちは、それを黙って眺めていたが、やがて何故かムジユ
ラの仮面が元の大きさに戻る。

「ヒラガ、被れ」

「え、なんで？」

「いいから被れ」

なんのつもりか、被れと同僚に急かされ、サイトはよく判らなそ
うに従った。

「被ったぞ」

「よし、じゃあ次だ」

ムジユラの仮面が言えば、サイトは片手で頭を押さえ出す。

「あれ？　なんか、頭ん中に音楽が……？」

「その曲を、口笛で吹いてみる」

「あ、ああ」

そこで、サイトは口笛を吹き始めた。

始めはぎこちなかったその音調は、段々と洗練され、確かな旋律
へと変わっていく。不思議な曲だった。聴いたことがないはずなの

に、何故か懐かしさを感じる音色。何処か温もりを感じる、優しい音の流れ。その音の1つ1つが、胸を震わせていくのが判った。ただ聴いているだけで、心を癒されていくのを感じた。

それは周りの者たちも同じらしく、皆非難の声も忘れて聴き入り、使い魔たちも暴れるのをやめておとなしくなっていく。

しかし、驚くべきはそこからだった。教室中に散らばっていた机や壁等の破片が、急に動き出したのだ。否、それだけではない。その動き出した破片が、次々と元の場所へと戻っていき、そして直っていくのである。

まるで、壊れる前の時間へと巻き戻っていくかのような光景。それがどの程度続いたのか、やがてその自動修復が収まると、サイトは口笛をとめてムジユラの仮面を外す。

「おいおい、なんだよ今の」

驚いた風に尋ねるサイトに、彼に持たれたムジユラの仮面が答えた。

「いやしの歌」といつてな。本来は邪悪な魔力や浮かばれない魂を癒して仮面に変える曲なんだが、副次的な効果として壊れた看板を直すこともできるんだ。今は、オレの魔力でそれを強化してやったのさ」

それを聞き、ナビイが反応する。

「へー、副次的な効果だけなら、“時の歌”や“ゼルダの子守歌”と一緒になんだね」

「って、お前らのいたところじゃ、一曲演奏しただけで看板壊れても直せんのかよ」

「それくらいで驚いてちゃ……、嵐を呼んだり、昼と夜をひっくり返したりできる曲だってあったんだよ」

「どんなどこだよ、お前らの世界……」

ナビイの返答に、サイトが呆れ果てたような顔になった。タバサも、顔には出さないが同じ気持ちだ。ただの音楽がそんな力を持つ

とは、一体どんな世界なのだろうか。

「だが、やはり力が弱まっているな……まだ、ちらほら傷跡が目に着く」

悔し気なムジユラの仮面の言葉に、タバサたちは周りへ目を向ける。言われてみれば、まだ焦げていたり、傷が残っていたりするところが少なからず点在していた。

「ちっ、我ながら情けない」

「でも、元々主要な効果じゃなかったんでしょ？ 仕方ないよ」

吐き捨てるムジユラの仮面に、ナビイがフォローを入れる。それに対し、サイトは教壇の方へと目を向けていた。

「まあ、それはともかくさ」

言いながら、サイトは倒れているシュヴルーズの方を指差す。

「先生気絶してるけど、授業この後どうすんの？」

「わからない」

黒髪の使い魔の疑問に、主たるタバサは小さく答えるしかないのだった。

〈続く〉

く第7話 現世の爆音、異界の旋律く（後書き）

2011/08/14	誤字修正
2011/08/08	改行修正

ムジユラの仮面は、完全に追い詰められていた。

紅蓮の炎も、高速の疾走も、連続の魔力弾も、眼前の少年剣士には通じない。どんな攻撃を仕掛けようと、この剣士はあっさりと活路を見出し、逆にこちらへダメージを与えていくのだ。

歯が立たない。

現状を表すべきその言葉に、ムジユラの仮面は内心唾然とする。たかだか12か13を数えたばかりだろう少年に圧倒されている事実に、屈辱よりも驚きが優っていた。それでも、相手の強さへの恐れはない。そもそも、魔物、魔族は極端に恐怖心が薄い。相手が自分より強いとしても、迷うことなく襲いかかるのがモンスターという存在だ。

だから、今心にあるのは、恐れや怯えではない。

宙を飛んで間合いをとり、ムジユラの仮面は鞭を剣士へと放つ。しやにむに繰り出す鞭の嵐は、しかし剣士の構えた盾に全て防がれてしまった。それどころか、こちらの攻撃の隙を突き、剣士は弓矢を射てみせる。飴色の光を纏った魔法の矢がムジユラの仮面に突き刺さり、得もいわれぬ激痛が全身を貫いた。

その戦いの最中、ムジユラの仮面は一切の恐怖は感じていなかった。今まさに命の危機が迫っているのだとしても、そこに恐れはなかった。

あるのは、ただ妙な落ち着きだけ。

視界に、剣を構えて向かってくる少年剣士の姿が見える。こちら

が放っていたトゲ付きのコマを避けながら、こちらへ突進していた。一方、ムジユラの仮面は剣士の放った魔法の矢のダメージが抜けきらず、まだ動けそうにない。そして、次にあの剣士から一刀でも受けければ、恐らくそれが止めの一撃になるだろう。

それを理解しながらも、ムジユラの仮面に焦りはなかった。最早抵抗もできない身体ではあったが、何故だか心は静かだった。

眼前で、少年剣士が刃を振りかぶる。それを見据えながら感じていたことは、ただこれで終わるのだという、その一点だった。

ムジユラの仮面程の力を持ったモンスターが、1度倒されただけで果たしてそのまま滅びるのかということに関しては、特に考えることもなく

戦いは終わったようだった。離れた位置からそれを確認すると、ムジユラの仮面を闇の封印から解いた張本人、しあわせのお面屋は一息ついた。どうやら、あの少年剣士はムジユラの仮面を子鬼から取り戻すという約束を守ってくれたようだ。

見れば、その少年剣士は仮面を盗んだ子鬼や妖精2人とともに、なにやら談笑しているようである。それを少し微笑ましく思いながら、紫の衣をまとったお面屋は少年たちの許へ歩み寄っていった。ムジユラの仮面を返してもらわないといけない。

と、その途中で、お面屋は足許に転がっているものに気が付いた。少年に敗れたムジユラの仮面が、無造作に放られていたのである。

一応、ワタクシのものなんですがねえ

思わず苦笑が漏れる。これが月の墜落騒ぎの元凶であることは承知しているが、伝説の呪物を打ち捨てたままにしておくとはなかなかの罰当たりぶりだ。

苦笑いまじりにムジユラの仮面に手を伸ばすと、今度は別の意味で驚く。

「おお、やはり仮面から邪気が無くなっている……」

仮面を手に取りながら、我知れず声が漏れていた。剣に、古来より魔を追い払うといわれる武器によって倒されたのだから予想はしていたが、実際に確認すれば驚きもする。それだけ、この仮面は禍々しい力を発していたのだから。

一方、その呟きで気が付いたらしく、少年たちがこちらへ顔を向けてくる。

「たしかに受け取りましたよ」

言いながら、背負っている大型のリュックにムジユラの仮面をしまい、少年へ会釈した。

「さて、ワタクシは旅の途中ですので、これで……」

これでもしあわせのお面屋はそれなりに忙しい。様々なお面を集めるため、東西南北を巡り回らなければならない身だ。なので、約束の期限　少しオーバーしてはいるが　で少年がぎりぎりムジユラの仮面を取り戻してくれたことは、幸運であったといえる。リュックを軽く背負い直し、お面屋は少年と子鬼の間を通っていた。罪の意識からなのか、子鬼がやけに震えていたが、もはや終わったことだ。今更この子鬼を責める気はない。もう十分手酷い目にあつたようだし。

しばらく歩いて少年たちから距離を取ると、ふと足を止めて振り返る。

「アナタもそろそろお帰りになられた方がよろしいのでは……？」
静かに言いながら見据える先は、仮面を取り戻してくれた少年だ。

「出会いがあれば必ず別れは訪れるもの。ですが、その別れは永遠ではないはず……」

緑の服にとんがり帽子の少年剣士が、僅かにはっとした表情を見せる。

「別れが永遠になるか一時になるか……それはアナタ次第」

少年の眼を真っ直ぐ見詰めながら、そう言葉を締めくくった。この少年が、何かを探しながら旅をしているのだということは、なんとなく察しが付いている。それは、恐らく過去の絆。かつて別れた誰かを求めているものだということが、少年の眼から見て取ることができた。

自分も古今東西のしあわせのお面を求めてさすらう身。求めているものこそ違うが、同じ何かを探しての旅を続ける者として、ついこんな言葉を掛けてしまっていた。

「では、失礼します……」

そんな老婆心が我ながら可笑しくなり、誤魔化すようにもう1度会釈してその場を去ろうとする。と、そこでまたも足が止まった。今度は、お面屋として気が付いたことがあったのだ。

「おや、アナタ随分たくさんの人をしあわせにしてあげましたね」
言いながら、少年が持っているだろう幾多のお面の気配を探る。

「アナタの持っているお面にはしあわせがいっぱい詰まっている」
言葉の通り、彼の持つお面は、人々の幸福の念で満ちていた。愛し合う男女の心、自分の願いを託す想い、新たに拓けた道への希望、それらが少年への感謝という形で幸せを形作っている。

「これは実にいいしあわせだ」

最後にそれだけ言い残し、今度こそしあわせのお面屋はタルミナを去っていった。

それから少しばかり経つてのこと。森の中で、しあわせのお面屋は切り株に座りながら休憩を取っていた。

「いやあ、あれは本当にいいしあわせでした」

あの少年の持っていたお面のことを思い返しながらか、呟いてみる。
「少し、惜しかったかもしれないねえ」

あれほど幸せの詰まったお面はそうそうない。1つぐらい譲ってもらった方がよかつたのではないかと、今更ながら思ってしまう。

「まあ、それも無粋というもの……」

軽く頭を振って、その考えを打ち消す。あれらのお面は、あの少年への感謝が合ってこそその幸福で満たされていた。やはり、彼の許にあるのがあるべき姿だろう。

それにしても、“僅か3日間”であれだけ人々に感謝され、幸福にしてしまうとは、今にして思えばあの少年も凄まじいことをやってのけたものだ。

「まあ、だからこそこの仮面の呪いに打ち勝てたんでしようがね」

一人ごち、ムジユラの仮面を取りだす。伝説に謳われる程の邪悪で凄まじい力を宿していた、伝説の仮面。事実、手にした時はその禍々しさに身の毛がよだった。それを見事に打ち破り、邪気を祓ってみせたあの少年。彼が丁度ムジユラの仮面と関わることになってくれたとは、僥倖としかいいようがない。

「さて、ではそろそろ行きますか」

十分に休みは取れた。そろそろ出発しようかと腰を浮かせると、不意に違和感に気付く。空気の流れが妙だ。普通とは違う、何やら奇怪な気配をすぐ傍から感じる。

異様な雰囲気周囲に漂う中、突然目の前の空間が揺らぎだした。それに驚く間もなく、揺らぎはやがて形となり、銀色の鏡のようなものとなって顕現する。

「こ、これは一体？」

突然の出来事に呆然としてみると、うっかりムジユラの仮面を持つ手から力が抜けてしまった。

「あっ！」

声を上げる間にも、ムジユラの仮面と鏡との距離はみるみる縮まり、やがてそれはゼロとなる。刹那、再び空気が揺らいだ。銀色の鏡はムジユラの仮面を飲み込むと、みるみるしぼんでいってしまう。そして、周囲の空気が静けさを取り戻した頃には、鏡は影も形もなくなっていた。その中に取り込んだ、ムジユラの仮面とともに。

「ああ、なんとということだ……」

折角取り返してもらったばかりの伝説の仮面が、また何処かへ消えてしまった。恐らく、先程の鏡のようなものは大物モンスターを倒した時等に出現するワープ・ゲートのようなものだったのだろう。ムジユラの仮面の2度目の喪失に、しあわせのお面屋は天を仰ぐ。

「またあの仮面が野放しになってしまうのか、邪気が無くなったとはいえ、魔力はまだかなり残っていたというのに……」

口にする声に、懸念が滲む。そう、ムジユラの仮面は確かに邪気こそ失われてはいたが、それでも魔力の方はまだまだ強大と呼べるレベルだった。魔物の中でも特に強力なものは、ただ倒すだけでは蘇ることがあるのだ。某大魔王や、某風の魔人等がいい例である。

「これはとんでもないことになってしまった……」

邪気はなくても、あれだけの魔力があるなら悪用されれば、また恐ろしいことになるだろう。

しかし、そこでふとお面屋は考える。

「正しい使い方ならば、どうなるでしょうか……」

顎に手をやり、思い起こす。先程の妙な鏡、あそこからは少なくとも邪気は感じられなかった。誰がなんのために開いたゲートかは判らないが、あれを開いた者に悪意はないと見ていいだろう。

ならば、と、しあわせのお面屋は何処の誰とも知らない相手に語りかける。

「ムジユラの仮面を持って行ってしまった誰かさん。その仮面の力は、恐らくアナタの想像を遙かに超えているでしょう」

虚空を見据えながら、お面屋は言葉を続けた。

「ですが、それは今や災いを招くためだけの力ではないはず……その力が世に仇為すか、それともしあわせをもたらすか、それはアナタ次第……」

もはやことは自分の手を離れてしまった。それならば、自分にできることは、この言葉を託すことのみ。

「自分の正しいと思ったことを、信じなさい……信じなさい……」
それは、半ば自分に対して言い聞かせる様なものだった。恐らく届いてさえいないだろうその言葉は、祈り程度の意味しか持たないかもしれない。

それでも、今はこの言葉に全てを込めるしかなかった。しあわせのお面を求める自分が手に入れた、あの伝説の呪物が、今度こそ世に幸福を与えてくれる。その願いとともに。

「でも、後でちゃんと返してくださいね」

〔 Extra Episode Finn 〕

第8話 ゼロと雪風の邂逅

教室の窓から首を差し込んだシルフィードは、主の背中を眺めていた。未だ自身の魔法でボロボロなままのルイズは、無言のまま机を拭いている。

あの爆発の後、ルイズは意識を取り戻したシュヴルーズに、教室の後片付けを命じられたのだ。災害の再発防止なのか、魔法の使用禁止という措置付きで。既にあの妖しい仮面の妙な力によって教室のほとんどは修復されていたが、それでもまだ破壊の跡は点々と残っている。

ちなみに、授業自体は別の教室で続けられることになっていた。

それにしても、あの仮面はやはり怪しい。あの力は、明らかに人間の魔法とも、そして精霊の力とも違う。あんな奇怪な力を使うとは、ますますもって危険な仮面だ。

大体、見た目からして趣味悪すぎだもの。例えシルフィが許しても大いなる意思があの不気味っぷりを許さないのね。あのヘンテコな色だつてどういふはしゃぎかたなのよ、ジャイアントモールにでも食べられればいいのかわ、きゅい！

そこまで考えると、何故か思考があのお味悪仮面への非難に変わっていたことに気が付き、軌道修正する。

とにかく、教室の傷跡を、自身の魔法の成果を処理している間、ルイズはずっと無言だった。何も言わず、ただ手を動かし続けている。

ずっと、肩を落とし、俯いたままで。

そんなルイズの姿に、シルフィードの胸はかき乱される。

正直に言って、ルイズの失敗には失望していた。物質を別の何か

に変換させる魔法、しかし、その結果は本来のそれとは全く関係のない、爆発というもの。しかも、他の生徒の反応を見るに、それは今回に限った事ではないようだった。偉大な古代の眷族である自分呼び出した以上、彼女はすごい才能を持っているものとはかり思っていたが、実際はその反対だったのだ。それをまざまざと見せつけられた時、シルフィードは心底がっかりしてしまった。

しかし、ルイズの今の姿を見てみると、呆れの感情はなりをひそめてしまう。もの一つ言わず、顔を上げようとせず、ただ爆発で煤けた机を拭く動作を続けるルイズ。彼女の落胆がシルフィードの比ではないことは、その姿から明らかだった。今は、ルイズはシルフィードに背を向けているために表情は判らないが、きっとその顔は苦渋に歪んでいることだろう。それを思うと、シルフィードの胸がいやに痛んだ。

ルイズ様、落ち込んでるのね……

その考えが、心を苛む。

確かに、ルイズは当初思っていたような、立派な魔法使いではなかった。自分が召喚される時に期待していた、一族への土産話になるような知識の吸収は、きっと望めないだろう。

しかし、シルフィードはそのことでルイズを貶す気にはなれなかった。ルイズは、自分が召喚に応えたことを、とても喜んでくれたから。召喚された自分に、とても優しくしてくれたから。

だから、ルイズの辛そうな後ろ姿を眺めていることは、ひどく胸を苛ませた。

慰めてあげたいのね、でも、どうすればいいのか判らないのね

……

何をしてあげべきか、なんと声を掛けるべきか、見当がつかず、やきもきする。齒がゆさばかりが募る中、小さな啖きが聞こえてき

た。

「笑っちゃうわよね……」

自嘲じみた響きの声に、シルフィードはルイズの姿を見直す。

「貴方は、伝説の幻獣、風韻竜……」

言いながら、ルイズが首だけを振り向かせた。俯き気味のその顔は、前髪に隠れてよく見えない。

「けど、私は魔法一つ満足に使えない、ゼロ……」

「ゼロ」の単語を口にする声が震えている。

「笑っちゃうわよね……、使い魔に全然釣り合っていない主人だなんて……」

言葉づかいは軽く、けれど、その声音はとても重たい。

「莫迦みたいね、私……、貴方を呼んだからって、それで私が失敗しなくなる保証なんかなかったのに」

言われ、シルフィードは昨日のルイズの言葉を思い出した。

“よかった……ちゃんと、来てくれた……成功、できた……”

今になって、理解する。何故ルイズが自分を、風竜を召喚したことであんなに喜んでいたのかを。

“そうね、そうよね！　とうとう努力が実ったんだわ！　私だってヴァリエール公爵家の娘なんですもの、いつか大成するって信じてたわ！”

“見てなさいよ、あいつら！　なんとって風韻竜を使い魔にしたんだから！　これでもうゼロだなんて呼ばせないわ！”

今になって、思い知る。何故自分が風韻竜だと知った時、あれほど笑顔を輝かせていたのかを。

それは、単に高等な存在を使い魔に出来たからではなかった。それまで失敗ばかりだった自分と、決別することができたと思えたからだだったのだ。

しかし、現実残酷だった。高位の幻獣種である自分を召喚したにもかかわらず、それはルイズの成長を意味してはいなかったのだ。

から。

それが判ったその時、ルイズがどれほど愕然としたことか。彼女の心が、どれほど打ちのめされていることか。想像しただけで、胸が張り裂けそうになる。

「本当……莫迦だわ、私……」

口許に哀しい笑みを浮かべながら、ルイズの自嘲が続く。刹那、その横顔に一筋の光が流れた。前髪に隠された、瞳の辺りから。それを見た瞬間、シルフィードの中で何かが弾けた。

「ルイズ様！」

自分でも、驚くほど大きな声。その呼び掛けに、ルイズはびっくりと、涙にぬれた顔を向けてきた。

「な、なによ、喋ったらいけないって約束だったでしょ！」

顔を服の袖で拭いつつ、ルイズが叱りの言葉を投げってくる。それに怯まず、シルフィードは再び口を開いた。

「ルイズ様は、ゼロなんかじゃないのね！」

毅然と、その言葉を言い放つ。瞳を真っ直ぐに見つめての訴えに、ルイズは驚いた様な表情を浮かべた。

「ど、どうしてよ……?」

使い魔の言葉に戸惑っているのか、ルイズが視線を泳がせ気味に聞き返してくる。

「どうして、そんなこと言うのよ?」

ただでさえ力無げなその声は、語尾の方では消え入りそうだ。それを口にする表情も、まるで萎れた花の様に弱々しい。

それを見てとり、シルフィードはまた力いっぱい想いを言葉に変える。

「ルイズ様が本当にゼロなら、私は今ここにいないわ！ 今頃、巢の中で長老様たちのお説教聞いているか、家族と一緒に祈りしているかなのね！ きゅい！」

顔を引き締めて力説するが、ルイズはそれに寂し気な苦笑で返してくる。

「でも、それだってほんのまぐれかもしれないじゃない」
弱気なことを言う主に、シルフィードはぶんぶんと頭を振る。

「まぐれでもなんでも、ルイズ様はシルフィを召喚しました！これは間違いはないわ！そして、シルフィは偉大な韻竜なのね！そんな私を召喚したのだから、きっとルイズ様も偉大な魔法使いになるはずだわ！」

言いながら、シルフィードは思考がごちゃごちゃとしていくのを感じた。言葉を続ける度に、頭の奥が熱くなってくる。

「それに、ルイズ様は私に優しくしてくれたもの。私が困ったことにならないようにって、色々と考えてくれたもの」

言葉が止まらない。なのに、言いたいことがまとまらず、余計に心が乱れていく。

「それに、シルフィードって新しい名前もくだすったわ。素敵な名前で、すごく嬉しかったのね」

「シルフィード？」

声は何故かくぐもっていた。感情が昂り、わけが判らなくなる。それでも、慰めの言葉を掛けるのをやめようとはしない

「それに、それに……」

しかし、上手く言葉が出てこなかった。頭が熱くて、何を言っただいいのか判らない。どうにもならず、声を詰まらせていると、柔らかな感触が頬に触れた。見れば、いつの間に傍まで来ていたのか、ルイズがシルフィードを撫でてくれている。

「もう、なんであなたが泣いているのよ？」

言われてみて、気付く。いつの間にか、自分の方が涙を流していたことを。軽く頬を舐めてみれば、塩の味が舌を刺した。

そんなシルフィードの頭を撫でながら、ルイズはふっと笑ってみせる。

「判った」

「きゅい？」

「判ったっていったの」

言うなり、ルイズはそっぽを向いた。その横顔には、微かな赤みが差している。

「まったく、使い魔のくせにご主人様を慰めようだなんて、ホントに不敬なんだから……」

次いで、ルイズの口から出てきたのは、そんな言葉だった。額面通りに捉えればきついものがあるが、もちろん賢明な韻竜であるシルフィードは主の真意をちゃんと判っている。何故なら、そういうルイズの口許には、柔らかな笑みが浮かんでいたのだから。

「でも、ご主人様を助けようっていう忠誠心には、報いないといけないわよね」

言うなり、ルイズはシルフィードに目を合わせてきた。

「だから、ありがとう、シルフィード」

そう言ったルイズの表情は、とても華やかな笑顔だった。先程までの、自嘲と自虐に満ちた顔とはまるで違う。明るく、優しい光を灯した、綺麗な笑み。ポロポロの姿にあってさえ、その姿は輝いて見えた。その微笑に、シルフィードは一瞬見惚れてしまう。

さっきの萎れた花じゃない、艶やかに咲き誇る、大輪の花。その眩い様な微笑みが、美しいと素直に感じさせた。

そんな笑顔を見せてくれたことに、そして自分に礼を言ってくれたことに、シルフィードの心は感極まる。

「きゅい！ よかった、ルイズ様、元気になってくれたわ！ きゅいきゅい！」

「わっ、ちよつと、シルフィード!？」

感動のまま、シルフィードはルイズの顔をぺろぺろと舐め始めた。流石にルイズは困惑した顔を浮かべるが、喜びに沸くシルフィード

は止まらない。

ルイズが元気を取り戻してくれたことが嬉しかった。もう泣いていないことが嬉しかった。そして、自分に笑顔を見せてくれたことが嬉しかった。そんな歓喜の想いを舌に乗せ、何度も何度も舐め続ける。

「でも」

やがて、気持ちが落ち着いて舌を止めると、ルイズがシルフィードを見据えて口を開いた。よだれでべとべとになった顔や髪を、ハンカチで拭いながら。

「人目がないからつて、こんなところで言葉を話したのは事実だからね。次に喋ったら、ご飯抜き」

「きゅい!?!」

思いもよらない発言に、シルフィードは目を見開く。

「ひどいのね! 横暴なのね! 断固然るべき抗議を訴えるのね!」

「駄目よ。それが嫌なら、ちゃんと約束守りなさい」

「きゅい!……」

自分の抗議をまるで取り合わず、厳しい眼をむけるルイズに、シルフィードは情けない声を漏らした。どうやらこの小さなご主人様は、意外とおつかない性格だったらしい。

でも、とシルフィードは思う。少なくとも、さっきの哀しい表情、あんな顔をされるくらいなら、今のちょっと怒った様な顔の方がよっぽどましだ。

恐らく、魔法の得意でないらしいルイズは、これからも失敗することは多いだろう。そして、きつとその度に劣等感に苦しむだろう。なら、その時は自分が彼女の支えになろう。彼女が挫けそうな時は、自分が彼女の背を押そう。彼女の使い魔として。

シルフィードが新たな決意を誓っている一方で、ルイズは何かに

気付いた表情を見せる。

「そつえば、あの子にもお礼言わなきゃね」

あれから、ルイズは急いで片付けを終わらせた。シルフィードの励ましで沈んだ気持ちが浮き上がり、効率が上昇したのが大きい。とはいっても、結局終わった頃には2時限目の授業も終わる時間になってしまったが。

そして、一仕事を終えたルイズは、ボロボロになった服の着替えもそこそこに、今はある人物を探している。といっても、相手の居場所は簡単に見当がつくのだが。

自分のクラスの、次の授業があるはずの教室へ向かうと途中で目当ての人物を発見する。人一倍小柄な背丈に、青い髪、身長より長い杖に、付き従う奇妙な3体の使い魔たち。恐らく次の教室へ向かっているのだろう、静かに歩くタバサの背中を見つけることができた。それを見て取ると、ルイズは彼女に近づきながら声を掛ける。
「ええと、ミス・タバサ？」

背中へ向けて呼び掛けると、彼女は足を止めて振り返った。続いて、彼女の使い魔たちもこちらを向いてくる。ルイズは行儀の悪くならない程度に早足で追いつくと、彼女に礼を述べた。

「さっきのこと、お礼を言うわ。ありがとう」
「？」

一方、述べられた方は意味が判らないとばかりに首を傾げる。
「ほら、教室のことよ。私の、その、ほら、し、失敗の片づけをしてくれたじゃない」

説明とはいえ、自分の失敗を口にするのはあまりいい気がしない。恐らく自分の頬は引きつっていたことだろう。そして、それを聞いたタバサは無表情ながら、合点がいったとばかりに頷いた。

教室の片づけをしている間、ルイズはそのことが気になっていたのだ。失敗による落胆はシルフィードの拙いながら一生懸命な言葉で払拭されたが、代わりに自分の失敗の後始末をしてくれた相手への感謝が心を占めていた。もし彼女が教室の修復を大部分終わらせておいてくれなければ、ルイズの片付けはさらに時間がかかっていたことだろう。

「私じゃない」

「え？」

しかし、返ってきたのは意外な言葉だった。次いで、彼女は杖の先で傍らの少年と宙に浮く仮面　サイズは教室で見たより縮んでいた　を指し示す。

「使い魔たちがやったこと。お礼は彼らに言うべき」

そう言われ、ルイズは戸惑った。基本的にトリスティンの貴族は気位が高く、ルイズもその例に漏れていないことは自覚している。そのため、ルイズは他人に頭を下げるのが苦手なのだ。

先程はシルフィード、今はタバサに礼を言ったものの、前者は自分のために涙を流す彼女をあやす様な意味もあつたし、後者は同じ貴族だ。

しかし、他人の使い魔、それも平民とマジック・アイテムに礼を言うとなると、どうしても二の足を踏んでしまう。

とはいえ、ルイズは貴族だ。受けた恩義を無視するということは、彼女の理想とする貴族の道に反する気がする。なので、意を決して礼を口にしようとするれば、黒髪の少年がそれを遮った。

「いや、お礼はムジユラ、このお面だけでいいよ。俺はこいつに言われなきゃ、特に何かするつもりはなかったんだ」

「だから、仮面といえ」

無然という仮面を前に、ルイズはますます迷う。平民の少年も一緒というなら、まだ謝礼に踏み切ることができた。大抵は単なる労いだろうが、平民に礼を言う貴族はいないではないからだ。しかし、

この気味の悪いマジック・アイテム単体に頭を下げるというのは、流石にどうだろうか。その上、この仮面は自分の使い魔がひどく警戒している。そして、実際に間近で対面してみれば、その懸念が正しく思えてきた。なんだか判らないが、妙な妖しさを感じさせる。そんな相手に頭を下げるのは、どうにもためらわれた。

どうしたものかと悩んでいると、今度は仮面の方が声を発する。「オレとて、礼といわれてもな。単に親近感で気まぐれを起こしただけだからな」

面倒くさそうなその言葉に、ルイズは助かったと思うよりもむっとする。

か、仮面のくせに、この私の感謝が必要ないっていうの!?!
仮面のくせに！ 不気味なくせに！ 色遣いもヘンテコなくせに！
ジャイアントモールにでも食べられればいい様な見た目のくせに！
怒りのままにそこまで思うと、何故か“似た者主従”という単語が頭をよぎった。それに首を傾げる間もなく、黒髪の少年が怪訝とした声を上げる。

「親近感って、お前がこの娘こにどんな親近感わくんだ？ 似ても似つかないじゃん」

先程から自分を貴族と思ってもない様な無礼な物言いに眉尻が上がるが、彼の言う通りだ。親近感とこの仮面はいうが、こんな悪趣味な仮面と自分に共通するものがあるなどとは思えない。むしろ、あつて欲しくない。

しかし、謎の仮面が次に発した言葉は、想像すらできないことだった。

「自分でいうのもなんだが、オレも強大な力を弱めている身だからな。本来強い力を持っているはずなのに上手く扱えているこの娘が、他人事に思えなかつたんだよ」

初めは、何を言われたのか判らなかつた。次第にその言葉の意味を理解していくと、胸の鼓動がはやりだす。

私が、強い力を持っている……？

そのことを問い質そうと口を開こうとすれば、既に仮面の主であるタバサが問い掛けていた。

「どういう意味？ ルイズの力とは？」

「言葉通りだ。結果は失敗とはいえ、たかだか物質変化程度に使う魔力で教室を半壊させる威力を産むんだ。今はつばみにもなっていないような才能らしいが、開花すれば相当な大輪になるだろうな」

その言葉に、ルイズの胸が激しく揺れる。その動揺は、我知れず言葉として飛び出した。

「で、でも！ 私はずっと失敗ばかりだったのよ！？ どんな魔法使っても、どんなに練習しても、いつつも失敗して、爆発してばかりで……」

言いながら、切なくなってきたそこで言葉を切るが、何故か少年が変な顔をする。

「爆発ばかりって、失敗っていう割にはやけに結果が安定してるな？」

訝しげに言う少年に、ルイズは眉をひそめた。

「どういう意味、それ？」

険のある声で聞き返せば、少年はたじろいだ風に言葉を重ねる。

「いや、ほら、魔法のことは俺はよく判らないけど、失敗ってさ、もつというんなもんになるんじゃないの？ 普通さ、失敗ってどうなるか予測できないもんじゃないか」

言われて、ルイズははっとする。思えば、ルイズの失敗は爆発だけだった。火、水、土、風、そしてコモンマジック、それぞれ性質の異なる魔法にも関わらず、爆発以外の失敗はしたことがなかった。

考えてみれば、おかしな話だ。普通、魔法を失敗しても爆発はしない。通常の魔法の失敗は、何も起こらないこと。呪文の効果が表れないことを指す。だから、爆発という異常な失敗に屈辱を感じて

きたのだが、何故“爆発以外の失敗をしないのか”ということなど考えたこともなかった。確かに、性質が違う魔法でも失敗の結果、現れる効果が常に同一というのは、奇妙に思える。

その考えに取り付かれ、沈黙していると、それまで黙っていた羽の生えた光が声を掛けてくる。

「失礼、よろしいですか？」

「え、ええ。何？」

「結果が同じということは、個々の失敗における原因が同じだからじゃないかと思うんですが、失敗の原因はなんなんですか？」

言われ、ルイズは困ってしまう。

「知らないわよ、家族も、先生たちも、誰も爆発の理由を言えなかったんだもの」

口調が、少し拗ねたものになってしまった。周囲の誰もが、自分の爆発を笑うだけで、その意味を深く考えようとはしなかった。だから、ルイズはがむしゃらな努力を続けるしかなかったのだ。

それを聞き、仮面と少年がまた言葉を発する。

「やれやれ。ということは、あの連中、相手の失敗の原因を言い当てることさえできなくせに、

相手を侮辱してたわけか。程度の低いことだな」

「でもよ、誰も原因が判らないなら、もしかして原因がないんじゃないの？」

「原因のない失敗を、失敗とは呼びはしない」

「それもそうか」

そんな会話をする両者に、ルイズは戸惑う。既に、相手の無礼に対する怒りはない。むしろ、こんな風に自分の魔法のことを考えてくれることへの、困惑の方が大きかった。

それを使っている、当のルイズでさえ、冷静に自分の爆発する魔法を考察することが、できていなかったのだから。

そこで、また羽付きの光の声が耳に届く。

「ルイズ様でしたよね？ ワタシの相棒のことを、聞いていただけますか？」

「あんたの相棒？ 別にいいけど」

では、と前置きして、光は話しはじめた。

「ワタシの相棒は、コキリ族という種族でした。コキリ族は、皆私のような存在を自分だけの相棒として持っているんです」

「メイジと使い魔みたいね」

光は、頷くように一度身体を傾ける。

「でも、ワタシの相棒は、ワタシが彼の許へ行くまで、相棒がいなかったんです。そのことで、彼はずっと半人前と呼ばれ、莫迦にされてきました」

ルイズは息を飲んだ。周囲が持っているはずのものを、1人だけ持っていない。自分の境遇と酷似している。

「でも、後になって彼に相棒がいなかった理由が判ったんです」

「なんだったの？」

思ったより大きな声で聞いていた。会ったこともないその相棒とやらに、感情移入してしまったからだろうか。

「その、改めて考えるとお粗末な話なんですけど……」

何故か言い難そうにしながら、羽のある光は答えた。

「彼はコキリ族でなく、人間だったんです」

一瞬、沈黙が訪れる。

「つまり、コキリって種族じゃなかったから、相棒がいらない方が普通だったってこと……？」

「はい」

その話に、ルイズは呆れてしまった。聞き終えてみれば、確かにお粗末な話だ。しかし、次に聞いた言葉こそ問題だった。

「それで、ルイズ様も同じじゃないかと思うんです」

刹那、ルイズは光を睨みつけるが、光は慌てて続けた。

「いえ、ルイズ様がメイジじゃないといっているんじゃないですよ

!？」

「ただ、と光は続ける。

「あの失敗、誰もが原因が判らない様な特異な代物なら、失敗の一言で済ませていいものではないと思うんです。もっと大きな視野で見ないと、正しい答えに辿り着けないんじゃないかって思うんです」

ワタシの相棒みたいに、と締めくくり、光は一礼した。

「そうかもしれない」

そこで、タバサが声を発すると、ルイズのすぐ前までやってくる。無表情な彼女に間近で見上げられ、少したじろいだ。

「な、なに？」

「私も、貴方の爆発を、ただの失敗としか見ていなかった」

怒りが胸の内ですくもつ。判っていたことではあるが、面と向かって言われてはやはり悔しい。

「悔しい」

「……は？」

しかし、次の一言に、間の抜けた声が出た。

「貴方の爆発の特異性に、何も気付けなかったことが悔しい」

「そ、そう……」

続いた言葉に納得いくが、どうにも調子の狂う少女だ。無表情で、何を考えているのか掴めない。

「これだけはいえる」

「？」

「不本意かもしれないけど、貴方は爆発という特異な性質を操れる。少なくとも、ゼロじゃない」

顔が熱くなるのを感じた。真顔でそんなことを言われるとは、思ってもみなかったのだ。

ゼロじゃない……

先程シルフィードに言われた以上に説得力があるその言葉に、ルイズの鼓動は激しく踊る。

「あ、ありがとう、タバサ……」

「思ったことを言っただけ」

礼はいらないと言いたいのだろうか。口数の少ない級友に、くすりと笑いが漏れる。

「なら、私もいいたいことを言っただけよ」

次いで、ルイズはタバサの使い魔たちの方へ振り返った。

「貴方たちにも、一応言っておくわ」

もう躊躇いはない。自分の魔法のことを考えてくれ、自分の魔法とどう向き合うべきか、道を示してくれた者たちだ。これで恩を感じなければ、ヴァリエールの名が廃る。

「貴方たちの言葉、参考になったわ。ありがとう」

言いながら、スカートの上端をつまんで、一礼する。すると、使い魔3体は呆けたように沈黙した。どういうわけか、動きもせずこちらを見返してくる。

それがなんだか恥ずかしくなってきた、ルイズは慌てて言い放つ。

「つ、使い魔に対して貴族が礼を言うなんて、普通はありえないんだからね！ 感謝しなさい！」

「感謝に対して感謝というのは変」

それに対し、涼しい声でタバサがつっこみ、ルイズは顔を真っ赤にした。

「も、もうすぐ次の授業が始まるわね！ 急ぎましょう！」

誤魔化すように叫ぶと、ルイズは逃げる様にその場を後にする。

正に、脱兎の勢いで。

そして、次の教室へと急ぐ中、ルイズはタバサのことを考えていた。

タバサ。青い髪をした、小柄な自分よりさらに小柄なクラスメイ卜。奇妙な名前で、家名すら知らない同級生。いつも無表情で、無口で、大抵本を読んでばかりいる、不思議な少女。

そして、自分と関わろうとはしなかったが、莫迦にすることもなかった、ほとんど唯一の生徒。自分を、ゼロじゃないと言ってくれた、初めての級友。

「タバサ、か……今度、また話してみようかな……」

ルイズとタバサが、互いを意識した瞬間だった。

〈続く〉

〜第8話 ゼロと雪風の邂逅〜
(後書き)

2011/08/08 改行修正

〜第9話 勇気と闘いと覚醒と（前編）〜

「ふぁーあ……」

午前の授業が全て終わると、才人は大きく欠伸をした。

「ほとんど寝てたな、お前」

「結局、起きてたの最初の授業だけだったね」

それに、ムジユラの仮面とナビィが呆れた声を掛けてくる。

「先生たちが、苦虫を噛み潰した顔をしてた」

更には、ご主人様たるタバサにまで言われてしまった。流石にはつが悪くなってきて、誤魔化しのように頭を掻く。

「やっぱり、井戸で顔洗っただけじゃ目覚めきれなくてさ」

あいまいな笑みを浮かべながら、才人は続けた。

「魔法の授業なんて面白そうだし、俺もできたら起きてたかったんだけど」

溜息を一つつく。地球では受けられるはずがない、魔法に関する学問。好奇心の強い才人としては、それを寝過してしまったのは結構な無念だった。

タバサは、そんな才人を呆れた風に一瞥するが、特に言及はしなかった。無関心な様子に寂しいものはあるが、眠い理由を聞かれても困るので今はありがたい。

「まあ、お陰で午後は寝ないで済みそうだよ」

「また寝るようなら、ニワトリの声でも聞くか？」

皮肉っぽくムジユラの仮面が言えば、ナビィがくすくすと笑う。

「なんだよ、ナビィまで笑うことないだろ」

無然とする才人に、ナビィは答えた。

「ごめんね。ちょっと思い出しちゃって」

「？ 何を？」

未だ羽を小さく震わせながら、青い妖精は続ける。

「サイトの名前、多分コジローと同じ系統の名前でしょ」

「ああ……って、ナビィの世界にもそういう名前の人がいるのか？」

異世界にも、日本風の名前の人物がいるらしい。そう思うと、外国で日本のものを見る様な感慨が湧いてきた。

「ううん、ヒトじゃなくてニワトリ」

「なんでだよ！」

かと思いきや、続いた言葉にがっくりとくる。その一方で、タバサが何かを考える様な仕種で才人を見やる。

「……ニワトリにつける名前？」

「だから、違うって！」

妙な誤解をするタバサに、日本人を代表して否定した。すると、タバサは納得してくれたらしく、小さく頷く。その動作はなんとなく小動物を思わせ、少し心が和んだ。それからすぐに、彼女がノートに何事かを書いているのは、気にしないことにしよう。

「まあ、とにかく昼食だな」

ずっと寝ていたせいか、それほど空腹感はない。しかし、厨房の方へ近づくと程に香ってくるかぐわしい匂いに、食欲が湧いてくるのを感じた。

「ヒラガ、オレは別行動させてもらっぞ」

「は？　なんで？」

怪訝とムジユラの仮面を見返す。

「オレはどうせ飯は食わないからな。昼休み中は、ここを色々見て回りたい」

「ワタシも一緒に行く。ムジユラと一緒にで、ご飯食べないし」

ナビィにまで別行動を申し出られ、才人はばやいた。

「おいおい、俺一人かよ」

これまでずっと使い魔3名で行動を共にしていたので、少し寂しくなってくる。目敏くそれに気がついたムジユラの仮面が、意地悪気な光を眼に宿した。

「なんだ？ 心細かいか？」

「な、誰がつ」

凶星を刺され、才人は思わず言い返した。負けず嫌いの性である。それにナビィがまたも小さく笑い、タバサまでもがぼつりと呟いた。「寂しがり屋」

「違うつての、つたく」

さつきから、からかわれっぱなしだ。なんとなく面白くなくて、つい言い返すように口を開く。

「大体、寂しがり屋ったらタバサだって」

「？」

そこまで言うと、才人は慌てて言葉を切った。昨夜、両親を呼びながら泣いていた、タバサの寝言。あれを聞いていたと知られたら、かなり面倒だ。

「な、なんでもないなんでもない！ ほら、タバサはあっちの貴族用の食堂だろ！ 俺はあっちだから！」

誤魔化し混じりに、タバサの背をアルヴィーズの食堂へと押し出す。そして、自分は逃げる様に厨房の方へと駆けだすのだった。

「こんにちは」

「あ、サイトさん！」

厨房のドアをくぐると、真っ先にシエスタが気付いてくれた。洗い物をしていた手を拭い、笑顔で駆け寄ってくる。

「よ、シエスタ」

「こんにちは、サイトさん。ナビィさんとムジユラさんは？」

「ああ、あいつらは飯食わないからさ。別行動だよ」
そうなんですか、とシエスタは頷いた。

「昼飯もらえる？」

「はい、用意できていますよ」

言うなり、シエスタは才人をテーブルへ案内してくれた。そこには、焼きたてのパンと熱々のシチューが、香ばしい芳香を立ち昇らせている。

「お、昨日と同じシチューか」

「ええ、お嫌でしたか？」

「いや、全然。美味そうだよ」

言うが早いか、才人は席に着いた。次いで、手を合わせた「いただきます」もそこそこに、スプーンを手にしてシチューを口にする。「うん、やっぱり美味しい！」

一口飲むや否や、感嘆の声を上げた。昨日夕食に出されたものと少し味が違う気がするが、それでも十分に美味だ。

「ふふ、よかった」

すると、何故かシエスタが照れたように笑う。

「実は、今日の賄い、私が担当なんです」

「え？　じゃあ、このシチュー」

「私のお手製ですよ」

言って、シエスタは悪戯っぽく胸を張ってみせた。そうすると、清楚なメイド服の下にあるだろう、彼女の二つの丘が強調されてしまふ。健康な青少年である才人は、それを見逃したりはしなかった。

シエスタ、結構着やせするタイプ？

1人眼福を得ていると、シエスタが首を傾げた。

「サイトさん？」

不思議そうに自分を見つめる彼女に、ようやく我に返る。

「いや、なんでもないよ！」

言って、食事を再開する。なにか、さっきから誤魔化してばかりだ。少し自己嫌悪でへこんでいると、シエスタが声を掛けてくる。

「サイトさん、随分綺麗な食べ方をされるんですね」

「ん？ そう？」

聞き返してみれば、黒髪のメイドは頷いてみせた。

「はい、なんだか、貴族のご婦人みたいな食べ方です」

「ゴフジン……男じゃなくて？」

「はい、貴族の男性の方は、食事は自由に食べておられますし」

へえ、と才人は相槌を打つ。才人としては、それほど行儀良くしていたつもりはなかったのだが。ただ、西洋風のこの国では、スーブやシチューの様な汁ものは、音をたてたらまずいだろうと気を付けていただけだ。

しかし、シエスタの話からして、こちらではそういう食事のマナーがあまり重視されていないらしい。妙に気張っていた自分が、少し莫迦らしくなった。

「あ、いえ！ サイトさんの食べ方が変だっていうんじゃないんですよ！？ どっちかっていうと、行儀よく食べれてすごいなって思っていますし！」

「あはは、ありがと」

慌ててフォローするシエスタに苦笑すると、ふと気がついた。

「あれ？ シエスタや他の人らは？ 食べないの？」

見れば、テーブルに着いているのは才人だけだ。他は、誰も昼食をとっていない。そういえば、朝食や昨日の夕食も食べていたのは自分だけだった気がする。

怪訝としていると、シエスタが苦笑を洩らした。

「私たちはまだ仕事ですから。食事に入れるのは、貴族の方々が食事を終えられてからです」

「そうなのか」

言われて、納得する。食事時といえば、厨房が最も忙しい時間帯のはずだ。コックたちは追加注文やら何やらに対応しないといけないだろうし、シエスタたちメイドは配膳で忙しいだろう。調理場の

方を見てみれば、やはりマルトーたちがせわしなく動き回っていた。喧騒をたてているわけではないが、その光景は戦場と例えて差し支えあるまい。何故今まで気付かなかったのかと、才人は軽く自分に呆れた。ムジユラの仮面に、鈍いといわれても仕方がない。

「それでは、私も仕事に戻りますね」

「あ、うん」

答えるものの、才人はなんとなく居心地が悪くなった。日本人的真理というべきか、人が働いている傍で休んでいると、どうも落ち着かないのだ。

「シエスタ！」

だからだろう、気付けば彼女の背に声を掛けてしまっていたのは。

「はい、どうしました？」

「あのさ、これ食い終わったら、何か手伝うよ」

振り返ったシエスタにそう言えば、メイドの少女は不思議そうな顔をした。

「いえ、サイトさんは使用人じゃありませんし、そんなことされなくても」

「んー、まあ、そうなんだけどね。なんとなく、皆が働いてる中、飯食ってるってのも……」

言いながら、自分の言葉が変わであることを自覚していく。本来、厨房で働いているわけではない才人が、シエスタたちに気兼ねする道理はないのだから。しかし、理屈と感覚は別だ。

この微妙なそわつきをどう伝えたものかと才人が悩んでいると、不意にシエスタが小さく笑う。

「今朝のことといい、サイトさんは親切ですね」

「え？ いや、そんな」

「判りました。それじゃあ、お言葉に甘えちゃいましょう」

「お、おう、任しとけー！」

とりあえず、胸を軽く叩いてやる気表現。それに、シエスタはお願いしますね、と微笑む。そして、一礼の後に去っていく彼女の背を見送ると、とりあえず食事を再開することにした。

「んで、ケーキ配りか」

ケーキの乗った盆を持ちながら、才人は独りごつ。才人に任せられた仕事は、シエスタのアシスタントだ。才人がケーキを配り、シエスタがお茶の給仕をしている。

シエスタがお茶を注ぐ横に立ちながら、才人は軽く周りを見てみた。そこで、シエスタの言葉が正しかったことを知る。

貴族の、生徒たちの食事は、才人が思っていた程優雅なものではなかった。女子の方はまあまあ綺麗に食べているものの、男子の方はこれといったマナーを感じさせない。普通に食器で音を立てているし、こぼしたりもしている。ぶつちやけひどかった。こちらの世界では、テーブル・マナーがまだ確立されていないのかもしれない。軽く呆れていると、少し離れたテーブルにタバサが座っているのが見えた。キュルケが時折話しかける横で、ほとんど黙々と料理を口に運んでいる。

ご主人様にはサービスとか、やってもいいもんかな？

盆の上の、心持ち大きいケーキを見ながら、そんな考えが浮かんだ。

「うわっ!？」

「あっ、すみません!」

そうやって気を散らしていたのがよくなかったのだろう。手が滑って、ケーキをテーブルに落としてしまった。更にいえば、そこから飛び散ったクリームが、直前の生徒の服を汚してしまった。

「何をするんだ、平民! 貴族の衣を汚すとは」

憤慨する生徒に才人は頭を下げようとしますが、その前に生徒が何かに気付いた様な顔をする。

「ああ、よく見れば、雪風が召喚した平民か？」

嫌味っぽい笑みを浮かべたその生徒は、いやらしい声で才人に聞いてきた。

「はい、そうですけど」

小莫迦にした様な言葉に少しむっとするが、悪いのは自分の方なので素直に応える。すると、その生徒は嘲りの態度を強めた。

「ははは、まったく。平民を召喚するだけでもお笑い種なのに、配膳も満足にできない無能が使い魔というわけだ」

眉間にしわが寄っていくのを感じる。失態を犯したのは確かだが、ここまで侮辱することはないだろう。その上、タバサのことまで莫迦にしているのが余計気に入らない。

「他の使い魔も変な仮面に妙なホタル。メイジのパートナーたる使い魔を呼び出す神聖な儀式だというのに、3体も呼び出すなんて真似をただけでは飽き足らず、呼び出したものはおかしなものばかり。全く、何を考えているのやら」

それはタバサのせいじゃないだろ！

思わず、そう叫びかけた。すんでにこらえられたのは、心配そうに自分を見るシエスタの顔が見えたからだ。それとともに、どうやらこの生徒は、自分というよりもタバサに悪意を抱いているらしいと気が付く。

このまま黙っていていいのか、主人への悪口くらいは何か言い返すべきじゃないか、と才人は悩むが、次に発せられた言葉に、全てが吹き飛んだ。

「所詮、親の顔も知らないだろう庶子のやることというわけだ」

その次の瞬間、その生徒の顔面に赤い液体がぶちまけられる。

「てめえ、今何て言った」

次いで、ゴブレットを片手にした才人が口を開いた。その声の低さは、自分でも驚くほどだ。

一方、ワインを顔いっぱいに浴びたその生徒は、しばらく呆然と
していた。しかし、やがて何が起きたのか理解したらしく、激昂す
る。

「貴様！ 今、自分が何をしたか判っているのか！？」

椅子から立ち上がって睨みつけてくるが、才人は全く怯まない。
ケーキの盆をテーブルに置くと、皮肉っぽく肩をすくめてみせた。
「莫迦みたいに大口開けてのたまってるから、のどが渴いたんじゃ
ないかと思っつてね」

挑発するように、軽口をたたく。基本的に負けず嫌いな才人は、
気に入らない相手にはつい喧嘩腰になってしまふことが多いのだ。
悪い癖だとは思っているが、今この瞬間にはありがたい。

片や、相手はその反抗的な態度に一瞬訝しむが、すぐに大仰に腕
を広げて呆れた風に言った。

「流石はあの庶子の使い魔だ。貴族に対する礼儀をまるで心得てい
ないとは」

「タバサは関係ねえだろうが！」

怒鳴るが早いか、相手の胸倉に掴みかかる。それだけ、この生徒
の言葉は許せない。相手の方も、乱暴に才人の手を振りほどき、眼
を怒りで爛々と光らせる。

「どうやら、少し礼儀というものを手ほどきする必要があるようだ」

気取った風に髪を掻きあげ、嫌味な生徒が杖を突きつけてきた。

「少し躡ヒツをしてあげよう。君の主では、満足にできそうにないだろ
うしね？」

相変わらずタバサへの侮辱も含める相手に怒りが募るが、今はと
りあえず黙っておく。喧嘩を売ってきたというのなら、好都合だ。
思い切り殴り飛ばしてやる。

「ここでやるのか？」

「ふん、伝統あるアルヴィーズの食堂を、平民ごときの血で汚せる

か

鼻で笑いながら、相手は杖を懐にしまった。まずワインまみれの顔拭けよ、と少し思ったのは内緒だ。自分がぶっかけたのだが。

「ヴェストリの広場でやるとしよう」

皮肉気に才人を一瞥すると、その生徒は踵を返し、食堂を出ていった。

「おい、なんだか面白いことになったな！」

「昼休みは決闘ショーだ！」

「無礼で無知な平民ね、懲らしめられればいいわ」

一拍おいて、周囲がざわめきだす。そこから感じ取れるものは、好奇や興奮といった感情ばかりだ。自分の喧嘩が見世物扱いされて癩しかくに障るが、それはまあいい。今は、あの嫌味きらみつたらしい男を殴るのが先決だ。

才人は喧嘩相手の後を追うべく、意気も高らかに食堂を出ようとする。しかし、不意に誰かが腕を掴んできた。見れば、シエスタが青い顔で自分を見つめてくる。

「こ、殺されちゃう……」

「え？」

言いながら、いやいやをするようにメイドの少女は首を横に振った。その瞳には、うっすらと涙さえ浮かんでいるようだ。

「行ったら、サイトさん、殺されちゃいますよ！」

先程よりも強い声で、シエスタは訴えてくる。それを聞くと、自然と笑みが浮かんだ。

「いや、大丈夫だよ」

「大丈夫なんかじゃありません！」

震えながらも、シエスタが叫ぶように言う。

「貴族を本気で怒らせたら……」

尚も自分を止めようとする彼女に、今度は苦笑が漏れる。シエスタの様な可愛い女の子が心配してくれるというのは嬉しいが、幾ら

なんでも大げさすぎる。

あんないかにも温室育ちといった風情の相手に負ける気はしない。才人もそんなに強いわけではないが、それでもあんな軟弱そうなおぼんが自分よりも強いとは思えなかった。

以上、自身の主観では負ける要素がないため、才人に喧嘩を止める意思是ゼロだ。その旨をシエスタに伝えたと、今度は何故か恨めし気な眼で見られてしまった。

「サイトさんの莫迦っ！」

次いで、耳許で思い切り怒鳴られてしまう。耳鳴りがキーンと響く中、シエスタは何処かに走って行ってしまった。

「なんなんだよ……」

耳を叩きながらぼやいていると、今度は小柄な影が自分の前に立ちふさがる。

「ん、タバサ？」

呼んだ通り、そこに立っているのはタバサだ。隣には、キュルケも立っている。

「見てた」

「見てたつて、さっきの？」

聞いてみれば、タバサはこくりと頷いた。

「行っちゃダメ」

「なんだよ、タバサまで」

今度は、主にまで制止を受ける。自分はそこまで弱く見えるのだろうか。可愛い女の子2人に侮られ、才人は苦笑を通り越して慥然とする。

「貴方では勝てない」

「いや、勝てるよ、あんなひよろそうなの！」

そんな怒りも何処吹く風と続けるタバサに、思わず語気を強めた。すると、キュルケが呆れた様に溜息をつく。

「サイト？ 自信があまりみたいだけど、どう戦うつもり？」

才人は首を傾げた。

「どうやってつて、やっぱり先手必勝っていうか、一気に殴りかかるつもりだけど」

そう答えると、キュルケはますます呆れたとばかりに肩をすくめた。

「サイト、私たちは何？」

「はあ？」

「いいから答えて」

「いや、魔法使いだろ……あっ!？」

言ってみて、才人ははっとする。すると、目の前の2人はまた溜息を零した。

「判るでしょ？ 私たちはメイジ、もちろんさっきのあいつもね。

当然、決闘には魔法を使ってくるわ。魔法を使えない貴方に、勝てるのかしら？」

言われて才人は口をつぐんでしまう。頭に血が上って、そのことを失念していた。メイジの魔法は空を飛ぶ“フライ”や錬金、ディテクト・マジックくらいしか知らないが、それでも攻撃的な魔法は色々あるだろう。さもなければ、シエスタがあそこまで怯えるはずはない。

不安が湧いてくるのを察してか、タバサがまた口を開いた。

「謝った方がいい。それで解決する」

「いや、でも……」

反論しようとするも、タバサに見つめられると言葉が出ない。自分が不利だからといって、あんな相手に頭を下げるのは嫌だ。そう言いたいのだが、何やら自分を見る青い瞳が放つ威圧感がそれを許さなかった。その上、考えてみると元々は自分が悪いのだ。

謝った方がいいのかという考えと、負けたくないという想いが葛藤し、声を出さずに出せずにいる。そうして口をもごもごさせている

と、やがてタバサの次の言葉が耳に届いた。
「私も謝る」

瞬間、才人は目を見開く。

「ま、待てよ！　なんでタバサまで謝るんだよ！」

「貴方だけでは多分納得しない。私も謝れば気は済むと思う」
淡々と言うタバサ。その瞳には、何の感情も感じられない。しかし、才人にはタバサの言葉が信じられなかった。

俺のせいで、タバサが謝る？　あんな奴に？

それを考えると、才人は頭がすつと冷めていくのを感じた。同時に、この上なく熱くなっていくことも。

「やっぱ、俺行くよ」

途端、タバサから送られる視線が迫力を増した。よくも表情を動かさずに鋭さを増せるものだ。

変なことに感心している間もなく、タバサが聞き返してきた。
「どうして？」

無機質な、それでいて冷たい声が鼓膜を震わす。思わず息を飲むが、それでも才人は言い放った。

「あいつは、タバサを庶子って言った」

それが答えだとばかりに、才人はタバサを真っ直ぐに見つめ返す。

“庶子”　それが正式な夫婦から生まれたわけではない子どもを指す言葉であることくらいは、才人も知っていた。だからこそ、その発言が許せなかった。

才人は、タバサのことを知らない。会ったばかりの、この小さな少女のことを、何一つ。何処で生まれ、どんな風に育ってきたのか。どんな暮らしをして、何をしてきたのか。

そして何より、どんな家族と過ごしてきたのか　才人は、全く知らないのだ。

けれど、タバサは昨夜泣いていた。父のことを思いながら、母のことを呼びながら　両親のことを夢に見ながら、泣き続けていた。

そんなタバサを、あいつは庶子って言った……！

才人は、タバサのことを知らない。本当に庶子なのか、違うのか、それすらも。しかし、知っていることも確かにある。タバサが、夢に見る程、両親のことを考えているのだということ。昨夜見たあの涙は、両親のために流した涙であることを。

それを知っているからこそ、知ったからこそ、あの貴族から逃げるわけにはいかない。

「確かに俺は魔法使えないよ」

言いながら、才人はタバサの頭を撫でる。

「だけど、絶対に勝つから。心配するなっ」

きっぱりと言い切り、小さく笑ってみせた。確かに、魔法が使える相手の方が有利かもしれない。けれど、どっちに分があるかは、この際関係なかった。重要なのは、自分があの貴族を許せないということだ。それさえはつきりしていれば、不思議と不安は消えていった。ムジユラの仮面による力の昂りを経験し、気が大きくなっていることも、その一因だろう。

一方、そう言われたタバサは、無言のまま才人を見据えてきた。

その様子は無表情ながら、何処か戸惑っているようにも見える。

「好きにして」

ややあつて、小さな呟きが聞こえてきた。それにキュルケが驚き、タバサに振り返る。

「おう！」

一方で、主の許可を得た才人は力強く答えて見せた。次いで、拳を握ってヴェストリの広場へと向かう。

自分の小さなご主人様を侮辱した相手に、その償いをさせるために。

「あつ、ちよつと、サイト！ ……行っちゃったか」

キュルケが言う通り、サイトは既に食堂を後にしていた。それを見たとれば、キュルケが気遣わしげな目を向けてくる。

「タバサ、いいの？ 相手はラインのメイジよ、サイトに勝ち目があるとは思えないけど」

心配そうな親友の声に、短く答えた。

「危なくなれば止める」

そう言つと、キュルケはまた肩をすくめた。

そう、キュルケの言う通りだ。サイトが喧嘩を売つた相手は、一応ラインクラスのメイジ。平民の、それも武術の心得なんて何もないだろうサイトに、勝算があるわけではない。あの勝つという言葉も、何の根拠もない戯言にすぎないはずだ。

でも……

それなのに、タバサはそうだと断じることができなかった。状況を考えて、サイトが勝てる確率は無に等しいのに、何故かそう言い切ることができなかった。

どうして……？

自分に問い掛けてみる。自分も、勝ち目のない戦いに身を置く身だから？ だから勝利を信じる彼の姿を、否定したくない？ 違う気がした。それもあるのかもしれないけど、きっと大事なのはそこじゃない。では、一体何故なのだろうか。

答えを出せないまま、我知れず髪へと手を伸ばす。さっき、サイトが撫でた辺りの髪を。

「……」

無言のまま、髪をいじる。その行為に、何か意味があるわけではない。ただ、それを直前に触れた者の温もりが、微かに残っている

気がした。

「諸君、決闘だ！」

才人がやつてくると、相手の貴族はそう宣告した。途端、周囲のギャラリイたちが大いに沸く。昨日、ムジュラの仮面の力を試したヴェストリの広場は、決闘の噂を聞いた生徒たちで溢れていた。あの時の淋し気な雰囲気とは、大違いだ。

ちなみに、昨日作ったクレーターは、ちゃんと埋め直してある。

そして、観客たちが作る円の中で、ついに才人は相手と対峙した。

「おやおや、遅いから逃げだしたかと思ったけれど、どうやら逃げる知恵もなかったようだね」

相変わらず毒を吐く相手に、才人は負けじと言い返した。

「待たせて悪いと思う程の相手でもねーし」

吐き捨てる様に言っただけならば、相手は眉をひそめながら杖を取りだす。

「つくづく口が減らないな。これだから下賤な平民は」

ぶつぶつ言いながら、嫌味な相手は大仰な仕種で得物を振って見せた。

「平民ごときに名乗ってやるのもどうかと思うが、これも作法だ。

僕の名はヴェリエ・ド・ローヌ。君に驍を施してあげよう」

言うが早いか、相手の生徒、ヴェリエの方から、徐々に風が吹き始めた。ねっとりした感じの、嫌な風だ。それを受けながら、才人はルーンの刻まれた左手を掲げ、同じく名乗りを上げる。

「雪風のタバサの使い魔が一、平賀才人！ 行くぜ！」

（続く）

〜第9話 勇気と闘いと覚醒と（前編）〜（後書き）

2011/08/08 誤字修正

2011/08/14 誤字修正

〈第10話 勇気と闘いと覚醒と（中編）〉

シエスタは廊下を駆けていた。スカートのすそを掴みながら、学院の中を走り続ける。埃を立てながら足を駆る、行儀悪い姿。そのはしたない様子は、普段の彼女であればありえないものだ。

それだけ、今シエスタは焦っていた。今朝から仲良くなった使い魔の少年、サイトが、貴族と決闘することになったのだから。平民にとって、魔法を使う貴族は絶対的な存在。杖の一振りでも不可能を可能にしてしまう、別格の人種である。そんな相手に、自分と同じ平民であるサイトが勝てるわけがない。

なのに、サイトさんたら！

それにもかかわらず、サイトは自分の制止を全く聞き入れなかった。なんの根拠があるのか、大丈夫だといって聞く耳を持たなかった。

このままでは、大変なことになってしまふ。貴族と本気で戦ったら、怪我することはまず間違いない。否、それどころか、殺される可能性の方が高いのだ。

それに、シエスタができることなんて何も無い。シエスタもサイトと同じ平民。貴族に逆らうことなんて不可能なのだから。

だけど、ムジユラさんたちなら！

しかし、あの少年と共に召喚された者たち、サイトの使い魔仲間たちならば、話は別だ。特に、ムジユラの仮面というあの使い魔。被った相手を魔法が使える様にしてくれるらしい彼ならば、きつとサイトを助けてくれる。

そう考えたからこそ、シエスタは一心不乱に走っていた。何処にいるのか判らない仮面と妖精のコンビを、必死になって探し続ける。

「しかし、広い学院だな。本当に施設全部きっちり使っているのか？」

「ホントだね、掃除しなきゃいけないシエスタたちは大変そう」

そうして学院中を探索すること約一刻、ようやく廊下の向こうに見知った影が2つ見えた。

「ムジユラさん！ ナビイさん！」

そちらへ向かいながらも呼び掛けると、2名はこちらに向き直ってくる。

「噂をすれば、だな」

「Hello、どうしたのシエスタ？ そんなに慌てて」

不思議そうにする両者に追いつくと、シエスタは息を切らせながら答えた。

「さ、サイトさんが……」

「サイトが？」

「どうかしたのか？」

体ごと首を傾げる2名に、荒い息のまま叫ぶ。

「き、貴族の方と、決闘を！」

「ええっ!？」

「何やってるんだ、あいつは」

驚くナビイと呆れるムジユラの仮面に、シエスタは縋りついた。

「ですから！ ナビイさん、ムジユラさん！ サイトさんを助けてあげてください！」

「うん、判った！」

「せいぜい遊ばせてもらうか」

答えたムジユラの仮面が視線を向けると、何かの魔法を使ったのだろう、廊下の窓がひとりでに開く。

「シエスタ、決闘は何処でやってるの!？」

「はい、ヴェストリの広場です！」

ナビイの質問に答えると、2名の使い魔たちは互いに顔を見合わ

せた。

「昨日行った広場だね。急ごう、ムジユラ！」

「そうだな、行く前に終わっていてもつまらない」

言うが早いのか、ナビィが真つ先に窓から外へ飛び出していき、ムジユラの仮面もその跡を追おうとする。その背中に、シエスタは呼び掛けた。

「待って、私も連れて行ってください！」

サイトには今朝の洗濯や、配膳の申し出等、色々と親切にしてもらった。ムジユラの仮面たちが助けに向かうとしても、サイトの安全を確認してからでなければ安心できない。

「ふうん？」

すると、ムジユラの仮面の眼に何やら意地の悪そうな光が宿った。かと思えば、シエスタの体が俄「にわか」に浮き上がる。

「なら、ご希望に沿うようにしようか」

面白がっている様な声音で言うムジユラの仮面に、不安が湧いてくる。その不安の通りか、シエスタの周りに夕焼け色の靄「もや」のようなものが立ち昇りだした。その靄は、凄まじい速さで窓の外へと伸びていく。よくよく見てみれば、その靄は動いているらしく、川のように外へと流れていつている。

「あ、あのう、ムジユラさん……?」

「さて、急ぐぞ」

シエスタの不安も何処吹く風とばかりに、ムジユラの仮面自身もその靄の中に入ってくる。

「あの、どうするんですかっ!？」

「向かうだけさ、広場へとな」

何か妖しいものの籠「こも」った声で告げられると、浮き上がった体が動くのを感じた。

「っ、きゃあああ!?!」

その次の瞬間、もの凄い加速がシエスタに襲いかかる。とんでもない力に引つ張られる様な感覚に、思わず悲鳴が飛び出していた。視界も定まらない程の高速に目が回りそうだった。

感じたこともない速度に怯えていると、やがてそれは終わりを迎えた。

「着いたぞ」

ムジユラの仮面の言葉が耳に届くと、シエスタの体が急に止まる。すると、周りの靄が霧散して、シエスタの体が地面に落ちた。

「痛っ！」

臀部から落とされた痛みでんぶに小さく悲鳴を上げると、シエスタはムジユラの仮面に抗議の眼を向ける。

「いたた、ひどいです、ムジユラさん！」

「ん？ リクエストには応えているはずだが？」

悪びれずに言うムジユラの仮面に、シエスタはサイトが彼を性悪と評していたことを思い出した。しかし、すぐにそんな場合ではないことを思い出す。

「そうだわ、サイトさんは」

立ち上がってみると、シエスタは周囲に学院の生徒たちが輪を作っていることに気がついた。そして、ムジユラの仮面が着いたといった通り、ここがヴェストリの広場であることも。

ここ、ヴェストリの広場で、しかも人垣の真ん中……ってことは！

「がはっ！」

状況を把握した瞬間、シエスタの背後から苦し気な声が聞こえてきた。次いで、すぐ後ろの地面に、何かが叩きつけられた様な音が響く。

「ぐ、……っそつたれ……」

慌てて振り返れば、果たしてそこには件の少年、サイトの倒れた姿があった。

「サイトさん！」

「サイト！」

先に広場へ来ていたのだろう、ナビィと声を揃えて倒れたサイトの許へ跪く。見れば、彼は悲惨な有様だった。顔の半分は紫色のあざに覆われて、片目が腫れの中に埋まってしまっている。頭も打っているのか、それとも切れているのか、まだ固まっていない血の跡が目についた。鼻からも血が滴り、荒い息をついている口の中さえも鮮血の色に染まっているのが見える。着ているものも酷い状態だ。あちらこちらが裂けていて、そこから生々しい切り傷が覗き、青い服に赤茶けた染みを作っている。

傍から見て、完全な満身創痍まんしんそういだった。

「サイトさん、大丈夫ですか!？」

「くっ……」

シエスタの声が聞こえているのか、いないのか、サイトが苦しそうな声を上げる。そんな状態であるにもかかわらず、彼は苦悶の声と共に起き上がるうとした。

「さ、サイトさん!？ 無茶しないでください！」

慌ててそれを押しとどめようとすれば、サイトは開いている方の目でシエスタを見てくる。

「シエスタか……かつこ悪いとこ、見せちゃったな……」

黒髪の少年の言葉は、そんなことだった。声の感じは苦笑じみていたが、腫れた顔では表情として表れない。

「そんなこと言ってる場合ですか！ 早く手当てしないと！」

「そつだぞ、平民」

聞こえてきた声に目を向ければ、サイトの決闘相手であるヴィリィ・ド・ロレーヌが、嘲笑の滲んだ眼でこちらを見据えていた。

「全く、勝ち目なんて全く無いというのに、不様な真似を続けて。どうして素直に自分の無力を受け入れられないのかね？」

傲慢な調子で、溜息を吐かれる。これほど痛めつけた相手に対し、

そんな侮蔑的な言葉しか放てないヴィリエに、シエスタは激しい嫌悪を抱いた。同時に、これだけサイトを圧倒しながらも、自身は全く無傷だという、貴族に対する恐れ of 感情も。

嫌悪と恐怖の感情で板挟みになり、動けずにいると、サイトがシエスタの手を振り切ってしまう。

「言ってる……てめえの風が退屈なんで、眠くなっちゃまった、ただよ……」

そんな強がり言いながら、サイトは立ち上がった。そこへ、面白がっている様な声がかかる。

「そんな様で、よくも言えたものだな」

ムジユラの仮面だった。仮面の使い魔は、同僚である少年をじろじろと見る。

「邪気は抜けても、やはりオレもモンスターか。流血と苦悶を前にすると、胸が躍る」

楽しそうに言うムジユラの仮面に、サイトは赤いつばを吐きながら言った。

「悪趣味な奴……」

「ヒヤハハ。まあ、そう言うな。それより、早く被れ」

オレも遊びたいんだ、と急かすムジユラの仮面に、サイトは言い放つ。

「いやだ」

「なに？」

「ええっ!？」

「サイトさん!？」

サイトの返答に、ムジユラの仮面、ナビィ、シエスタは、三者三様に疑問の声を上げた。

「これは、俺の喧嘩だ……ムジユラは、関係ないだろ……」

途切れ途切れに、だがはつきりと言うサイトを前に、ムジユラの仮面はその目を真っ直ぐに見つめる。

「本当に……いいんだな？」

念を押すムジユラの仮面に、サイトは頷く。すると、ムジユラの仮面がまた楽しそうに言った。

「ヒラガ、昨日言ったことを覚えているか？」

「ん、なんだよ……？」

サイトが聞き返せば、何気ない調子でムジユラの仮面は答えた。

「使えない道具は、タダのゴミでしかない」

傍で聞いていたシエスタは、その言葉にぞっとする。言葉の内容もさることながら、そんな残酷な台詞を平気で言えるムジユラの仮面に背筋が震えた。

「その意味が判るか？」

そんなシエスタの怯みに構うことも無く、ムジユラの仮面は続ける。

「お前の心身、あの小僧に勝つために使い、それができないというのなら、お前の命、その程度のゴミだったということだ」

それは極論すぎるとシエスタは思ったが、そんなことを平然と、その上面白そうに言うムジユラの仮面に啞然とし、言葉にならない。

一方、その挑発めいた言葉を受けたサイトは、つまらなそうな声を出す。

「あの冗談みたいな台詞、こんな場面で使いやがって……」

「気に入らないなら、ゴミじゃないと証明するしかないな」

見下す様な言われ方で、サイトがますます反抗心を見せた。

「ああ、してやるうじゃねーかよ……」

その返事を受けると、ムジユラの仮面の眼が楽し気に光る。

「あの子鬼のように失望させるなよ、被り手」

そう言うと、ムジユラの仮面は思い出したように付け加えた。

「そういえば、ヒラガよ」

「まだ、なんかあんのか……？」

サイトが訝しむと、ムジユラの仮面の声の質が変わる。

「お前には、オレが優しく見えるのか？」

「え……？」

「せっかく出してやった助け船を蹴られ、それを許してやるほどに、オレが優しく見えるのか？」

その声に、今度こそシエスタは戦慄した。否、ナビイも、サイトも、一様に竦み上がっている。ムジュラの仮面の笑い声　面白がつている様な陽気な声のはずなのに、それには全く温度が感じられなかった。軽い調子で言われているにも関わらず、異常な程に暗いものを感じさせた。

笑いながらも、周囲から熱を奪い、暗がりへ引き込む、妖しの声。この世ならざる音声に吞まれ、シエスタたちは息も凍るような感覚に襲われていた。

「まあ、どうでもいいことだな」

かと思えば、次に放たれた一言に、温度が戻る。そこで、サイトが腫れた顔に浮かんだ冷や汗を拭った。

「ど、どうでもいいなら、聞くなよ……」

「そうだな、ヒヤハハ……」

上擦り気味の声で返すサイトに、ムジュラの仮面は意外と甲高い笑い方で応える。シエスタは、段々と後悔の念を抱きはじめていた。助けを求める相手を、思い切り間違えたのかもしれない。

「おい、いつまで待たせるんだ？」

そこへ、ヴィリエの苛立った声上がる。そういえば、なんだかんだですっかり無視してしまっていた。その間、まったく攻撃を仕掛けてこなかったのは、余裕があるのか、意外と律儀なのか。

「ああ、休憩終了だよ」

「違う」

サイトがヴィリエに言い放った瞬間、別の声が上がった。誰の声かと思ったら、シエスタの目が青い髪と長い杖を持った影に留まる。

いつの間に来ていたのだろうか、サイトたちの主、タバサがすぐ傍にいたのだ。

「休憩でなく、決闘が終了」

淡々とした声で告げるタバサに、サイトが片目に反抗的な光を灯す。

「なんだよ、それ……」

「言った通りの意味。これ以上は許さない」

言葉の通りか、タバサは鋭い瞳でサイトを見据えた。その眼差しに、直接向けられているわけでもないシエスタまでもが息を飲む。静かでありながら有無を言わせない迫力に、ムジユラの仮面の時とはまた違った寒さが背筋に走った。

一方、それを直に受けているサイトの方は、真っ向からその眼を見返している。

「まだ、決着ついてないだろ……」

「これ以上続けても無駄」

反論するサイトではあるが、タバサは聞く耳を持たない。

「貴方はそんなぼろぼろになりながら、相手に一撃さえ入れていない。これ以上やっても、結果は見えている」

「っ……」

論理的に続けるタバサに、サイトは言葉を返せない様だった。そこまで言うと、タバサの雰囲気微妙に変わる。

「貴方はよく闘った。でも、これ以上無理したら、本当に命の保証はない」

「けどっ……！」

尚も抗議するサイトだが、タバサは首を横に振った。

「庶子と言われたことを怒ってくれるのは嬉しい。だけど、貴方がそこまで無理することはない」

「それだけじゃねえんだよっ！」

俄に響く、サイトの叫び。空気を震わせたその訴えに、一瞬タバサは気圧されたように見えた。

「あんな奴に虚仮こけにされたまま、自分の友達の悪口も取り消せないまま、そんなだせえ

奴のまま、終わりになんてできるかよ……!!」

拳を握りしめながらも、サイトの言葉は終わらない。

「確かに、俺はムジユラみたく、魔法使ったりできない」

出てきたのは、弱気とも思える言葉。しかし、そこにこめられているものは弱さと正反対のそれだ。

「ナビイみたく、感覚共有ってやつも、できない」

痛みのためか、微妙に調子が外れた声。それでも、サイトははつきりと言葉を紡いでいく。

「でも、俺にだって、意地つてもんがあんだよ……!!」

言葉と共に、サイトの瞳に火が灯った。片方しか開けられていない眼が、強い意志で燃え上がる。

「痛めつけられようが、何されようが……、一矢も報いらんねえま、やられっぱなしでいられるか!」

力強い叫び　それを真っ向から受けたタバサは、シエスタの目には動揺している様に映った。相変わらず、立っているのがやっとにしか見えないというのに。言っていることは、まるで子どもの駄々の様なのに。サイトから発せられる気迫は、とても大きく感じられた。

最早、言葉でサイトが止まりそうにないことは明らかだ。タバサもそれが判っているのだろう、どうすべきか悩んでいるように見える。例え、彼女が魔法でサイトの自由を奪ったとしても、それで決闘相手であるヴェリエが納得するだろうか。

そういえば、去年彼女とヴェリエが諍いさかいを起こしたという話を、シエスタは思い出した。無理に中断させようとすれば、かえって話がこじれるかもしれない。

なんともしがたい状況に、シエスタは焦燥感を募つらせることしか

できなかった。それに齒がゆさを感じていると、唐突に拍手の音が聞こえてくる。

驚いてそちらに目を向けてみれば、1人の金髪の少年がこちらに近づいてきているところだった。

学院の生徒たちは、この昼の決闘騒動を、見世物の一種として捉えていた。娯楽も刺激も少ない学院生活の中の、降って湧いたショーを楽しむ感覚で、ここに集まっていた。

タバサとヴェリエのクラスメイト、ギーシュ・ド・グラモンもまた、その1人だ。

彼も別段、この決闘に何か思うところがあるわけではなかった。周囲の者たちの多くと同様、ただの興味本位でここにいるだけだ。しかし、彼は他の者たちとは違う点が一点だけあった。それは、どちらかという平民の使い魔の方に興味を持っていたという点だ。とはいっても、彼は平民という存在に関心を持っているわけではない。他の貴族たちと同程度には見下しているし、魔法が使えない下等な存在だと考えている。

魔法が使える貴族に逆らうこともできないくせに、陰でこそそと罵^{ののし}っては、いざメイジを目の前にすればへこへこするだけの連中。そんな誇りも何もない、つまらない人種だというのが、ギーシュらトリステイン貴族の多くが持つ平民観だった。

しかし、タバサの召喚した、黒髪の使い魔。あの少年は、そんな自分たちの考える平民とは違って見えた。

「タバサは関係ねえだろうが！」

貴族に対して臆することも無く、自分の主を侮辱した相手を思い切り怒鳴りつける。そのことに驚いた者は、きつとギーシュだけではなかっただろう。特にギーシュは、彼の怒り方に関心を覚えた。

女性への侮辱に対する怒り、それはギーシュも共感できることだったからだ。

だから、フェミニストを自任するギーシュとしては、むしろ平民の使い魔の方を応援する気になっていた。ラインクラスの風メイジであるヴィリエが平民に負けるとは本気で思っていなかったし、気持ちだけでも味方に立ってやろうと思ったのだ。

そして、決闘は大多数の予想通りに展開していった。平民の使い魔はヴィリエに全く歯が立たず、ヴィリエの繰り出す風で一方的に痛めつけられていく。風の鎚つちに体を打ちつけられ、風の刃に血飛沫を上げられる。

黒髪の少年は何度も吹き飛ばされ、何度も倒れ込んだ。その度に起き上がったのは、何度も何度もヴィリエへと突っ込んでいく。幾度も傷つきながらも、使い魔の少年は諦めずにヴィリエに挑み続けた。その不屈の意志を以って戦う姿に、少年に対する感情がただの興味から少し変化する。

どれほど傷ついても、心が折れることなく戦い続ける。それは、むしろ自分たち貴族が持つべき姿勢に思えたからだ。だからこそ、平民でありながらそれができるこの使い魔を応援する気持ちがある。ますます大きくなっていった。

「痛めつけられようが、何されようが……、一矢も報いらんねえま、ま、やられっぱなしでいられるか！」

そして、満身創痍になりながらもそんな叫びを上げる使い魔に、とうとう気紛れを起こす。

「いや、なかなか大した根性だね、使い魔君」

拍手をしながら、ギーシュは使い魔たちの許へ歩み寄っていく。すると、件の使い魔はこちらをじっと見据えてきた。

「誰だ、あんた……？」

「おっと、失礼。僕の名はグラモン伯爵家四男、ギーシュ・ド・グ

ラモン」

バラの造花をあしらった杖を振りながら、軽く自己紹介をする。すると、ヴェリエが陰のある声を投げてきた。

「ギーシュ？ なんのつもりだ？」

明らかに不愉快そうな眼が向けられてくる。

「まさか、決闘の邪魔をしようなんていうんじゃないだろうね？」

「邪魔をするだって？ まさか！ そんな無粋なことをするものか」大仰に手を広げて、否定を示す。こういうことは、多少芝居っ気が必要なものだ。

「ただ、性分というのかな。こういった多くの観衆が集まる中では、どうにも体がうずいてしまっただけ。何か自分も注目を集めたくなくなってしまうんだよ」

言いながらも軽くバラの香りを楽しむ仕種を取り、平民の使い魔の方へ目を向ける。

「それに、そちらの使い魔君にも少し興味が湧いてね」

「興味……？」

訝しむ平民に、軽く頷いてみせた。

「魔法が使えない身でありながら、どこまでも貴族に立ち向かっていく。そんな平民がいることに、何故か素直に感動してしまったよ」

言い終われば、ギーシュは杖を小さく振った。すると、バラの造花から花弁が1枚零れ、使い魔の許へと飛んでいく。そして、それはギーシュの掛けた錬金の魔法で剣に変わり、黒髪の少年の傍に突き刺さった。刃渡り70センチ程のミドルソードだ。

「判るかい？ それは剣、君たち平民が僕たち貴族に抗うために生み出したものだ。本気で決闘をするつもりなら、その青銅の刃を手にしたまえ」

そこまで言うと、ギーシュはヴェリエに向き直った。

「失礼、ヴェリエ。横槍を入れてしまったね。けど、君だとして丸腰

の平民が相手ではつまらないだろう？」

肩をすくめながら言えば、ヴィリエは声を上げて笑った。

「ハツハ、君も酔狂だな、ギーシュ？ まあ、別に武器を与えるくらい構わないさ」

もつとも、とヴィリエは付け加えた。

「今更そいつに勝ち目が増えるとは思えないけど？」

ヴィリエが辛辣に言った通りか、既に使い魔の少年は限界に見える。自分で贈っておいてなんだが、とても剣を取って闘える様な状態ではなかった。

ギーシュはそう思ったが、一方、黒髪の少年の方は剣に手を伸ばそうとする。しかし、それは直前で遮られた。彼の主、タバサによつて。

「駄目、これを取ったら、相手はもう容赦しない」

小さく首を振りながら告げるタバサ、その表情は、心なしかいつもの無表情と違って見えた。そして、それを向けられた方は軽い笑みで応えている。

「言つたら……？ 俺にも、意地があるって……」

言いながら、タバサの制止をやんわりとどけ、剣に手を伸ばす。

「そりゃ、痛いのは嫌だ……死ぬのだって嫌だ……」

「だけど、と使い魔は続ける。

「あんな奴に、負けたくねえ……勝ち目があるうと、なかるうと……」

瞬間、その半開きの目が燃え上がる。

「下げたくねえ頭は、下げられねえっ！」

言い放った言葉と共に、その手が剣の柄を握り締めた。

〈続く〉

〜第10話 勇気と闘いと覚醒と（中編）〜（後書き）

以上、今回はここまでです。

というわけで、才人はヴィリエにボコられています。そして、何故かギーシュは援護役。基本的に目立ちたがり屋キャラなので、当事者でなくても何らかの形でしゃしゃり出てきそうなので。

そして、シエスタにも少し頑張ってもらいました。原作では逃げてしまっただけですが、この物語では原作よりは親しくなっているのでほんのり活躍です。

ムジユラの仮面は少しだけ本性を出したが、真価を見せるのはこれからということだ。

後編はもうできているので、寝て起きたら投稿します。

今回は才人視点からスタートです。

2011/08/08 一部加筆修正

〈第11話 勇気と闘いと覚醒と（後編）〉

なんだ……？

剣を手にした途端、サイトは自身に違和感を覚えた。左手がぼんやりと温かくなってきたかと思えば、段々と手の甲が淡い輝きを帯びていった。その輝きと同調するかのように、徐々に体から痛みが引いて行く。否、それだけではない。苦痛と疲労で鉛の様な体が、なんだか軽くなってきたのだ。流石に羽が生えた様とまではいかないが、それでも普段よりもずっと楽に動けそうだ。おまけに、よく判らない力が体の奥から湧いてきているのも感じる。

どうなってんだ……？

ムジユラの仮面を被った時とはまた違った力の高まりに、サイトは困惑する。しかし、それも一瞬。

これなら、いける！

唐突な事態に対して切り替えの早い才人は、すぐに思考を決闘に戻した。不可思議な感覚に従うように体を動かし、剣を構える。剣術の心得など無い自分が、何故自然に武器を構えることができるのか判らなかつたが、とりあえず考えるのは後回しだ。

「皆、下がっててくれ」

タバサたちの方を一瞥し、告げる。ムジユラの仮面を除き、タバサたちから不安そうな眼が返ってくるが、才人は笑顔で言ってみせた。

「大丈夫、もう負ける気がしねえ」

傷の痛みを感じさせない、はつきりした声だった。その声に信じる何かを感じたのか、それとも自分の強情さに呆れ果てたのか、タバサは何も言わずに下がっていった。シエスタも、無理はしないでとだけ告げ、後に続いていく。ムジユラの仮面は、相変わらず意地の悪そうな眼で見つめてくると、無言でタバサたちの後を追っていた。

一方、ナビイだけはその場にとどまっている。

「ナビイ？ お前も下がってくれよ」

「いいえ」

才人の頼みを、妖精の少女は意外なほど強い声で断った。

「いや、いいえって」

「ワタシも一緒に戦う」

言いながらも、ナビイの青白い輝きが黄色一色に変わっていく。

「もう二度と、友達を見捨てるようなことはしたくないの」

静かながら、凜としたものの混じった声。それに、才人は反対の意思が殺がれた。

「これは俺の喧嘩だぞ？」

「大丈夫。口は出しても、手は出さないから」

手が出る程大きくないし、と付け加え、ナビイは笑う。

「お節介な奴」

「相棒にもよく言われたよ、何度も同じ注意するなってさ」

顔を合わせて笑い合うと、2名はヴィリエに向かい合った。

「やっと再開か？ 回復の時間稼ぎのつもりだったかな」

鼻で笑いながら、ヴィリエは杖を構えた。

「平民らしい浅はかな姑息さだが、それでなんとかかなると思えな
いがね？」

嘲笑もそこそこに、また呪文が唱えられていく。

「あれ……サイト、Listen！」

そこへ、ナビイの声が耳に届いた。

「ナビイ、どうした？」

「あの杖、よく見て！」

言われ、ヴィリエの杖を注視する。そうしていると、杖の周りが
陽炎のように揺らいで見えるのが判った。

「多分、魔法で杖の周りに風が集中して、空気が濃くなってるんだ

よ。だから、あんな風に揺れて見えるんだわ」

才人にだけ聞こえる様な小声で、ナビイは説明する。

「多分、あの濃くなった空気を撃ちだして攻撃するんだと思う」

「て、ことは……」

「あの揺れた空気が無くなった瞬間が、攻撃された時ってことだよ！」

その助言に、才人の心臓が逸りだした。つまり、あの陽炎が消えた瞬間が、回避すべきタイミングということだ。

「避ける瞬間はワタシが教えるよ。サイトは、攻撃することに集中して！」

「よっしゃ、サンキュー！」

一気に軽くなった胸が命じるままに、両の足に力を込める。

「じゃ、行くぜ、ナビイ！」

「OK！ 1、2の……」

地面に足を踏みしめ、駆けだす用意と心の準備を整えた。

「3！」

そして、声を合わせて飛びだす。こちらの怪我から、ダッシュできるとは思っていなかったのだろう。ヴィリエが、虚を衝かれた表情で杖を振った。

「Hey、サイト！」

「ああ！」

ナビイの呼び掛けに、声だけで応じる。言われるまでも無く、あの揺らぎに気が付いた時、それが向かってくることに気付けたのだ。そして、それがぶつかる寸前、才人は横っ跳びでそれをかわして見せる。

「なっ！？」

そのことに、ヴィリエは明らかに驚愕した。それが焦りを生んだのか、しゃにむに魔法を放ってくる。

「サイト、右！ その次は頭を伏せて！」

「おう！」

しかし、そんなものは最早脅威でない。ナビイの指示に従いながら、次々とそれを回避していった。そして、どんだんヴィリエとの間合いを詰めていく。

「くっ、平民ごときが、調子に乗るな！」

苛立たし気なヴィリエの言葉。次いで、ナビイの鋭い声が響く。

「Watch out！ サイト、大きいのが来るよ！」

「なっ、大きいのったって！」

危機感のこもった警告に、才人は焦った。わざわざ知らせるということは、今までのやり方では避けきれないということだろう。しかし、今までも割とぎりぎりでかわしていたのだ。これまでより強力な魔法など、どうよけるといふのか。

うろたえながらも走り続けていると、ナビイが叫び声を上げる。

「Hey！ サイト、一旦止まって！ それから、前を向いたまま剣を思い切り振りきって！」

「はっ！？」

「早くっ！」

唐突な指示に困惑するが、他に何かすべき策があるわけでもない。半ばやけくそ気味に、その指示に従った。

「その姿勢のまま、腕を更に後ろへやるみたいに力を入れて！ それから、左足を前にして、うんと強く踏み締めるの！」

「お、おう！」

言われた通り、剣の切っ先を斜め後ろに向ける様な姿勢のまま、剣を持つ右手と左足に力を込める。

「それで合図したら、左足を軸にして、思いっきり回転して！」

「か、回転？」

才人が聞き返せば、小さな助言者は力強く頷いた。しかし、どうにもそれでどうなるのかが判らず、才人としては混乱するよりない。そんな才人の様子に、ヴィリエが冷たい笑みを浮かべてきた。

「ふっ何のつもりか知らないが……」

相変わらず嘲るような声とともに、手にした杖が上げられる。

「これで終わりだ！」

そして、とうとうそれが振り下ろされた。瞬間、明らかにそれまでとは違う空気の流れを感じる。

「サイト！ 今だよ！」

しかし、その一瞬前に、ナビイの合図が耳に響いた。それとともに、才人も腹を括る。最早迷っている場合ではないのだ。それならば、ナビイの言葉に懸けるしかない。

「うおおおっ！」

叫びながら、左足を踏み締め体を回転させた。すると、予想以上の加速感を以って、全身が螺旋を描こうとする。

「しなつた竹が、勢いよく返るみたいだ」

その速さに驚きながらも、回転に合わせて剣を振るうことは忘れない。そんな才人の動きを見ていたナビイが、静かに呟いていた。

「溜めに溜めた力が、遠心力の中で更に強さを増す」

それを聞きつつも旋風のごとく剣を唸らせ、才人はヴィリエの風に真っ向から挑みかかる。

「それこそ、勇者リンクの必殺剣」

見えない突風と、青銅の渦、その両者がぶつかりあった、その瞬間

「“回転斬り”！」

才人の振り切った刃が、魔なる風を打ち破った。突風の残骸は2つに裂け、才人を避ける様にして草地に軌跡を残していく。

その光景に、多くの者が絶句していた。魔法を使えない者が、魔法を正面からねじ伏せた事実が信じられないのだろっ。それはヴィリエも同様だ。杖を振り下ろした状態のまま、呆然としてしまっている。

そして、そんな隙を見逃す手はない。一気に距離を詰め、剣を振りかぶる。そこで、ヴィリエはようやく杖を構えなおすが、最早遅い。

「でやああああっ！」

気合の叫びとともに、剣を袈裟斬りに一閃する。

一瞬の静寂、その後、ヴィリエの杖が2つに分かれた。切り裂かれた先端は、そのまま力なく地に落ちる。それが転がるまで見届けると、才人はヴィリエに切っ先を突きつけた。

「まだ、やるか？」

問われるまで、呆然としていたヴィリエの顔が、屈辱に歪む。それでも、自分の切られた杖に目を向けると、視線を外して呟いた。

「……参った」

悔しそうな返答を受け、才人は高らかに剣を掲げる。その次の瞬間、広場は歓声に包まれた。

「あの平民、やるじゃないか！」

「ヴィリエが負けたぞ！」

野次馬たちの囃したてる声を聞きながら、見知った姿が駆け寄ってくるのが見えた。タバサ、シエスタ、ムジユラの仮面、先程はいなかったキュルケに、剣をくれたギーシュもいる。

「サイトさん！」

最初に声を掛けてきたのは、シエスタだ。

「凄いです、サイトさん！ 貴族に勝ってしまうなんて！」

「凄い凄いとはいやぐシエスタに、キュルケが続く。」

「ホントね、やるじゃないの」

「ゴミでないと、証明できたわけだな」

ムジユラの仮面もからかうように言ってきた。それら全てに才人は心底の笑顔で応えると、やがてタバサに目が留まる。

「タバサ、勝ったぞ」

笑って言ってみせると、タバサは何処となく困った顔をしているように感じた。それに才人が訝しむより早く、別の声が掛かる。

「いや、大したものだね、使い魔君」

拍手をしながら、ギーシュが笑みを見せる。かなり整った顔立ちをしているがために、その表情は様になっていた。

「ギーシュさんだっけ？　ありがとな、あんたの剣のおかげで勝てたよ」

軽く礼を述べると、ギーシュは苦笑する。

「いや、君は本当に貴族に気後れしないんだね。普通、貴族にそんな礼で済ます平民はいないよ」

「あ、ごめん、じゃないか、すみません」

慌てて、謝罪の言葉を述べた。貴族への礼儀と言われても、平等主義な日本で育った才人にはピンとこない。しかし、流石に恩を受けた相手にタメ口というのは無礼が過ぎたかもしれない。

「いや、構わないよ。正直そこまで自然な態度を取れる存在は貴重だからね」

一方、謝られた方は笑ってそれを許した。

「だから特別に、対等の言葉を交わすことを許そうじゃないか」

「はあ、どうも……」

芝居がかった語り方にやや腰が引けるが、とりあえず無理に畏まった話し方はしなくていいらしい。

「んじゃ、改めて。本当にありがとうな、最後は、あの剣で助かったみたいなものだし」

「いや、あれは君の実力だよ。正直、ここまでの結果になると思っ
ていなかった」

謙遜ではなく、本気でそう思っているらしい。

「ははっ、正確にはアドバイスのおかげだけ」

言ってナビイを見やれば、元の色に戻ったナビイが照れたように笑った。

「ところで、使い魔君。名前を聞いてもいいかね？ 決闘前に名乗っていたようだが、恥ずかしながら聞き逃してしまったものでね」

「ああ、平賀才人。才人って呼んでくれ」

「サイト？ 珍しい名前だね？」

段々慣れてきたリアクションに、だろうね、と返した。

「だが、気に入ったよ。僕のことも、ギーシュと呼んでくれたまえ」
それだけ言い残すと、ギーシュは芝居っ気のある仕種でマントを翻し、颯爽とその場を去っていく。その後ろ姿は、素直に格好良く見えた。白人を美化する日本人的感覚を抜きにしても、ギーシュは背の高い美男子なため、気障っぽい動きも割と画になっている。

自分より身分が低く、かつ接点もなかった自分に手を差し伸べ、その勝利を祝福してくれた貴族の少年。そんなギーシュの姿に、才人は僅かながら憧れの念を抱いていた。

「ギーシュ様！」

そこへ、栗色の髪をした少女が人垣から飛び出してくる。見れば、タバサやギーシュ達の黒いマントと違い、その少女は茶色いものを羽織っている。

「け、ケティ！？」

「ギーシュ様、平民であろうと危機にある者を救わんとする優しさ、私感動いたしました！」

頬を赤らめてギーシュを称賛する少女、ケティを前に、ギーシュは何処か焦った様子を見せる。

ギーシュの恋人なのだろうか。

「ギーシュ？」

そこへ、また別の声が上がった。見れば、長い金髪をロールにした少女が近づいてくる。マントの色は黒だ。

「ギーシュ？ その子は誰なのかしら？」

異様にどすの利いた声で尋ねられ、ギーシュの顔がみるみる青くなっていく。

「も、モンモランシー、これはだね……」

「ギーシュ様……」

一方、ギーシュの傍ではケティが哀しげな声を出している。

「ギーシュ様、やはりミス・モンモランシと……」

よろよると、後ろに下がるケティ。少し遠くてよく見えないが、涙ぐんでいるようだ。

「やっぱり、この1年生に手を出していたのね？」

モンモランシーと呼ばれた少女の方はいえば、ふんまん憤懣やるかたないといった風情である。そんな彼女たちの様子に、読みたくないながらも状況が読めてしまった。要するに、ギーシュはこの少女たちに二股を掛けていたようだ。

その2人を前にして、ギーシュはとてつもない程にうるたえていた。

「き、君たち、どうか落ち着いておくれ！ 君たちのその美しいバラの様な笑顔が曇っては、僕まで哀しくなってしまうよ！」

言い訳がしたいのか、気取りたいのか、どちらとも取れない言葉を吐くギーシュの顔を、2人の少女の平手が両側から挟みこむ。ばちん、と小気味いい音が響いたかと思えば、2つの叫びが新たに上がった。

「もう、そのお言葉は信じられませんわ！ さよなら！」

「嘘つき！ もう愛想が尽きたわ！」

言うや否や、2人の少女は別々に去っていく。そして、顔面挟み込みビンタを喰らったギーシュは、しばらく顔を押しさえてのたうちまわり、やがてゆっくりと立ち上がった。

「あのレディたちは、僕というバラの存在の意味を理解していないようだ」

そして、ビンタの跡で顔を赤くしながら、そんなことを言っている。

俺、こいつに助けられたわけ……？

疾風のごとき速さであほらしさが湧いてきて、迅雷さながらの勢いで憧れの念が瓦解していき、流星もかくやというスピードで意識が遠のきはじめた。

「っ!?!」

「サイトさん!?!」

「サイトっ!?!」

「Hey! 大丈夫っ!?!」

「結局気絶か? 情けないな」

そして、5通りの声を受けながら、才人はそのまま気を失うのだった。

ヴィリエ・ド・ロレー又は、怒りと屈辱で震えていた。

こんなはずじゃなかった……!

切られた杖を握りしめながら、ここに来た理由を思い出す。

事の起こりは、平民が落としたケーキのクリームが服に飛び散ったことだ。それに文句を言った時、その平民が雪風のタバサが召喚した使い魔であることに気が付いた。

あの青い髪の毛、ふざけた名前の同級生には、去年恥をかかされたのだ。庶子だという噂が流れる様ないかがわしい存在だというのに、風のラインクラスのメイジである自分よりも風の呪文を巧みに操り、自分のプライドを何度も傷つけた。決闘を申し込み、逆に負かされたこともある。

だから、あの平民に対してタバサへの鬱憤^{うつげん}をぶつけていたのだが、平民の使い魔は萎縮するどころか、ワインをぶちまけてきた。それを契機に決闘をすることになったのだ。

始めは全てが上手くいっていた。所詮、平民が貴族になうわけがない。ヴィリエの放つ“エア・ハンマー”や“エア・カッター”

に、平民の使い魔は翻弄ほんろうされるだけだった。ヴィリエはこのまま自分の楽勝を信じていたが、しかし、それは叶わなかった。

同級生であるギーシュの気紛れで渡された剣を手にした瞬間、相手の平民の動きが急によくなったのだ。自分の風を次々と避けていき、それどころか、ヴィリエが使える最強の風の攻撃呪文、“ウィンド・ブレイク”さえ打ち破った。そして、ヴィリエは敗れたのだ。常日頃見下している、平民を相手に。

その信じがたい、信じたくない現実に、ヴィリエは震え続けるだけだったが、やがておもむろに立ち上がる。

「ギーシュ！」

そして、決闘の闘入者の名を叫びながら、そちらへと詰め寄っていった。

「ヴィリエか」

そう返事を返すギーシュの表情は、まるで幽鬼の様に暗かった。「君たちの決闘のおかげで、2人のレディの名誉が傷ついてしまった。どうしてくれるんだね？」

「知るか！」

無茶苦茶な言い掛かりをつけてくるギーシュに怒鳴り返せば、ギーシュはだよねえ、と呟いてうなだれてしまった。しかし、そんなことに構ってられない。

「そんなことより、ギーシュ！ 君が渡した剣、あれは一体何だ！？」

怒号じみたヴィリエの問いに、しかしギーシュは眉をひそめてくる。

「どういう意味かね？ 君も剣を渡すことには納得したじゃないか」「とぼけるな！ あの剣を渡した途端、あの平民は強くなった！何か魔法を掛けていたんだろう！」

掴み掛かる程の勢いで、一気にまくしたてた。あの剣に何か仕掛けがあり、それがあの平民を強化させたに違いない。それ以外に、

ヴィリエはあの平民の逆転劇の理由が考え付かなかったのだ。

しかし、そこでギーシュの表情が変わる。

「ヴィリエ」

「な、なんだよ」

鋭い声で名を呼ばれ、ヴィリエは怒りが少し冷めるのを感じた。

「僕も、相当見くびられたものだ」

憂いを帯びた溜息。それをするギーシュからは、何か言い様のない威圧感が感じられる。先程までどんよりとしていた人物とは思えない。そこで、今更ながらギーシュがトリステインでも名高い武門の家系であることを思い出した。

そして、もっきん猛禽を思わせる瞳をヴィリエに向け、ギーシュは言い放つ。

「平民を強くする魔法だつて？ もし僕がそんなすごい魔法が使えるとしたら、何故僕が自慢しないなどと考えられるんだね！？」

「かっこつけて言う台詞じゃないだろ！」

そして、その発言で一気に空気が弛緩した。同時に、その言葉でギーシュは無罪であることは納得してしまう。この少年の伊達男ぶりは、学院では有名なのだ。

それじゃあ、なんで？

そして、ますます何故負けたのかが判らず混乱することになってしまった。

「遊び足りないなら、オレと遊ぶか？」

頭を悩ませていると、背後から掛かった声にぞくりとする。振り返れば、タバサの召喚した別の使い魔、不気味な仮面型のマジック・アイテムがこちらを見据えていた。

「あ、遊ぶだと？」

「ああ、気が済んでいないみたいじゃないか？」

妙に面白そうな声で言うと、仮面はヴィリエに視線を合わせてく

る。

「だが、お前は杖がもうないんだっただな」

軽くヴィリエの切られた杖を一瞥すれば、言葉が続けられた。

「じゃあ、別の遊びをしよう」

言って、仮面は何がいいかなと考えはじめた。そのことに、ヴィリエの胸に苛立ちが生じる。こちらの意思を無視して、何を勝手なことばかり言っているのか。しかし、それにヴィリエは反抗することができなかった。この仮面が持つ、夕暮れ色の両眼。それに見つめられていると、何故だか背筋が震え、声が上手く出ない。

「かくれんぼ……か、いいな」

奇妙な感覚に捕らわれていると、やがて仮面の方では答えが出た様子だ。

「そうだ、それがいい」

愉快そうな仮面の声で、ヴィリエの悪寒がますます酷くなる。

「か、かくれんぼだと……？」

聞き返す声に、震えが隠せない。かくれんぼ、誰もが子どもの頃に1度は体験するだろう、他愛もない遊び。そのはずなのだが、ヴィリエにはそれを言葉通りに受け取ることができなかった。

この仮面の眼が、無邪気に輝く楽し気な光と、冷たく凍える様な暗がりと同時に宿った気味の悪い眼が、ヴィリエに額面通り捉えることを許さなかった。

「いいか……お前が隠れるんだ」

そんなヴィリエの怯えを意に介さぬ様子で、仮面が続ける。

「隠れるっていうことは、何処にいるか判らないっていうことだ。

何処にいるか判らないってことは、いないのと変わらないっていうことだ」

そう語り続ける内に、仮面の表面に光の筋が瞬き始めた。青白い、電流の様なものが、顔に当たる部分で踊りだしている。

「いるのに、いないのと同じっていうことは、それは、お前が誰な

のか判らないっていうことだ」

表面を紫電が網の目の様に走る中、夕暮れ色の眼が爛々（らんらん）と輝いていた。その様子は、まるで黄昏時に荒れ狂う落雷の群れにも似て見える。

「誰もお前が誰なのか判らないなら」

不吉な光で顔中を染めた仮面は、それ以上に不吉な声で問い掛けてきた。

「お前は、本当にお前なのかな？」

「さ、さつきから、何を言っているんだ!？」

奇怪に過ぎる言動に溜りかね、悲鳴のように叫び返す。

「だけど、頭隠して尻隠さずだ」

それでも、仮面の言葉は終わらない。嘲笑にも似たその声は、冷たい愉悦の色が聞きとれた。

「顔は隠れているのに、他は隠れていないんだ。でも、顔はちゃんと隠れている。だからやっぱり誰だか判らないんだ。それでも、いいよな」

「だ、だから、何を……」

尚も言い返そうとするヴェリエだが、すぐにそれは弱々しく途切れる。仮面の瞳が放つ妖しさに、心が吞まれてしまったために。

「じゃあ」

最早口を動かすことさえできないまま、仮面の声が気味悪く響く。「いこうか」

その発言を受けた瞬間、ヴェリエは目の前が暗くなっていくのを感じた。気が遠のいていき、全身から力が抜けて膝をつく。

それからどの程度時間が経ったのか、やがて意識がはつきりしてきたヴェリエは、溜息とともに立ち上がる。

すると、何故か周囲から悲鳴が幾つも上がっているのが聞こえた。

「一体、どうなったんだ……?」

見れば、近くに立つギーシュも頬を赤くしたまま青ざめている。

いよいよわけが判らなくなっていると、不意に仮面が声を上げて笑った。

「ヒヤハハ、なかなかユニークな姿だ」

それだけ、言つと、さつさと仮面は主人であるタバサたちの許へ行つてしまった。見れば、タバサはあの平民を魔法治療している様だ。あの平民を見ると再び怒りと屈辱で腹が煮えるが、今はそれより気になることがある。

「ギーシュ、一体どうなっているんだ？　なんだか、皆僕を見て悲鳴を上げているようだけど」

「ヴい、ヴェリエ？　君、大丈夫なのかね？」

ヴェリエの問いには答えず、逆にギーシュが震えながら聞いてくる。

「大丈夫かつて、何が？」

聞き返すと、ギーシュは懐からコンパクトを取りだし、鏡をヴェリエに向けてきた。男のくせに、こんなものを持ち歩くなよ、と軽く呆れるが、すぐにそんな感情は消し飛ぶ。

「なっ！？」

その鏡を覗き込んだ瞬間、空気が凍った様な感触がした。次いで、ギーシュからコンパクトを引ったくり、食い入るよう見つめる。

「う、嘘だ、嘘だ！　こんな、こんな……！！？」

それが見間違いでないと判れば、次いで顔の感触を確かめはじめた。見えているものが信じられず、何度も何度も触り続ける。

「う、うわあああっ！」

やがて、鏡に“映らない”自分の顔を触りながら、ヴェリエは恐怖の叫びを上げて気絶した。

「なんだ、もう失神か？　胆きもの小さい奴だな」

タバサがサイトに治癒の呪文、“ヒーリング”を掛けている中、ムジユラの仮面が呆れた風に眩く。その視線の先には、顔だけ透明人間にされたヴェリエが倒れていた。

「ムジユラ、何やってるの！」

「聞いていなかったか？ ただのかくれんぼさ」

ムジユラの仮面が事もなげに言うと、ナビィは溜息を1つつく。

「早く戻してあげなよ」

「戻すつて、俺がか？」

「他に誰ができるの」

「早く戻して」

それに、タバサも続いた。多少手遅れな感はあるが、トリスティンの貴族といざこざの種を無意味に残したくはない。その命令に、ムジユラの仮面は不承不承の体で従った。

「全く、呪つて2分で解くことになるとは、最短記録だな」

ぼやきながらもムジユラの仮面が瞳を輝かせると、ヴェリエが夕焼け色の光に包まれた。すると、彼の透明になっていた顔が元に戻る。

「貴方も酷いことするわね」

それを見ながらキュルケが言った。容姿に自身のある彼女だけに、顔を透明にさせる力が相当恐ろしく見えたのだろう。軽く見やると、彼女の顔色は随分悪かった。片や、ムジユラの仮面は心外そうに言う。

「おいおい、同僚を傷つけた相手を懲らしめてやっただけじゃないか」

悪びれた風も無く言っているが、その眼はいかにも面白がついて説得力がない。十中八九、これは彼自身の趣味の結果だろう。

「ムジユラ、貴方つて、邪気抜けているはずだよな？」

「邪気が抜けたといつても、モンスター的な暴力衝動が消えただけ

だ。オレ自身の性格にまで影響はない」

ナビイの問いに笑いながら返す仮面の使い魔に、タバサはなんとなくこの仮面の本性を察した。

この使い魔、幼稚なだけでなく相当残酷らしい。

「で？ 我らが勇敢な莫迦坊主は、どんな具合だ？」

辛辣ながら適切な評とともにサイトの容体を尋ねられ、タバサは内心で歯噛みする。

「危険。危篤といっても差し支えない状態」

「そんな!？」

傍で聞いていたメイドが、悲鳴じみた声を上げた。しかし、これは事実だ。ヒーリングはタバサが2番目に得意な系統、水の呪文であるが、この呪文は秘薬と併用してこそ高い効力を持つ。呪文だけでは、応急処置程度にしかない。これ以上は、治療用の秘薬を取り寄せるしかないだろう。

一方、それを聞いたムジユラの仮面は、またも呆れた声で言った。「そんな状態で、こいつは意地を張っていたのか？ 想像以上の根性を褒めていいのか、頭の悪さにびっくりすべきか」

正しく莫迦を見る眼でサイトを見つめるムジユラの仮面であるが、否定する者は誰もいない。一方、ナビイは何か思いついた様に声を上げた。

「ムジユラ！ 貴方ならサイトを治せない？」

そう提案すると、ムジユラの仮面は考える様に間を置く。

「治す、ね。破壊や変異の呪いなら得意なんだが、治療となると…」

…

「教室を直した、あの曲は？」

タバサが聞くと、ムジユラの仮面は頭を振った。

「あれは本来、魂の苦しみや汚れを癒す曲だ。ただの物なら魂がない分それ自体への修復に威力が向くが、生き物では肉体的な傷に効果はない」

そこまで言うと、ムジユラの仮面はタバサと視線を合わせてくる。

「それより、主がオレを被ったらどうだ？」

「私が？」

聞き返せば、眼前の相手は頷いてくる。

「オレの魔力を掛け合わせれば、その魔法を強化できるかも知れんぞ」

その言葉に、タバサの心が揺れた。サイトの傷は、水の秘薬を使っても簡単に治るものではないだろう。すぐに治すことができるのなら、なるべくそうしたい。しかし、ムジユラの仮面を被るのは色々な意味で抵抗がある。

しばらく逡巡するものの、結局タバサはムジユラの仮面を手に取った。色々と胡散臭いのであるべく使いたくはなかったが、サイトがいつも平気で被っているために警戒心が緩んでもいた。

そして、いざ被ってみると、タバサはその威力に驚く。全身に異質な魔力が満ち溢れ、自分が自分以上の存在になった様な感覚。その心地よい力の高まりに、タバサはサイトが無抵抗でムジユラの仮面を被れる理由を理解した。

「うーん、ヒラガ程力が引き出される感はないな。他者の力を借りようとする心が弱すぎるためか？」

しかし、ムジユラの仮面にしてみれば自分は上手く扱えていないらしい。自分の使い魔の方が自分の使い魔を上手に扱えるとは、変な話だった。最も、使い魔が複数いる時点で変なのだが。

「まあ、とりあえずさっきの魔法を使ってみるよ」

「イル・ウォータル・デル……」

言われるまでも無く、既にタバサは呪文を詠唱していた。すると、想像以上の魔力の高まりに、思わず舌が止まりそうになった。そして、それはきちんと効果として現れ、サイトの傷がみるみる癒えていく。水のスクエアメイジにも劣らないヒーリングだ。数秒もしない内に、少年の怪我はすっかり塞がっていた。今すぐにはいかな

いまでも、直目を覚ますだろう。

それを確認すると、タバサはムジユラの仮面を外した。それから、とりあえず先程までの出来事で判ったことを観察ノートにつけていく。ムジユラの仮面編には「子どもじみた残酷ぶり」、「被るとスクエアクラスの魔法が使える様になる」と、ナビイ編には「お節介な性格の模様」、「適切な助言で戦闘補助をする」と記した。そこまで書くと、タバサは先程のナビイの台詞を思い出す。サイトを援護する直前、彼女は「もう二度と友達を見捨てたくはない」と言っていた。もう、ということとは、彼女は以前に誰かを見捨てた経験があるのかもしれない。タバサはそれを書こうとして、やめた。流石に、そこまで相手の事情に踏み込んだことを書いていいとは思わな

いから。
そして、サイト編のノートを取り出し、開く。箇条書きで「好奇心が強い」から始まった幾つかの特徴の最後には、「ニワトリにつける類の名前らしい」と書いてあった。

ナビイの言葉で知った、サイトという聞き慣れない名前の由来。もしかすると、偽名なのかもしれない。そうだとすると、彼にも何か本名を名乗れない事情があるのだろうか。

私と同じように……

それなのに、いつも明るく振る舞っている。他人を気遣える優しさを持ち、異世界に召喚されたという異常事態にも笑顔を忘れないでいる。

そう思うと、よく判らない温かさが胸に湧いてきた。それが何だかこそばゆく、タバサは誤魔化す様にして「人の忠告を聞かない」、「猪突猛進」、「向こう見ずが過ぎる」等々、こきおろす評価をノートに書いていく。そして、最後に「剣術が意外に強力」と書くと、ペンを持ったまま考え込んだ。

サイトは、私を友達って言っていた……

サイトの叫びを思い返す。彼は、友達であるタバサの悪口を許せないと言った。勿論、決闘を続けたのは彼自身の意地が大半だろう。それでも、決闘自体の契機は自分が侮辱されたことだった。

そうだ。サイトは、昨日会ったばかりの自分を、それどころか、彼を故郷から切り離してしまった自分を、友達だと言ってくれた。友達の名誉のため、自らのプライドのため、勝機のない戦いに向かっていた。どれだけ傷ついても、決して諦めず、最後には勝利を掴んでみせた。

その姿に、何故か頬が熱くなっていく。それから、小さく「優しく、勇敢」と付け加えた。

「ん……、くっ……」

しばしの後、サイトが目を覚ます。その頃には、ムジユラの仮面たちを連れてきたメイドが彼を膝枕で寝かせていた。それがなんとなく癪に障ったのは何故だろうか。

「あれ、シエスタ？」

「サイトさん！ 大丈夫ですか!？」

笑顔で問い掛けるメイドに、サイトは自分の状態を理解したらしい。顔を赤くしながら、慌てて体を起こしていた。その初心つひな有様に、隣のキュルケが笑いを堪えている。

「えっと、俺どうしたんだ？」

「怪我で倒れられたのを、ミス・タバサが魔法で治療してくださいませんか」

メイドの答えに、サイトは一つ頷いた。

「そっか、ありがとなタバサ」

サイトが頭を下げると、タバサはいい、と軽く返す。すると、ムジユラの仮面の楽し気な声が響いた。

「主、被れ」

「どうして？」

唐突な台詞に視線を鋭くするが、ムジユラの仮面は動じない。

「被れば判ることだ」

「何を企んでいるの？」

「それも被れば判る」

カーテンに腕押しな態度の使い魔に、タバサは小さく首を振った。そして、終いにはやはり被ることになる。はつきりいつてムジユラの仮面は怪しいことこの上ないが、こうまで態度があらさまだとかえって疑う気が起きなかった。

そして、いざ被ってみれば、すぐ耳許からムジユラの仮面の声が聞こえてくる。

「なあ、主？ ヒラガのことだが」

面白がっている様な、それでいて厳肅な様な声だった。その奇妙な声音に、思考の調子が狂うのを感じた。

「使い魔でありながら、主の命令を無視したというのは問題じゃないのか？」

もっともらしいムジユラの仮面の言葉に、タバサはそれを考えてみる。サイトが何か言っているが、それは無視だ。

「使い魔の躰も、主としての役目だろう？」

段々声に挑発の様な色が混じってきたが、言っていることは間違っていない。

「貴族を名乗るならば、義務を怠るわけにはいかないよな？」

「確かにそう」

「なら、やるべきことは1つだ」

いつの間にか、タバサは耳から入る声に引き込まれていた。被る時に持っていた疑念が、すっかり影をひそめている。そして、言われていることを真剣に検討している自分がある。それは、ムジユラの仮面の言葉が正論であるためだった。その一方で、冷静な部分で何かがおかしいとも思う。幾ら正しい理屈だとしても、こんな簡単にムジユラの仮面への警戒を解くものだろうか。否、そもそも本当に正しいことを言っているのか、正しいと思いつまされているので

はないか。

今のタバサには判らなかつた。とりあえず、ムジユラの仮面を被るのは控えた方がいい様だ。確かなことは、ただ1つ。

「言うことを聞かないニワトリには、お仕置が必要」

サイトに、制裁を加えることだつた。少なくとも、彼の勝手な行動で心配をしたのは事実だからだ。タバサ自身の魔力と、ムジユラの仮面の魔力が混じり合い、杖の先からどす黒いエネルギーが立ち昇っていく。それを見ていたサイトは、見事な程に慌てだす。

「いや、だからニワトリは違つて！ つつーか、落ち着いて話し合おう！ ほら、そんな杖なんて向けてこないでさ！ ムジユラなんて被つてたら、可愛い顔が台無しですよー!？」

あの決闘の勝者とは思えない程の狼狽ぶりに、ムジユラの仮面が呆れた声を上げる。

「お前も根性あるのか、ないのか、よく判らない奴だな」

「うるせーよ！ ってか、お前もしかしてさつき助け舟断つたのの仕返ししか!？」

サイトが叫べば、叫ばれた側は改まつた調子で話しはじめた。

「ヒラガ、オレは自分から進んで他者を傷つけようとは思わない」

その真面目な調子のまま、ムジユラの仮面は言つてのけた。

「だが、他者の苦痛を楽しめないといいわけでもない」

そんなふざけた台詞を。そこで、サイトが雄叫びにも似た叫びを上げる。

「やっぱこいつ、性格最悪だあああつ！」

この後、彼がどうなつたかは割愛するが、それがこの後3日間でサイトが話した最後の言葉であつたことは、あえて記しておく。

こうして、昼休みの騒動は終結した。

ラインメイズでありながら、平民に倒されるといふ屈辱的な結果に陥り、更には顔面透明人間にされたヴィリエ。

気紛れで親切心を起こしてみれば、公衆の面前で二股が露呈し、自慢の顔をはたかれたギーシュ。

散々痛い目を見ながら、命懸けで勝利をつかんだというのに、勝利を捧げるべきご主人様にお仕置きをされることになった才人。

誰が一番不幸かは、判断の難しい所である。

〈続く〉

〜第11話 勇気と闘いと覚醒と（後編）〜（後書き）

以上、今回はここまでです。

と、いうわけで、勘違いの許サイトはタバサの中でニワトリ扱いが決定しました。ルイズ以外に召喚されたのに、怒られ方が犬扱いのままだと味気ないですので。タバサも結構お仕置きは激しそうですし。

「下げたくねえ頭は下げられねえ」は、サイトの台詞の中では「好きって言ったのが嘘になりそうな気がする」、「地球なめんな、ファンタジー」と並んで好きなものなので、前回書いてよかった。

今まで影薄かったナビイも、今回はやっと活躍させられました。ウインド・ブレイクの対抗策は、最初は剣で棒高跳びしてかわすみたいな感じだったんですけど、折角ゼル伝とのクロスなので回転斬りになりました。技自体は単純なので、サイトでもできるだろうという事です。

ルーンの描写が弱々しい理由は、次回で明かす予定です。

今回はコルベール視点からスタートです。

2011/08/08 改行修正

〈第12話 伝説：1 + 1 / 3 × 3〉

時は少し遡る。

午前最後の授業が終わるよりも前、中堅の教師であるジャン・コルベールは学院の図書館にいた。学院本塔にある図書館の蔵書は膨大であり、30メートルを下らない高さの本棚が壁際に並んでいる。その中で、彼がいるのは“フェニアのライブラリー”。教師のみが閲覧できる区画だ。生徒たちも利用できる一般区画には、彼の求める答えはなかったのである。巨大な本棚に押し込まれた無数の書物に、コルベールは次々と目を走らせていく。

あの使い魔たちのルーン、どうしても気になる

それは、学院の生徒であるルイズとタバサ、2人の召喚した使い魔たちを調べるためだ。落ちこぼれと呼ばれるルイズが風竜を召喚したことは驚いたが、それ以上に興味を引いたのは、あの見慣れないルーンだった。また、タバサが召喚した、3名もの使い魔たち複数の召喚などという話は聞いたことがなかった上に、彼らのルーンもやはり珍しかった。そして、四者それぞれのルーンを見比べた時、更に驚愕することになった。

その驚きはすぐさま好奇心へと変わり、コルベールは一心不乱にそのルーンを調べていた。そして、やがて目当ての答えは見つかった。“始祖ブリミルの使い魔たち”という、書物の中に。

目を見開き、自分の持つスケッチと、その中のルーン図を見比べる。そひて、それが間違いでないことを知るや否や、コルベールは矢のような勢いで図書館を後にした。魔法学院の学院長、オスマンの部屋へと向かう。

図書館の上、本塔の最上階にある学院長室のドアまで来ると、軽く身なりを整える。逸る心を押さえつつ、ドアをノックしようとする

ると、中から声が聞こえてきた。

「カーツ！ 王室が怖くて魔法学院学院長が務まるかーっ！」

やたら気合のこもった声が響いたかと思えば、今度はなにやら鈍器で泥炭袋を殴る様な音が耳に飛び込んでくる。

「あだっ！ 年寄りを。きみ。そんな風に。こら！ あいだっ！」

次いで、聞くに堪えない情けない声を聞き、コルベールは溜息をついた。どうやら、オスマンは自身の秘書であるロングビルに不埒な真似を働いたらしい。オスマンのセクハラ癖と、それに対するロングビルの報復は、教職員の間では密かに有名だった。

一気に気分が冷めそうになるが、自身がここに来た理由を思い出すとすぐに昂りを取り戻す。折角の興奮に水を差される形となったコルベールは、もどかしさも手伝って乱暴にドアを開けた。

「オールド・オスマン！」

「なんじゃね？」

先程聞こえてきた声が嘘のように、部屋の主とその秘書は泰然とした姿で出迎えてきた。恐るべき早業で体裁を繕ったのだろう。きつちりとそれはばれているのだが、コルベールは優しい気持ちで気付かないふりをした。

コルベールはセコイアの机に肘をついたオスマンの許へ駆け寄ると、持っていた書物を見せる。

白く染まった髪と髭を長く伸ばしたオスマンは、いかにも齢と経験を蓄えた風貌をしている。齢100とも300ともいわれる国内でも高名な老メイジは、コルベールの差し出した本をつまらなそうに一瞥した。

「まあたこのような古臭い文献など漁りおって。そんな暇があるなら、たるんだ貴族たちから学費を徴収するうまい手でも考えたら」

「そんなことより！ これも見てください！」

学院長の戯言を遮り、コルベールは件の使い魔たちのルーンのスケッチを手渡した。そこで、オスマンの表情が変わる。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

その言葉に、ロングビルは立ち上がって一礼する。長い緑色の髪と、知的な美貌が眩しい眼鏡の秘書は、余計な言葉もなく部屋を後にした。実によくできた女性である。

「詳しく説明するんじや。ミスタ……なんだっけ？」

「コルベールです！ お忘れですか！」

雇い主はあれであるが。

そして、コルベールはルイズとタバサに召喚された使い魔たちとルーンのことを話していった。そして、それを調べていった先に、この書物でその答えを得たことを。

「ふむ、始祖ブリミルの使い魔、“ガンダールヴ”か……」

コルベールのスケッチと、書物の中のルーンを見比べながら、オスマンが呟いた。

「そうですね！ ミス・ヴァリエールの召喚した風竜、その左前足に刻まれたルーンは、伝説の使い魔ガンダールヴに刻まれていたものと全く同じであります！」

口から泡を飛ばしながら、コルベールは言葉を続ける。

「更に、ミス・タバサに召喚された使い魔たち！ 彼らのルーンはかなり妙な形で刻まれています。間違いなくガンダールヴに関わるものです！ つまり、4体もの伝説の使い魔が現れたということです！」

熱く語れば、ふむ、とオスマンが髭をしごいてみせた。

「確かに、その使い魔たちが伝説と関わる存在なのかも知れんが、ルーンだけで判断するのは早計かもしれん」

「それもそうですね」

真面目な顔と声で語る学院長を前に、コルベールは多少落ち着きを取り戻す。そこへ、ドアがノックされた。

「オールド・オスマン、至急、お耳に入りたいことが」

扉の向こうから聞こえてきたのは、ロングビルの声だ。

「なんじゃ？」

「ヴェストリの広場で、決闘を起こしている生徒がいるようです。止めようとした教師たちも、生徒たちの妨害で手を出せない様です。それを聞き、オスマンが呆れたように頭かぶりを振る。

「まったく、暇を持て余した貴族ほど、性質たちの悪い生き物はおらんなわい。で、誰が暴れておるんだね？」

「1人はヴェリエ・ド・ロレーヌ」

「あの、ロレーヌとこの莫迦息子か。確か、去年もミス・タバサと決闘騒ぎを起こしていたが、まさかまた彼女と悶着もんじやうを起こしたのか？」

そこで、ロンビルは一瞬言葉を切る。

「いえ、彼女本人ではありません。彼女の使い魔の少年のようです」

コルベールとオスマンは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために“眠りの鐘”の使用許可を求めております」

「アホか。たかが子ども喧嘩に秘宝なんぞ使えるか。放っておきなさい」

「判りました」

ロングビルの立ち去る足音が聞こえると、コルベールはオスマンを見据え、オスマンが壁に掛かった大鏡に杖を振る。それにより、“遠見の鏡”と呼ばれるマジック・アイテムがヴェストリの広場の様子を映し出した。

そして、オスマンとコルベールは、騒動の一部始終を見るのだった。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの少年、勝ちましたな。ラインのメイジを相手に……」

「うむ」

若干腑に落ちない気持ちで、コルベールはオスマンに尋ねる。

「やはり、彼はガンダールヴなのでしょうか？」

「ふむ。ミスタ・コルベールよ、ガンダールヴの伝承は知っているじやろう？」

逆にオスマンに問い返され、コルベールは頷いた。

「はい。始祖ブリミルの用いた4体の使い魔の1体、ガンダールヴ。その姿や種族は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

始祖ブリミルは、その系統である虚無の強大さ故に、呪文の詠唱が長いという弱点があったといわれる。そして、呪文詠唱中のメイジは無力。その間を守護するための存在がガンダールヴであったと伝説は語っていた。

「そして、ガンダールヴの強さは千の軍勢に匹敵し、並のメイジでは全く歯が立たなかったといわれるが……」

コルベールの言葉を引き継いだオスマンは、思案するように髭を撫でる。

「彼の戦いぶり、せいぜい剣士として一流というのがいいところじやのう。伝説というには大袈裟すぎる」

コルベールは頷いた。あの勝利は、どちらかという彼を平民と侮っていたヴェリエの油断や、あの羽の生えた光の助言によるところが大きそうだ。

「ですが、彼のルーンの状態を見ればそれも仕方がないのかもしれない
「確かにのう」

そこで、オスマンが1つ息をついた。

「全くどうということなのかのう、“3分割されたガンダールヴのルーン”とは」

そう、オスマンが言った通り、タバサの使い魔たちのルーンは、

ルイズの風竜に刻まれた7字のルーンを3分割したものだ。少年の左手に最初の3字が、光る生き物の左の上羽に次の2字が、仮面型の幻獣の触手に最後の2文字が刻まれている。

「ミスタ・コルベール。今折檻せつかんを受けているあの少年、彼は本当にただの人間だったのかね？」

主人であるタバサに罰を受けている少年を魔法の鏡越しに指すオスマンに、コルベールは頷いた。

「はい。念のためディテクト・マジックでも確かめてみましたが、見た目通りただの平民の少年のようでした」

「ふむ、ちなみに、あのけつたいな仮面については？ 人間の使い魔もそうじゃが、生き物でさえないマジック・アイテムを使い魔にしたなど聞いたことがないぞ」

「ええ。あれはどうやら幻獣の一種のようです。実際、ディテクト・マジックにも反応がありませんでした」

「なんじゃと？」

そう言うと、オスマンが目を丸くする。

「と、いうことは、あの仮面が使った魔法は、一体なんじゃ？」

「あつ！？」

そこで、コルベールはその事実気が付いた。

「ディテクト・マジックに反応しない魔法……もしか先住魔法？」

「いや、それはあるまい」

コルベールの疑念を、オスマンは否定する。

「先住魔法を使う者とは、わしも対峙したことがある。しかし、あの仮面もどきの使ったものは全く違う」

言葉を探すように、オスマンは間を置いた。

「先住魔法は、もつと具体的に何をどうさせるかを言葉にし、それを効果として現すものじゃ。しかし、さっきのはどうじゃった？ まるで抽象的な物言いばかりで、しっかりと効果を出しおった」

「では、未知の魔法だと？」

「そうなるのう」

厳粛な顔で、オスマンは口を開く。

「ミスタ・コルベール。この件を口外することはまかりならん」

「は？ 事が事ですし、王室の指示を仰がれた方がよいのでは？」

「事が事だから、じゃよ」

瞳を鋭くするオスマンに、自然コルベールは姿勢を正す。

「この件は、まだまだ不可解なことが多すぎる。彼らが本当にガンダールヴなのか、その内3体は何故3分割などという奇妙な形でルーンが刻まれたのか、そしてあの仮面はなんなのか、そしてミス・タバサは何故3体もの使い魔を得たのか、全く謎だらけじゃ」

「そうですね」

「とにかく、宮廷のボンクラどもにこんなことを教えても、厄介事にしかならんわ。ガンダールヴの力を以って、戦を始めようなどといいたしかねん」

それに、とオスマンは続けた。

「ミス・タバサの境遇を考えると、余計にな」

深いしわの刻まれた顔に、やりきれない様な色が浮かんでいる。その表情に、コルベールは自分の短慮を恥じた。オスマンのいうタバサの境遇については何も知らないが、あのネコにつける様な名前を名乗る少女が並々ならぬ事情を持っているのだろうという事は察していたからだ。

「この件はわしが預かる。他言は無用じゃ、ミスタ・コルベール」

「畏まりました。学院長の深謀には恐れ入ります」

オスマンは遠見の鏡を元に戻すと、窓の外を見て呟いた。

「伝説の使い魔ガンダールヴか……。一体、どのような姿をしておたのだろうなあ」

「あらゆる武器を使いこなしたという伝承ですので、腕と手はあったのだと思われませんが」

「……手のない奴の方が多くないかの？」
「……ですね？」

決闘から3日目の朝、才人たちは厨房を訪れた。

「おはようございまーす」

「おはようございませす」

「邪魔するぞ」

三者三様の挨拶でドアをくぐれば、真っ先に気が付いたシエスタが笑顔で駆け寄ってきた。

「皆さん！ いらっしやい！」

「シエスタ。おはよう」

可愛い女の子からの歓迎に頬を緩めると、メイドの少女が気遣わしげな表情を見せる。

「サイトさん、大丈夫ですか？ その、お仕置きの傷は」

「あ、あはは……。まあ、大丈夫だよ」

誤魔化すように笑って見せるが、自分でも無理がある笑い方になっ
ていることが判った。タバサから受けた罰を思い出すと、それだ
けで体が痛む。

「ヒヤハハ、3日も動けずで、大丈夫もないものだろう」

「うっせ！ つっーか、お前がタバサに余計なこと吹き込んだせい
だろ！」

意地悪く笑うムジユラの仮面に言い返すが、逆に相手は笑みを深
めた。

「うん？ 莫迦な意地を張ってポロポロになって、主に迷惑をかけ
たことは棚上げにするか？」

そう返されると、才人としては言葉に詰まる。

「そりゃ、そうだけだよ……」

「なら、オレを怒鳴るより反省した方がいいな」

ヒヤハハ、と甲高く笑う同僚を、才人は恨めし気に睨んだ。

「まったく、なんでそうお前性格悪いんだよ」

「そうでもないぞ？ 根性が曲がっているだけだ」

「いや、同じだからそれ」

呆れた溜息をつく横で、シエスタはくすくすと笑っている。傍から見ると、漫才じみて見えるのかもしれない。

「それじゃあ皆さん、こちらへどうぞ。コック長も、皆さんに会いたがっていましたよ」

「あのオヤジさんが？」

初日に会った豪快なコックの姿を思い出しながら、才人たちはシエスタの案内に従った。

「よう、来てくれたか！ “我らの剣”に“我らの光”に“我らの面”！」

そして、出会った瞬間に、マルトーの抱擁を受けることとなる。

「お、オヤジさん！？ なにごと！？」

突然抱きしめられて目を白黒させると、マルトーが興奮した口調で話した。

「何事だつて？ そりゃお前、我らが勇者たちの出迎えに決まっているだろっが！」

「勇者たち？」

ナビイが聞くと、マルトーは満面の笑みで頷く。

「おうよ！ お前らはあの生意気な貴族の小僧に真っ向から挑んでいって、その上勝つちまったんだ！ 俺たちにとっちゃ、正に勇者だ！」

熱く語るマルトーに、なんとなく合点がいった。要するに、マルトーは自分たち、特に彼と同じ魔法の使えない才人がメイジに勝つたという事実に感動したのだ。そんな風に喜ぶ理由は、実際にメイジと闘った才人には判る気がした。この世界の平民にとって、貴族はそれだけ逆らい難しい力を持っているのだ。そして、それをいいこ

とに平民を蔑む高慢さも。だからこそ、それを平民が倒したというニュースは、マルトー達にとって喜ばしいことだったのだろう。

「だから、お前らは俺たちにとつちや特別な存在だ！ サイトが我らの剣で、ナビイが我らの光、ムジユラが我らの面だ！」

嬉しそうに言うマルトーに、厨房の面々がうんうんと頷いている。傷つきながらも立ち向かい、最後には手にした剣でメイジを下した才人。その才人に的確な助言をし、魔法を破るための道を開いてみせたナビイ。メイジを逆に魔法で一泡吹かせ、更に被れば平民でも魔法が使えるようにしてくれるムジユラの仮面。人気が出ないはずはなかった。

「（オレはむしろ勇者と敵対した側なんだがな）」
ムジユラの仮面が何か呟いていたが、小声だったために誰にも聞こえていない。

「なあ、お前は何処で剣を習った？ 何処で習えば、メイジを倒せるような腕前になるのか、俺にも教えてくれよ」

マルトーが、才人の肩に腕を回して聞いてくる。それに対し、才人は眉をひそめた。

「それがよく判らないんだよ。剣術なんてやったことないのに、なんでか剣を握ったら体に力が湧いてきたんだ。それに、あれは俺だけの力じゃなくてナビイのアドバイスのおかげでもあるし」

正直にそういうと、何故かマルトーは顔を輝かせる。

「お前たち！ 聞いたか！ 本当の達人というものは、こんな風に己の腕前を誇ったりしないものだ！」

勝手に盛り上がったコック長の声が、厨房中に響き渡る。それとともに、そこかしこから感嘆のざわめきが聞こえてきた。

「本当にそんなんじゃないんだけどなあ」

持ち上げられて悪い気はしないが、ここまで興奮されると少し心苦しい。なんだか、人の良い大人をだましている気分だ。

「ただ、なんだか判んない力が勝手に湧いてきたっただけで……」

「火事場の莫迦力というやつか？」

ムジユラの仮面に聞かれ、才人は考えてみる。

「うーん、そういうのともちよつと違う気がするな」

そこで、あの時左手のルーンがぼんやりと発光していたことを思い出した。もしかすると、このルーンが何か関係しているのだろうか。

再び思案に暮れそうになるが、それよりも早く胃袋が自己主張をはじめめる。

「あのさ、朝飯もらえるかな」

「あ、はい！」

才人の頼みに、傍で控えていたシエスタが笑顔で応えた。

「さあ、サイトさん。こちらへどうぞ」

「あ、ありがとう」

シエスタが引いてくれた椅子に座ると、そこへ次々と豪華な料理が並んでいく。

「おお、すっげー！」

その豪華さと食欲をそそる香りに、才人の胃袋が早速逸りはじめた。

「さ、どうぞ！」

「たっぷり食ってくれ！ 我らの剣よ！」

「んじゃ、遠慮なく！ いただきまーす！」

大きめに切った熱々のチキンステーキを一噛みする。途端、ジュシーな肉汁と甘酸っぱいソースの味が広がり、才人の舌を心地よく刺激した。

「うまい！ いつもうまいけど、今日はまた一段と！」

「うふふ、おいしいですか？ サイトさん、病み上がりなんですから、しっかり栄養をつけてくださいね」

愛らしく微笑むシエスタに対し、一方才人は苦笑する。

「はは、決闘の傷じゃなくてお仕置きの痛みで3日もくたばった
つてのが情けないけど……」

頭を掻きながら言うと、シエスタが何か思いついた顔をした。

「そういえば、サイトさんは普段どちらで寝ておられるんですか？

お見舞いの時にミス・タバサのお部屋に入れていただきましたけれど、サイトさん用のベッドがあったわけではありませんでしたし」

「あー、その……」

不思議そうに首を傾げられ、才人は少し返答に困る。しかし、結局言い訳が思い付くことも無く、正直に話すことにした。

「実はさ、タバサと一緒にベッドに寝かせてもらってるんだ」

瞬間、シエスタは目を見開く。

「サイトさん！ いけません、そんなの！」

そうかと思えば、猛烈な勢いで才人に詰め寄ってくる。

「年頃の女性と男性が寢床を共にするだなんて！ ましてや主人と
使い魔なのに！ もう倫理的にも主従関係的にもダメダメです！」

「お、おう」

何故か必死の形相で迫るシエスタに、才人はたじたじになった。

言っていることはその通りだとは思うが、迫力が圧倒的すぎる。シエスタは見るからに真面目な感じであるし、こういうことにはうるさいのかもしれない。

「でも、ダメっていわれても他に寝る場所があるわけじゃないしなあ」

ステーキを口に運びながら呟くと、ナビィが声を掛けてくる。

「それなら、間に合わせの寢床を作るっていうのはどう？ ワラの
上に毛布を敷くとか」

「ワラでしたら、馬の餌用のものが用意できますよ」

妖精の少女の提案にメイドの少女が乗ってくるが、提案された才人は渋い顔を作った。

「うーん、確かに代用品にはなりそうだけど、なんかニワトリ扱い

が加速しそうだな」

何の因果か日本人の名前イコールニワトリの名前と思い込んでいる主人の勘違いに、才人は呻く。ニワトリの巢の様な藁の寝床なんて、ますますそのイメージを助長しそうだ。

「なんとというか、ごめんね」

「まあ、今更仕方ないけどさ」

体ごと頭を下げるナビィに、才人はそう返した。彼女の発言が本で起こった誤解であるが、決闘で助けてもらった恩を考えるとこの程度で怒ることはできない。それより、今は寝床をどうするかだ。

「フローリングじゃなくて畳だったら、そのまんま寝っ転がれるんだけどなー」

故郷のまま座って寝れる床を思い出し、才人は郷愁の念を感じた。

「ほう、チキユウとやらにも畳があるのか？」

そこに、ムジュラの仮面が反応してくる。

「もって、タルミナってどこにも畳あんのか!？」

「一般的ではないが、町の剣術道場の上座に少し敷いてあるぞ」

「おいおい、えらく和風だな……」

かなり意外だった。召喚初日にタルミナのことを聞いた限り、ハルケギニアと同じヨーロッパ風の世界を想像していたのだ。

実際には、タルミナもハイラルも地球で例えるとヨーロッパを基調に世界各地の文化が雑多になった様な土地柄であるのだが、流石にそこまでは才人が知る由もない。

そこで、才人はふと思いついた。

「そうだ、それならさ、お前の力で畳作れないか？」

「ああ、その程度ならできるだろう」

あっさりと肯定され、才人は軽くこぶしを握る。

「よっしや、それなら後で頼む！」

「でもそれなら、ベッドの方を作った方が早いんじゃない？」
ナビィに言われるが、才人は首を横に振る。

「いや、やっぱり畳の方がいいよ。どうせなら故郷のもんを感じられる寢床のがいいし」

言いながら、才人は切り分けた鶏肉をほおばった。地球にいた頃はベッドで寝ていたが、いざ離れると日本を感じられるものを求めてしまう。人間の性であった。

「しっかし、ホントにうまいなこれ。タバサたち、いつもこんないい肉食べてんのか」

流石は貴族、と妙に感心していると、シエスタが小さく笑う。

「最近は特別ですよ。もうすぐ“フリッグの舞踏会”ですから、それに備えて今の時期から材料も普段よりいいものを仕入れる様にしているんです」

「フリッグの舞踏会？」

尋ねてみると、シエスタは答えてくれた。

「毎年の春に行われる舞踏会ですよ。なんでも、新入生の方々を歓迎するレクリエーションとして開かれるとか」

そこまで言うと、シエスタは夢見る様な表情になった。

「それから、そこで躍ったカップルは結ばれるという伝説があるそうですよ」

ロマンティックですよねー、とうつとりとした声で言うシエスタに、才人は苦笑した。何処の世界でも、女の子はこの手の話が好きらしい。

その話をしている時、シエスタがちらちらと才人の方を見ていたことに全く気付かないのは、才人の才人たる所以である。

「舞踏会か。タバサ様、どんなドレスを着るのかな？」

楽し気なナビィの呟きで、才人もそのことに気が付いた。

「タバサのドレス姿か、興味あるな」

食事の手を止めて、ドレスで装ったタバサの姿を想像してみる。

黒を基調にし、レースやフリルで飾られた、俗にいうゴシック・アンド・ロリータ系のドレスをまとったタバサ。彼女の小柄な肢体が小悪魔的なドレスに包まれ、更にスカートのエンドの端を掴んで会釈する姿を想像するだけで、口許がだらしなく緩んでいく。

「っ、おいおいおい！ だから自嘲しろっての俺！ タバサに欲情したりしたら、もう色々と終わっちゃうじゃねーかよ！

そこまで想像　あるいは妄想　してはつと我に返り、才人は必死で頭を振った。2つしか離れていない少女に対し、その思考はかなり失礼であるのだが、本人は気付いていない。

「なんでこいつは時々首を振りだすんだ？」

「癖なのかな？」

そして、同僚たちの呟きにも、まるで気付いていないのだった。

「まあ、あの愛想も素っ気も無い小娘が着る服に迷う姿など、想像できんけどな」

「いえてんなー」

ムジユラの仮面が言うと、雑念（ロリコンの呪縛）を振り切った才人は同意する。まだ付き合いは浅いが、タバサという少女があまりおしゃれに関心はなさそうだということは気が付いていた。

「服といえば、俺も着替えがほしいな」

着ているパーカーを軽くつまみ、ぽつりと言ってみる。ムジユラの仮面の力ですぐに洗濯はできるが、着たきりスズメではどうにも落ち着かない。

「着替えの服くらい、オレが作れるか？」

「うーん、置はともかく、こういうのはプロに任せたいな」

ムジユラの仮面の言葉を、軽く拒む。彼には悪いが、餅は餅屋というやつだ。

「ルーンのことも気になるし、タバサに相談してみるか」

）
続
く
）

〈第12話 伝説：1 + 1 / 3 × 3〉（後書き）

以上、今回はここまでです。

と、いうわけで、今回やっと才人たちのルーンの正体が明らかになりました。さんざんひっぱった拳句、割と安易で申し訳ない（笑）。ゼロ魔はともかく、ゼル伝的には伝説の力の分割はお約束です。

原作のロマリア組の言動を見る限り、虚無が何度も蘇るのは何らかの必要があつてのことと解釈できましたので、それならガンダールヴが大量に必要な理由があるのならば虚無以外の使い魔がガンダールヴ化することもあるんじゃないか、というムチャクチャな理屈でこうなりました。タバサが虚無でないのは、あくまで虚無でなくガンダールヴが必要だからです。

前回才人のルーン発動場面が弱々しかったのは、ルーンが3分割されてたから、つまり、本来の3分の1の力しかなかったからです。なんでルーンが不完全なのにガンダールヴとしての機能は果たせているのかは、虚無の呪文が途中でも発動するのと同じ理屈と申してください。

なんでこんな訳のわからない状態になっているのかは、その内ナビィやロマリア組が推理する予定です。

今回はジュリオ視点からスタートです。

2011 / 08 / 16 ルビ修正

2011 / 10 / 02 誤字修正

〈第13話 使い魔たち、街へ〉

ハルケギニア大陸の最南方、南海に面した小さな半島群。無数の都市国家がひしめくこの土地に、ロマリア連合皇国は存在する。始祖ブリミルの直弟子、フォルサテにより開かれたといわれるこの国は、ハルケギニアのブリミル教の総本山として君臨していた。ハルケギニアの全寺院を束ねる宗教庁、そして、教徒たちの教えの全てを司る神の代弁者たる教皇、聖エイジス32世。この両者の存在することが、ロマリアを始祖ブリミルへの信仰の要となり、この国が持つ“光の国”の称えの所以となっていた。

「まったく、“お姫様”に会いに寄ってたら、すっかり遅くなってしまうったな」

愛竜アズーロに跨りながら、この国の神官たるジュリオは独りごと。そのことで受けるであろう小言を思うと、つい溜息が洩れた。うんざりした表情を浮かべるその顔を向けた先には、宗教庁たるロマリア大聖堂が見える。巨大な本塔を中心に、五芒星を描くように並んだ5本の塔とそれを囲む城壁。トリステイン魔法学院を知る者が

初めてこの大聖堂を見れば、その両者のよく似た姿に驚くだろう。それはそうだ。トリステイン魔法学院は、この聖堂を真似て建てられたのだから。もつとも、塔の高さがそれぞれ5割増しであることをはじめ、その大きさは犬と馬程も違う。

ロマリアの中心たるこの大聖堂は、所詮小国であるトリステインの魔法学院よりも遥かに大きな役割を担い、大きな規模を要するのだ。

大聖堂の中庭に降りると、付近にいた神官たちが慌てた風に駆け寄ってくる。

「助祭枢機卿殿！」

「お帰りなさいませ！」

愛想笑いを浮かべた神官たち　その多くは巫女である　が、次々と群がってきた。本来、不吉の象徴といわれる月目を持つジュリオが神官の法衣を着ることはまず許されない。しかし、“ある事情”からジュリオは教皇の信頼が厚く、助祭枢機卿という高位の役職についていた。

「ええ、ただいま戻りましたよ。皆さまもお疲れ様です」

軽く挨拶を返すと、誰にともなく問い掛ける。

「聖下は執務室においでですか？」

「はい、そう伺っております」

教えてくれた巫女に礼を述べ、ジュリオは主の許へと向かった。

大聖堂の中を抜け、重厚な扉の前に立つ。その扉の向こう側こそ、全神官たちの頂点、教皇聖エイジス32世の執務室だった。

しかし、ドアの前に立ってみれば、中からその称号にそぐわない談笑めいた声が聞こえてくる。ジュリオは苦笑しながら扉をノックした。

「はい！」

すると、元気のいい声が返ってくる。それとともにドアが開き、小さな少女が顔を見せた。

「あ！　ジュリオさま！」

「やあ、また聖下に読み書きを教わっていたのかい？」

少女に笑い掛けてあげると、顔を真っ赤にさせた。あどけなくとも、女性は女性ということらしい。苦笑混じりで少女の頭を軽く撫でてあげると、そのまま中へと入った。

「失礼します、聖下」

おざなり気味に一言掛けながらドアをくぐると、そこは本の山だった。部屋の壁は一面に高い本棚が並び、数々の書物がそこに収められている。宗教書以外にも様々なジャンルの書物が雑多に並んだ

その様子は、さながら図書室や学者の研究室といった風情。とてもではないが、神官の最高権威たる教皇の執務室には見えなかった。その印象を更に強めるのは、部屋で本を読んでいるたくさんの子どもたちだ。一様に粗末な服を着た子どもたちは、1人の青年の話を聞きながら嬉しそうに笑っている。

「おれ、せいかにおぼえがはいってほめられちゃった！」

「わたしも！ わたしも！」

元気にお喋りをしている少年少女たちをたしなめれば、そこでその男性はジュリオの存在に気が付いた様だった。それから、大振りの机の上に乗った時計に目をやる。

「おっと、もうこんな時間か。皆、今日のお勉強はここまでです」
途端、えー、と不満そうな声が唱和された。男性は苦笑すると、あやす様な声音で子どもたちに言って聞かせる。

「大丈夫、明日はもっと面白いことをたくさん教えてあげますからね」

男性が言えば、子どもたちの顔がぱつと輝いた。余程男のことを信頼しているのだろう、明るい顔で、少年少女たちは執務室を後にしていく。

子どもたちがいなくなると、ジュリオは男性に向き直った。まるで、召使いの様なラフな姿の、若い男。中性的な、しかし輝く様な美しさを持つ、金髪の青年。その不可思議な、威光と呼ぶべきものを湛えた相手に向けて、ジュリオは1つ会釈をした。

「只今戻りました、教皇聖下」

そう、その男こそがロマリア皇国教皇、実質上ハルケギニア最高の権力者、聖エイジス32世ことヴィットーリオ・セレヴァレその人だった。ヴィットーリオはジュリオの眼を見返すと、咎める様な色その眼に宿す。

「ジュリオ、ずいぶん遅かったですね」

静かな、それでいて迫力のこもった声。中性的な外見からは想像

もつかない程の威圧感が叩きつけられるが、ジュリオは平然と受け流した。

「いつも予定通りにいくのでは、つまらないでしょう?」

肩をすくめ、軽口で返す。とても主人に対するものではない口振りに、ヴィットーリオは怒るでもなく首を振った。

「何処で寄り道をしていたんですか?」

「ええ、隠れた姫君の退屈を紛らわせて差し上げに」

それを聞き、ヴィットーリオの表情が幾分和らいだ。ジュリオがかの姫君に会いに通う理由は、彼もまたよく理解しているためだ。

「それでは、報告を聞きましょうか」

その命に、ジュリオも表情を引き締める。

「トリステインの担い手が、風韻竜の幼体を召喚。ルーンはガンダールヴでした」

そう告げると、ヴィットーリオは軽く驚いた顔をした。

「風韻竜がガンダールヴとは……まあ、かの種族の能力を考えればおかしなことでもないのでしょうか」

「おかしいのは、むしろ青の姫君の召喚した連中なんですよ」

1人納得するように言うヴィットーリオに、ジュリオは言葉を続ける。

「どういうことですか?」

怪訝とするヴィットーリオに、ジュリオは説明していった。青い髪の少女、タバサの召喚した、3分割されたガンダールヴのルーンを持つ使い魔たちのことを。

「それは確かなのですか?」

聞き返す教皇に、真面目な顔で頷く。それから、ヴィットーリオは思案するように顎に手をやった。

「担い手にあらざる者に召喚された、そしてルーンを3つに分けられたガンダールヴ……」

ヴィットーリオが悩むように独りごちる中で、ジュリオは尋ねる。

「聖下、私に何か仰っていないことがおありなのですか？」

冗談めかしながら、しかし視線は鋭く教皇を見据える。

「我々が揃えるべき、“四の四”。しかし、ガンダールヴが1体以上現れることがあるなど、僕は伺っていませんでしたが？」

声を厳しくさせながら、ジュリオは主の許へ歩み寄った。声音こそ静かに保っているが、その心情は怒りに揺れている。教皇は今回の様なケースについて何も自分に教えていなかった。それは自分の教皇に対する信頼を裏切ることも同じだったからだ。

「ジュリオ、その使い魔たちは、それぞれチキユウ、ハイラル、タルミナという世界から来たと言っていたのですね？」

しかし、ヴィットーリオはジュリオの糾弾に動じず、逆に聞き返してくる。それにジュリオは眉をひそめながら頷くが、そこでヴィットーリオが杖を振り呪文を唱えはじめた。

すると、空間の一部が歪みはじめ、やがて円盤型の光が生まれた。それから、その円盤はこの場ではない、それどころか、“この世界ではない景色”を映し出していく。

そこに映されていたものは、奇妙な形状の建造物。2つの四角い塔の様なもの、魔法ではまず造ることが叶わないであろう、精巧かつ大規模な建物がまず見える。それを基礎に、渡り廊下らしきものが縦横に伸び、最上位の渡り廊下の片側に丸いものを取り付けられていた。窓があるところを見ると、どうやらその球体も何かの部屋になっっているのだろう。

「チキユウという世界については、貴方も知っていますね」

問い掛けられ、ジュリオは頷いた。何故ならその“チキユウ”という世界は、今ヴィットーリオが浮かべた円盤の中に浮かぶ景色の世界なのだから。

それがチキユウという世界の、極東の島国の臨海都市にある放送

局であることまでは、流石に2人が知る由はない。

「私も、今回の様なケースは知りません」

感情を窺わせない表情で、ヴィットーリオが告白する。ジュリオがそれを疑わしく思うと、ヴィットーリオが首を横に振った。

「この期に及んで、貴方にこんな嘘はつきませんよ」

言いながら、教皇は異世界を映す窓へ視線を移した。

「私の知識も、所詮過去の文献から得たもの。この窓に映る景色が、かの“工芸品”の世界であるということも、全ては先人たちの教えにより知りしこと。所詮は前例に基づく知識である以上、いつかは前例なき事態に直面することもまた然り」

そこまで言うと、ヴィットーリオは憂いのこもった息をつく。

「これまでであれば、四の四を揃えることが第一の目標でありましたが……」

難し気に眉根を寄せる教皇。珍しく苦悩を見せる主に、ジュリオは沈黙を続けた。

「今、世界はそれとは別に“神の盾”を求めているのかもしれないね」

口を閉ざすジュリオの目の先で、ヴィットーリオが中空の窓に手をかざす。

「この世界に、ここに映るチキユウ、そして新たに知ったハイラル、タルミナという世界」

独りごちて、ヴィットーリオは小さく頭を振ってみせた。

「世界とは、一体幾つあるものなのでしょうか……」

「あら、タバサ？」

週の初めであり休日でもある虚無の曜日朝、なんとはなしに学院の中庭に来ていたキュルケは、使い魔3名とともにいる親友の姿

を見つけて驚いた。

「おはよう」

「よう、キュルケ。おはよう」

「おはようございます」

「ツエルプストーか、おはよう」

4通りに挨拶を受け、キュルケも返事をする。

「ええ、おはよう。でもタバサ、貴方が虚無の曜日に部屋を出るなんて珍しいわね？」

不思議に思つて、尋ねてみる。読書好きなタバサは、授業のない日は1日本を読んで過ごすのが常だった。図書室以外で彼女が外出するとは滅多にないことだ。

「服を買いに行く」

「服う!？」

そして、返つてきた言葉で更に仰天する。年頃の少女ならば服を買いに行くなんて当たり前のことだが、それがタバサとなると話は別だ。彼女が不必要に着る服を余分に欲しがるなんて事態は、前代未聞だった。驚愕するキュルケに対し、タバサは事も無げに続ける。

「私のじゃない。彼の」

言つて、青髪の少女は隣のサイトを指した。

「ああ、そういうことね」

どうやら、サイトの着替えを買いに行くだけらしい。ほつとした様な、親友がおしゃれに目覚めたわけではなくてがっかりした様な、複雑な気分だ。

「でも、それならあたしも一緒にいいかしら？」

しかし、すぐに気分を切り替え、キュルケは提案する。今日はこれといって予定はないし、仮に誰かとデートの約束をしていたとしても、忘れる様な約束ならしていないのと同じだ。来週のフリッグの舞踏会のために新しいドレスやアクセサリーを探しておくたかったのだ。

そして、キュルケの言葉にタバサは小さく頷いてみせた。

「ありがとう、タバサ」

短く礼を言い、キュルケはタバサを抱きしめる。

「お2人とも、やっぱり仲がいいですね」

微笑まし気な声でナビィが言くと、傍らに連れていたフレイムが相槌を打つように鳴いた。

「アハハ、フレイムもそう思うんだ」

ナビィがそれに答えると、フレイムがまたキュルキュルと鳴く。

「へえ、大変だったんだね」

そして、次のナビィの言葉に、キュルケは首を傾げた。ただの相槌ではなく、本当に会話しているようだ。

「ナビィ、貴方、フレイムの言っていること判るの？」

問えば、ナビィは頷く様に体を傾ける。

「キュルケ様、昨夜たくさんの人と同じ時間にデートの約束していて、すっかり忘れていたんですって？」

笑いを噛み殺している様な声で言われ、流石にキュルケは頬が熱くなった。

「な、なんでそのこと！」

「フレイムが、昨夜はちよつとした騒ぎだったって言ってますよ」

そう言われて、キュルケはフレイムの頭を軽く叩く。

「もう！ 駄目でしょう、フレイム。そんなこと他人に言いふらすなんて」

子どもに言い聞かせる様な声で叱責すると、フレイムの首が申し訳なさそうに縮こまった。

その遣り取りを見ていたサイトが、感心したように呟く。

「すごいな、本当にフレイムの言葉判るのか」

「フレイムだけじゃないよ、他の使い魔の皆ともね」

少し得意気な声で、ナビィが答えた。

「使い魔の皆が話してる言葉、多分何か精霊と近しい種族が使って

た言葉なんじゃないかな？妖精のワタシには聞き取り易いわ」

それを聞き、ムジユラの仮面が言葉を発する。

「まあ、浮遊霊の声さえ聞きとるのが妖精だからな。それくらいはできるわけだ」

その発言に、タバサが反応する。

「浮遊……霊？」

「うん？ まあ、要するに死んで漂っている魂だな」

なんでもない様な調子で言うムジユラの仮面を、何故かタバサは少し表情を硬くした。そこで、ムジユラの仮面の眼に楽し気な色が浮かぶ。

「なんだ？ 亡者の類が恐いのか？」

「違う」

「ふうん？ まあ、どうでもいいことだな」

感情を窺^{うかが}わせないタバサの反論ににやついた様な眼で応じた後、ムジユラの仮面はサイトに向き直る。

「ではヒラガ、被れ」

「？ おう、了解」

言われて、黒髪の少年が異形の仮面を被った。

「今度は何するんだ？ 服買いに行くだけなのに、なんか魔法使うのか？」

不思議そうに聞くサイトには答えず、ムジユラの仮面が言う。

「主でもツエルプストーでもどちらでもいいが、今から行く街のイメージをしっかりと思い浮かべられるか？」

その質問に、キュルケとタバサは顔を見合わせた。問いの意味は判るが、意図がよく判らない。それがどうかしたのか、とキュルケが聞くより早く、タバサが答えていた。

「できる」

「そうか。ならヒラガ」

ムジユラの仮面が声を掛けると、サイトが頭に手をあてがう。

「ん……またなんか音楽が……これ、こないだのいやしの歌っての仲間か？」

「仲間というのは語弊がありそうだが、特殊な力を持つ曲という点では確かに同じだな」

言つて、ムジユラの仮面は説明した。

「“大翼の歌”といつてな、自分の望みの場所に瞬間移動するための歌だ」

「おお、ワープってことか！？　　すげえ！」

サイトが興奮した声を上げ、キュルケもまた驚きの眼を仮面の使い魔に向ける。音楽だけで瞬間移動が可能とは、ムジユラの仮面の世界は一体どうなっているのか。

「そういう曲だからな、移動するためには、最低行き先のこと判断つてなければならんだよ」

「だから街のイメージを？」

タバサの問いに、ムジユラの仮面はそうだと答えた。

「そんじゃ、俺はタバサたちが街のイメージ思い浮かべたら、この曲吹けばいいんだな？」

「ああ」

そこで、サイトはよしきたとばかりに指笛の用意をした。そして、タバサは街を思い浮かべているのか、眼をつむって集中している。つられ、キュルケも街の風景を頭に浮かべた。

「サイト、吹いて」

「了解！」

意気揚々とばかりにサイトは答え、短く口笛を吹いた。シンプルながら、何処か力強い躍動感のある曲だ。

そして、それが鳴り響いたその刹那、純白の光が巻き起こった。

白銀に輝く、翼の形に煌めく光。それが羽ばたく様に広がると、すぐさま閉じて一気にキュルケ達を包み込んだ。そして、光が凄まじい速さで回転を始め、純白の繭まゆを形作つたかと思えば、やがて急な浮遊感を感じる。

そして、フェオの月、ティワズの週、虚無の曜日、午前8時42分。鳥の羽ばたきの様な音とともに光が掻き消えた時、中庭にキユルケ達の姿はなかった。

トリステイン王国王都トリスタニアは、魔法学院から馬で3時間程の距離に存在する。大通りたる

ブルドンネ街は国有数の都市のそれとしては狭いものの、活気においては首都の名に恥じないにぎわいを誇っている。その突き当たりを高々とそびえるトリステインの王宮の威光を受けながら、貴族、平民を問わず人々は春の休日を謳歌していた。

そんなうらかな虚無の曜日の午前8時42分、トリスタニアの一角にある噴水付近。恋人たちや友人たちの会話声やら露天商の宣伝やらで喧騒高らかな場所。人々がめいめい休日の朝を過ごす中、俄に、しかし大きく空気が揺れはじめ。

唐突ながらも、無視するには大きな異変に、噴水周辺の人々は不思議そうに辺りを見回した。

「あれ？」

そして、その内1人が、上空に輝く何かを発見した。白く光る、球の様なもの。その声に他の人々も空を見上げる頃には、それは既にかかなり近づいていた。

「うわあっ!?!」

「な、なんだっ!?!」

そして、凄まじい轟音と土煙を上げ、その球体は街の石畳に墜落する。瞬間、鳥の羽根の様なものが周囲に舞い散り、そして消えた。突然の事態に周囲の人々が混乱していると、やがて土煙の中に影が浮かびはじめ。よく目を凝らしてみれば、そこには3人の男女

と一匹の幻獣が倒れていた。

「お、おい、ムジユラ……」

最初に体を起こしたのは、仮面を被った黒髪の人物。声や背格好からして少年と思わしきその人物は、何やら恨みがましい声を出している。

「こりゃ、一体どういうこった？」

静かながら怒気の籠こもった声が放たれると、それとは別の声が上が。男とも女ともつかない、高くて中性的な声だ。

「うん？ なんのことだ？」

「なんのこと、とは、随分じゃない？」

嘲笑めいた余裕がある声に対し、今度は女性の声が発せられた。見れば、貴族らしき赤毛の少女が身を起こしている。

「確かにトリスタリアには着いているみたいだけど、なかなか素敵な着地よね？」

赤毛の貴族は、その美しい顔を怒りに満ちた笑みで彩っていた。

その隣では、虎程もある大きさのサラマンダーが唸っている。そんな少女と火トカゲへと、再び中性的な声が答えた。

「ああ、こうなるだろうとは予想していたな」

そこで、3番目の人影が体を起こす。やはり貴族と思わしき青い髪の少女で、先の2人とは違い穏やかな様子で口を開いた。

「予想していたとは？」

「なに、この曲は本来特殊なフクロウの像と契約を交わし、それからその像の場所へと移動するための曲だ。そういう手順を踏まず、その上像のない任意の場所へとワープするのでは、なんらかの形で不安定さが表れるとは思っていた。むしろ、墜落まがいで済んだだけましというところだ」

「じゃあ、やる前にそう言えよ！」

その怒号を皮切りに、少年と赤毛の少女が怒りの叫びを放ちだすのを、周囲の人間たちは啞然と眺めるのだった。

「ったく、一張羅いっちらふが埃まみれじゃんかよ」

「ぼやくなよ、これから代わりを買いに行くんだろっ？」

大通りを歩きながらのサイトの文句に、ムジユラの仮面が飄々（ひょうひょう）と答える。その会話を聞きながら、キュルケも割つて入った。

「まったく、貴方あなたつて本当に何を考えているのか判らないわね」

「判らないなら教えてやる。オレは怒りや悲しみ、怯えに歪んだ顔を見るのが好きなのだ」

「アホかっ！」

サイトが呆れと義憤が半々になった様な声を上げ、一方ナビイが疲れた様な溜息をつく。

「ムジユラつて、確かにモンスターの割には邪悪なものがないって判るんだけど、その代わり良心とか倫理感とかも無いんだよね……」

「それでいて力はムチャ強いつて、もしかして最悪なんじゃねーか？」

不平を洩らす同僚たちに、ムジユラの仮面は余裕の笑みで答えた。

「色々言っがな、ヒラガにナビイ。オレがいることあやかで与る恩恵と、オレの根性曲がりまがりで被る不利益を比べて、どちらが大きいと思う？」

そう言われて、サイトたちは黙ってしまう。高速で地面に激突する様なとんでもない到着ではあるが、宣言した通りトリスタニアへ瞬間的に移動するという点はきちんと果たして見せた。意地の悪い行動をそこかしこで見せるとはいえ、彼の能力が有用であることは事実なのだ。

「食えない……」

隣で沈黙を保っていたタバサが、小さく呟く。その声は何処となく苦いものを感じ、キュルケは親友の頭を優しく撫でた。規格外な上に根性悪な使い魔を召喚してしまい、これから彼女は苦労しそう

だ。

「っと、着いたわよ」

そうこうしている内に、やがて一行は目的地たる服屋へとたどり着いた。その店を一目見たサイトが、感嘆の声を上げる。

「おー、結構大きい店だな」

「ええ、王宮も御用達の服屋ですもの」

言葉の通り、その服屋は立派な店構えをしていた。両隣の建物に比べて2、3割増しの規模を持ち、入口や看板も優美な装飾で飾られている。王都の中でもそうそうない大店舗だった。

墜落で乱れた身なりを整えて一行が店内に入ると、中はやはり大勢の客でにぎわっている。王室が鼻^{ひいき}にしているだけあり、客層の大半は貴族だった。

キュルケ達が適当に服を見て回っていると、店員の1人が声を掛けてくる。

「いらつしゃいませ、お嬢様方。どのようなものをお探しでいらつしゃいますか？」

営業スマイルたつぷりの店員に、タバサがいつものポーカー・フエイスで答えた。

「彼に」

最初にサイトを杖で指し、次いでムジュラの仮面を指し示す。

「この仮面に似合う服を」

その説明に、キュルケは小さく脱力した。

「ちよつとタバサ、ムジュラに合う服なんてそうそう」

「畏まりました」

「あるの!？」

思わず、叫びを上げる。貴族向けの服がメインであるこの服屋に、異形の仮面とセットに出来る服があるとは思ってもみなかった。驚くキュルケをよそに、店員は「少々お待ちを」と一言断って店の奥へと消えていく。それから間もなく、赤いビロードで包まれたキャ

スター付きのケースを押ししてきた。

「こちらなら、そちらの仮面とよくお似合いかと思えますよ」

言いながら、2メートル程の高さの細長いケースを包むビロードを、店員が一気に引き剥がす。そして、露わになったガラスケースの中央に、一行は啞然とした。

そこに収まっていたのは、一揃いになった服だった。しかし、ただの服ではない。上着はやたら派手なギンギラのサテンイエローを基調にし、なんのつもりか異様にたくさん鳥の羽とレースが取りつけられている。その上、ケースを回転させてみれば、獅子の体にワシの羽を持つ幻獣マンティコアの絵が背中にてかでかと描かれていた。ズボンもまたすごい。色自体は白地と上着よりみだが、何故か両腿の部分に1匹ずつ竜が躍っている。おまけに、その竜の目が宝石で出来ているのだから困る。後部に見え隠れするのは、もしかなくても尻尾らしい。そこまでくれば、帽子もただで済むわけはなかった。つば広なのは許せるが、七色に光るのはどうということだろう。光の加減で浮き出るドクロは、もっとどうということだろう。頂上部分に取り付けられた水晶製のドクロは、とことんどうということだろう。とどめめとばかりの宝石たつぷりな蝶のマスクに至っては、もはや笑う以外に応じる術はあるのだろうか。

「いかがでしょうか？」

呆気にとられているキュルケ達に、店員が営業スマイルで感想を求めた。キュルケ達が言葉に困る中、タバサが短く答える。

「突き抜けている」

そのコメントに、キュルケも内心で同意した。タバサの言う通り、間違いなく突き抜けている。果てしなく間違った方角へと向けて。

「この服は、元々当店が仕立屋としてお客様の注文されたもののみを作っております頃にデザインされたものでして」

そんな現在の人類のファッションセンスに真っ向から宣戦布告するかのごときその衣装のことを、その店員は聞いてもいないのに語

りはじめる。

「かの伝説の騎士“烈風”のカリンが纏ったと言われる由緒正しいものであり、当時デザインされたものそのままに再現した品なのです」

何処か誇らし気に店員が言つと、サイトが声を発した。

「烈風のカリンって？」

「数々の功績を残した、トリステイン史上最強と名高い騎士」

タバサの説明に、キュルケも頷いた。

「あたしも聞いたことがあるわ。でも、噂の烈風殿ってどういう趣味だったのかしら？」

デザインした方もした方だけど、と付け加え、キュルケは乾いた笑みを浮かべた。

その瞬間、某王宮と某公爵家において1つずつくしゃみが起こつたのだが、一行が知つたことではもちろんない。

「この服をかかぬ勇者がお召しになられた時、当時の店主は感動に打ち震えたと言われているのですよ」

一種夢見る様な調子で店員は語る。それは、感動というよりは実際にこれを人が着た姿に吐き気を催したのと、注文されたのだからといえこんな服を貴族に着させて逆鱗おのに触れないかと恐れられたので震えていただけだろう。実際の場面に立ち会っていたわけではないが、それは十二分に推測できた。

それにしても、この服の実物を見ながらそこまで持ち上げられるとは、この店員かなりの大物なのかもしれない。

「この蝶のマスクの代わりにそちらの仮面を使っていたらいいでも、全体的により調和が取れるかと存じます」

締めくくる様に言われ、一同はあいまいに頷く。確かに、ムジユラの仮面が蝶のマスクに代わつてこの中に入ったとしても、さしたる違和感はないだろう。しかし、それは異形の仮面が奇怪な服装と

マッチするというだけで、不気味さを二乗にすることではない。

形容しがたい空気が流れる中、サイトが青い顔で口を開いた。

「これ、俺が着んの……？」

語る声が恐怖に震えていた。なるほど、実際にこれを着るかもしれないのは彼なのだから、その気持ちはよく判る。

「それはない」

そこでタバサが否定の声を上げ、サイトが安堵を見せた。やはり彼女もこの服はないと思っっているようだ。そう思っていると、青髪の親友はまた口を開く。

「サイトが着るには小さい」

言われ、キュルケ達は改めて服を見た。デザインの奇妙奇天烈さに囚われて気が付かなかつたが、確かにこの服はかなり小さなサイズにつくられていた。伝説の騎士というので大柄な偉丈夫を想像していたが、烈風のカリンは意外に小柄だったのかもしれない。そういえば、かの騎士が実は男装の麗人だったらしいという噂をキュルケは思い出した。

「残念」

そして、続いた言葉にキュルケは眼を見開く。

「ちよいとご主人様？ サイズが合ってたら、俺にこれ着せてたわけ？」

サイトの問いに対し、タバサは無言で返した。

「いや、そこで黙らないでくれよ！」

「ちよっとした冗談」

「た、頼むからさあ……」

タバサの返答にサイトが脱力する横で、ムジユラの仮面が愉快そうに言う。

「“メイジを知るには、使い魔を見よ”というのだったか？ オレを召喚しただけあって、主もなかなかいい性格をしているじゃない

か

「心外」

珍しくタバサが微妙に嫌そうな顔をすれば、ムジユラの仮面がますます笑った。その遣り取りに、キュルケは呆れながら続きを促す。

「冗談はそれとして、サイトの着替えはどうするの？」

言ってみれば、聞いていた店員が愛想よく答えた。

「こちらがお気に召されないのであれば、他にも用意がございますよ」

言つて、また一言断つてから店員は突飛な衣装のケースとともに奥へ行き、また新しいケースを運んでくる。

「こちらなどはいかがでしょう？」

次に持つてこられたのは、2枚重ねの貫頭衣だった。上着の裾は表裏とも真ん中から左右に裂けるような形をしていて、裾の端は腿の辺りまで伸びている。ゆったりした袖は手が隠れる程に長く、袖口から細長い布が数本伸びていた。模様は黒地の上に青緑のラインが幾何学模様を描く感じで、同系統の模様の描かれた赤銅色のサーコートが長短2枚重ねで掛けられている。上着の下の服もやはり黒く、裾は膝下まであるだろう。肩まわりは金属製のプロテクターの様なもので鎧われ、喉元付近には赤い宝玉が取り付けられていた。

どことなく神官服に似た形状のそれは、さながら邪教の法衣の風情である。

「お気に召しますでしょうか？」

店員に感想を求められ、サイトは渋い顔を見せた。

「うーん、さっきのよりはまだまだもただけど、なんか悪者くさい服だな」

「そうか？ オレは気に入ったが」

サイトがいかにも気乗り薄な一方で、ムジユラの仮面は満足気な様子を見せる。

「ヒラガ、これにしておけ」

「いや、お前はそういうけどさ」

邪教服（仮）を薦めるムジユラの仮面だが、サイトは難色を示す
ままだ。

「お前が着る服ということとは、お前に被られるオレの服でもある。
オレにも選ぶ権利はあるだろう？」

「言われてみりゃ、そうかな？」

「どの道、オレの姿と相性のいい服の造形など限られている。どれ
であろうと、どうせ大差はあるまい。ならば、余計な時間を掛けず
ここで手を打っていいんじゃないか？」

「それもそうだな」

しかし、あっさりとムジユラの仮面に丸めこまれてしまった。

「Hey! タバサ様」

扱い易すぎるサイトにキュルケが呆れていると、ナビィがタバサ
に声を掛ける。

「仲間を疑うみたいで嫌ですけど、ムジユラのこととはよく見ておき
ましょう」

ナビィの言葉に、タバサは頷いてみせた。

「ムジユラ、臆面も無く意地の悪いところを見せるせいでかえって
憎めないところがありますけど……」

「そう感じさせるための振る舞いにも見える」

引き継ぐ様にタバサが言えば、今度はナビィが頷く。

「今のサイトにしても、随分簡単に言いくるめていた」

「ええ。サイトの単純さを差し引いたとしても、彼は時々よく判ら
ない説得力を見せる時があります」

「私が彼を被った時もそうだった」

ナビィの言葉を、タバサは肯定した。

「今までムジユラが何をしていたかは判りませんが」

「まずろくなことじゃない」

「まあそうでしょうけど、それはともかく、彼はどうも人の心を操る術に長けているみたいです」

だから、とナビィは続ける。

「ムジュラは、ワタシたちが彼を嫌わないギリギリの線を見抜いて行動してるんじゃないかって思えるんです」

同僚を悪くいうことに気が咎^{とが}めるのだらう、ナビィの声は多少気まずそうだ。

「多分、彼がその気になればもつと善良に振る舞うこともできたでしょうが」

「悪事をした時に、私たちの失望を買う」

「でも、冗談めかした意地悪を普段から色々やっていたら、多少のことではいつものことだってワタシたちも思うようになります」

ナビィの話聞き、タバサが思案する様に間を置いた。

「私たちが本当にその意地悪を受け入れるかは博打^{ばくち}めいているけれど、考え方は悪くない」

「はい。と、いつても、邪気の少ない彼が進んで悪事をするのではないと思いますけど」

「しない証拠にはならない？」

タバサに問われ、ナビィが頷く。

「仲間を疑うみたいで嫌ですけど、ムジュラのことはよく見ておきましょう」

「それはさつき聞いた」

「あ、ごめんなさい！ 癖なんです」

恥ずかしそうにナビィが笑うと、タバサも心持ち柔らかな表情を浮かべていた。

あらあら、すっかり仲良くなっちゃって

そんな両者の遣り取りを、キュルケは微笑ましく見守る。ナビィもなかなか頭の回転が速い様なので、聡明なタバサとは息が合うのかもしれない。親友が自分以外の友人に語り合う相手を得たことに、

キュルケは胸を温かくした。

でも、2人だけで盛り上がられるとちょっと悔しいわね
少し考え、キュルケは2名の話に割り込んでいく。

「タバサ、サイトの着替えは決まったみたいだし、私たちもドレス
を見ていきましょうよ」

言うなり、キュルケはタバサの手を取って店員に声を掛けた。親
友の友人が増えたことは喜ばしいが、付き合いの長い自分よりも睦
ましい様子は少し面白くない。

あたしって、もしかしてすごいわがままなのかもしれないわね
心の中で呟くと、キュルケはタバサにはどんなドレスが似合うか
について思案を巡らせていった。

〈続く〉

〜第13話 使い魔たち、街へ〜（後書き）

以上、今回はここまでです。

と、いうわけで、烈風のカロンの名前がこの上なく間抜けな形で登場しました。騎士姫ファンの皆さん、ごめんなさい。

「烈風の騎士姫」であのいろんな意味ですごい服のことを読んだ時、ムジユラと合うのではと思いついてしまったので。惜しむらくは、この場にルイズが同行していなかったことが。

代わりに出てきた服のモチーフは、「ゼルダの伝説 トワイライトプリンセス」の悪役ザントです。あれもなかなか奇抜な仮面（兜？）被ってたので、ムジユラの仮面と入れ替えてもいいかなあというノリです。才人とザントで、語感も似てますし。

そして、冒頭のロマリア組についてですが、ご覧の通りハイラルやタルミナについて全く知りません。ロマリア組はいつも我々は何でもお見通しという感じでいまいち好きになれないので、たまにはお前らも知識ゼロであたふたせんかいという感じです。

次回はいよいよデルフリンガー登場です。長かったなあ、こんな初期のイベントまで来るのに……（泣）。

次回は才人視点からスタートです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5217u/>

三重の異界の使い魔たち

2011年10月3日03時29分発行